

拜見せぬ茶入に竹中小肩衝、利休所持唐物圓座、唐物鶴首銘養老、大名物平野肩衝、中興名物廣澤本歌等あり茶碗に堀井戸、八幡名物餌袋古三島銘上田曆、同銘兩國等あり名物關白釜、名物三日月茶壺、利休茶杓銘藪垣、名物羽衣硯、佐理卿筆女車之文、小倉色紙にしへの其他書畫什具枚舉に暇あらず左れば今日忠正伯が青山翁の請に應じて所藏名品の一部を展示せられたる其雅懷にすがりて余等同好は他日或は之を拜見する機会を捉み得らるゝかも知らぬ兎に角今日余等に無上の眼福を興へられたる酒井伯の高誼を感謝し又余等の爲めに此機会を願たれた姫路御道具拜見團長根津翁の功勞を多とすると共に茲に此望蜀の志望を表明して置いて時節到來を待たうと思ふ。

天祐品展覽

(大正十三年四月廿七日)

上

四月廿七日夕景より福井親庵(菊三郎)君の青山本邸で天祐品展覽と云ふ頗る興味あ

る一會が催された當夜の出席者は根津青山岩原謙庵、三井泰山池田成彬、有賀長文、藤原曉雲、田中釜吉、鹽原又策、諸氏の外に道具商側より梅澤鶴叟、伊丹揚山、山澄靜齋等が加はつて同勢約十四五名であつたが晚餐は支那料理で主人親庵君が食堂に於て披露する所に據れば昨年九月三日大震災直後一人の壯者が大風呂敷包を脊負ひ氣息奄々の態で玄關先に其荷物を卸したので取敢ず冷水などを興へて來意を聞けば私は濱町花屋敷常磐屋帳場高島破魔兒と申す者でありますが去る一日常磐屋が火中に包まれた時主人は倉庫前に多數の藏幅を取出し是れは大切な品物だから成るべく持てるだけ持出して呉れよと申されましたが私は多年奉公中主人より一度も小言を言はれた事なく常に其慈愛の深さに感じて居ましたから此處ぞ死力を竭して報恩の時節と覺悟しまして其掛物を背負るだけ背負つて主人と共に濱町を立退きました。が途中で主人を見失ひ掛物も大切なれど主人の安否も氣遣はしく只今まで飲まず食はずで所々方々彷徨ましたが豫て御當家は御華客様なりと聞き居りましたので兎に角此品物をお預申し身輕になつて主人を捜し出さんと存じヤツとの

思ひて此處まで辿り着いた次第でござりますと熱涙を揮つて語り出でた其殊勝さに自分もホト／＼感じ入り品物は確に當方に預り置くから安心せられよと言ふのを聞き壯者は俄に元氣附いて主人搜索に出掛けたが程なく麻布邊で其所在を發見したさうであつた而して其掛物は爾來自分が預つて居るが是れは所謂天祐品で常磐屋が積善の餘慶とも見るべき者なれば之を諸君の觀覽に供して一は常盤屋主人の爲めに之を祝し又之を取出した高畠なる者の義心をも御紹介致さんと今夕此一會を催した次第であると言ふ事であつた。

下

濱町常盤屋主人酒井正吉は平常風雅を嗜んで書畫器具收藏の富は無論東都同業者中に冠たる者であつたが其大半は先代主人が明治初年にポツ／＼買ひ集めて置いた者で中には今日容易に手に入れ難い名品も少からず昨年九月天祐に依つて火難を通れた掛物として當夜福井邸の各室に掛け列ねられた優秀品は

一、啓書記筆大黒天

一、宗達筆蓮水鳥圖

一、光琳筆琴高仙人、百圖所載

一、豐彦筆獅子牡丹、淺黃地金更紗丸表裝

一、其一筆雪持松圖

一、乾山筆着色萩の花並に讚

一、抱一筆圓窓中富士、左右牧童樵夫

一、應舉筆青楓瀧圖

猶ほ此外にも十數幅あり合計二十餘點は高畠の殊勳に依つて九死に一生を得た者では是れがムザ／＼火焰に舐め盡されたらば如何と思へば之を百難中より救ひ出した其人の勇俠を感謝せずには置かれぬのである而して常盤屋には此外今一つ幸運な事があつたのは是れも矢張同家出入傳屋の主人で藤木清太郎なる者が豫て常盤屋第一の寶物として知られて居る青磁浮牡丹瓢箪形花入と九谷色繪鉢の二品を預かつて大川の水中に半身を沈め火の粉が花入の箱を焼き盡した時着物の袖を引き

ちぎつて青磁瓢箪の胴中を括り無事に之を保護して常盤屋主人に引渡した事で當夜此兩品も來客の觀覽に供されたが此青磁花入は元江戸で大名人夫口入業を營んで居た米久事田中久左衛門の所藏で其頃より非常に有名な者であつたさうだが青色滴るが如き其中に浮牡丹の模様歴然と現はれて尺五寸許りの瓢箪で兎の毛で突いた程の疵さへなき其花入が彼の大震災を経て些の損傷もなく舊主に復つたと云ふのは全く以て天佑で常盤屋主人が平常能く其使用人を愛撫した陰徳の陽報と云つても宜からう處で當夜福井君の報告を聞いた賓客一同は聊ながら釀金を募つて右書畫道具救濟二殊勳者に賞與する事としたが是れと同時に福井君が此一會を催して興味ある美談を報告せられ且つ其天佑品を同好者に展示せられた好意を感謝して午後十時頃一同同邸を退出した。

三派聯合

上

政友會代議士山本條太郎君が福井市の政戰に勝利を占めエムピの榮冠を戴いて歸京するや忽ち例の安樂會の幹事を申渡され五月三十日夕新橋花月樓で同會を主催する事となつた是より先き同人は君が前回僅々三票の差を以て當選した其形勢より推察して今回は捲土重來の同政敵に對して苦戰否敗戰なるべしと竊に疑懼の念を抱いたので五月の安樂會は君が當番幹事であるに拘はらず此際君を煩はすのば餘りに氣の毒なりと思案して暫く形勢を觀望して居た處が案外にも目出度當選の吉報が傳はつて來たので其祝勝かたゞ豫定通り君に安樂會を主催せしむる事と爲つたのである斯くて定刻常連が花月樓の奥座敷に打通つて床の間を見れば渡邊華山筆百姓一揆の圖横物が掛つて居た紙本淡彩で箱には竹槍席旗の圖と書いてあるが三人の百姓の一人は赤布を向ふ鉢卷にし一刀の鯉口を切つて獅子奮迅の勢ひを現はし又一人は蓑を着け菅笠を被つて鋤を肩にし他の一人は同じく蓑笠で幟の如き大旗を擔ぎ各草鞋ばきで物凄き形相を爲しつゝ今や目的地に押寄せんとする處であるが赤布の向ふ鉢卷を爲した達磨の如き人物が高橋總裁の寫生の如く他

の二人も見様に依つては加藤犬養を聯想せしめぬでもないので誰言ふとなく是れは三派聯合を當て込んだ者だらうと其當意即妙の出品に感服したが此一幅は華山の變り物で登の一字落款に樂全堂の細長き印章あり元三派聯合の世話役三浦觀樹將軍の所藏であつたと云ふのが此場合愈々適切でもあり又皮肉でもあつた而して此掛物の前には紅花綠葉軸盆に抱一上人筆狸遊戯繪卷物を飾られたが是が又頗る寓意のありさうな珍巻で狸が例の八疊敷を伸縮して或は大風呂敷と爲し或は肌掛船と爲し其他種々の珍藝を演じて居る圖で蓋し彼の高山寺什物鳥羽僧正覺猷筆猿兔蛙遊戯繪卷物より換骨奪胎した者であらうが奇想天外より落ち來つて諧謔中に自ら諷規を含む處に上人の才筆拔群なるを見るべく卷末に

おのが名をさかさしに讀んできぬた哉

の一句があるのも面白い三派聯合と云へば其中には随分多藝な狸も交つて居る事だらうが今夜の主人が其一人であるか否かは御馳走に對して茲に明言せぬのが穴賢であらう。

下

山本代議士が安樂會の床を飾つた華山の百姓一揆幅抱一の狸遊戯卷は護憲三派聯合の時局を仄めかした際物で寸鐵客を殺すの概があつたから晚餐中も之を話題として談論湧くが如くであつたが聽て懷石の御馳走相濟むや別席にて薄茶を呈すべしと云へる主人の挨拶に連れて六疊茶室に動座すればコハ如何に床に大正二年伊達家藏器入札會第一の呼物であつた牧溪筆朝陽縫衣の圖を掛け古銅福壽文字入盛蓋瓶に大山連華一輪を活けられたる風情全く豫想外にして如何に負け惜み強き當會の常連でも是れには惜氣なく三拜せざるを得なかつた顧みて更に道具疊を見れば朝鮮切掛風呂に眞形釜を掛け志野歪み口水指を置いて薄茶一服の趣向を凝された其道具組は左の通りである。

- | | | | | | |
|----|----------|----|-----------|----|-------------------|
| 香合 | 青貝内朱唐子圖 | 炭斗 | 唐物細竹組底四方 | 火箸 | 鍍唐草象眼 |
| 羽箒 | 野雁 | 茶入 | 秀次作頭切丸形 | 茶杓 | 片桐石州作筒に宗仙のおもかげとあり |
| 茶碗 | 青井戸小服銘破笠 | 替 | 了入造黑白藥掛分け | | |

如上器物の外建水は木地曲蓋置は青竹引切で菓子器の砂張懸子盆は大に注目に値ひし時代組物釜敷まで取揃へて優に一會の茶事を行ふべき準備に些の遺漏なかつたのには一同大に敬服すると同時に之を正式の草庵茶會で見事の出來なかつたのを甚だ遺憾としたのである左るにても今夜主人が此席に於て床に朝陽縫衣の圖を掛け薄茶に青井戸茶碗銘破笠を使はれたのは有心か無心か頗る眉唾ものである現今主人の政界に於ける位地は決して尋常陣笠ではあるまい況んや破笠に於てをやだ左すれば是れは事實の反對を表明したる所謂得意的謙遜と見るべきであらうか又朝陽が衣を縫ふの圖は稍もすれば破綻を豫想せらるゝ三派聯合の前途に對して主人が一脈の老婆心を仄めかした者ではあるまいか或は他日其破綻を見んとするの際之を縫合するを以て自ら任ずる者ではあるまいか併し其場合には斷じて彌縫策に出でぬやう宜しく御注意を願ひたいなど之を交ぜ返す者もあつたが主人が政界に於ける未來の多望なる程茶界に於ても亦有望なるを確め得たのは安樂會同人の大に満足する所である。

女人高野

(大正十三年六月四日)

女人高野とは大和國宇陀郡ウ一山室生寺の俗稱で役の行者が天武天皇の勅命を奉じて草創した名刹である其後淳和天皇の天長元年弘法大師が神泉苑で雨乞ひの祈禱を行じた時其法力を以て勸請した北天無熱の善女龍王を封納すべく當地を選んで龍王鎮座の寺院を建立する事と爲つたので朝廷より八百餘丁歩の山林を下賜せられ茲に眞言秘密の道場が經營せられたのであるが大和名所圖繪には此靈場を形容して

室生寺は日域無双眞言の勝地にして伽藍五宇僧院三宇五重塔及び十三級石塔織田常眞石塔等あり松杉峰を包みて青天に連り巖石樹を洩れて黒雲かと疑はれ麓にめぐる川浪は春の雪の碎くるに異らず地に亂るゝ落葉は秋の雨の降るかとかやまたれ橋を踏み行けば廬山の寂しさを想ひ山路を攀ち登れば鷄足の静けき宛

ら斯くやとこそ想ひやられける弘法大師の住み給ひし慈尊院は朽ちやらずして山僧住めり護摩を修せられし巖窟は苔のみ蒸して風こそ宿り侍れ伽藍をならべて露繁く寶鐸響きありて嵐すさまじ斯る靈區なればとて世の人女人の高野とも云へりけり

と記述してある紀州高野山は女人禁制であるのに當寺は同じく弘法大師の開創でありながら女人の參詣を許したので女人高野の名稱が出たのである兎に角深山幽谷で然も伽藍が一々懸け離れて居るので創立以來千百年を経た建造物佛像佛具其他美術的裝飾が焼失朽損の災害を免れて比較的完全に保存し得たのであらう今や日本の古寺中現存する者では第一に推古時代の法隆寺を推さねばならぬ其次は天平時代の建立に係る奈良の三月堂唐招提寺などを算するのだが此時代の寺院は現存する者が割合に多い然るに弘法大師時代即ち概して弘仁時代と稱する建築物は高野東寺叡山等が悉く焼失し盡して居る今日此室生寺が唯一の遺物で其上法隆寺程大規模でなくても彌勒堂金堂灌頂堂及び五重塔などが建築當時の儘で残つて居

るのは眞に日域無双と稱して宜からうと思ふ。

二

余は數年來室生寺參詣の素願があつたが今日まで其機會を得なかつた豫て聞く所に據れば當寺は新緑の候郭公最も多く寺前を流るゝ室生川には夜分河鹿の聲繁く其後山には時に佛法僧の啼く音が聞ゆると云ふので同じく參詣するならば其時節を選びたいと思つて居た處が、今年には幸ひ此頃少閑を得たので六月一日東京發夜行汽車で翌二日朝入洛し少憩の後午前十一時發汽車で奈良に着いたのが午後一時頃であつた幸ひ東道を依頼して置いた道具商柳生彦藏氏が同停車場に待受けて居たので是より早速櫻井行の鐵道に乗換へ同驛より輕便鐵道で初瀬に着いたのが午後三時時であつたらう斯くて此處より自動車に乗り込み四時乃至四時半頃には約五里程の室生村室生寺の門前まで着到する積りて出發し初瀬より榛原まで約一里半榛原より大野まで殆ど同距離である山畦荒村の間を經過したが本來此邊は神武天皇が大和に攻入られた時通過せられた道路だと云ふ事で往時大阪方面より伊勢

参りをするには此道路を経て室生より山越に松坂に出るので最も伊勢及び伊賀に接近して居て格別の難澁もなく大野までは自動車が行進したが大野に着して同地の警察署で聞合すれば是れより室生まで新街道約二里は一時自動車が行進したが近頃道路修繕の爲め路傍に砂石を堆積してあるから當分通行を許可せぬとの御託宜なので左らば人力車をと町中を穿鑿した處が今日は一臺も見當らぬと云ふのに今更弱音を吹いても追ひ附かねば是れより室生まで僅か二里程位を何條他力に頼る事やあるべき所持の膝栗毛に鞭つて一氣に目的地に乗り附くべしとて人足一人を雇うて之れに信玄袋を荷はせ余と柳生とは徒歩でテク〜と出掛けたが程なく室生川の下流を流つて約二十丁程進んだ處で直進すれば新街道右折して山間に入れば舊街道で舊は新より約半分近道であると云ふのに釣込まれて下駄履きの儘舊道の方を進み行けば爪先上りて溪流に沿ひ杜牧之の文句ではないが遠上寒山石徑斜の趣があつて山愈よ深きに隨ひ道愈よ險なるには聊か面喰はざるを得なかつた

三

大野より室生行の舊街道は溪流を渡り石徑を躰え段々急勾配になるので頗る困難を感じたがヤツと其峠に達して前方を望めば室生山は臥虎の形を成して眼前に横はり満山の新緑滴るが如き其麓に見ゆるのが即ち室生寺である而して其伽藍や五重の塔は多くは樹木に隠されて居るが門前を流るゝ室生川に時ならぬ虹の如く朱塗の反橋が架かつて居るのは其儘一幅の好圖畫である乃ち此反橋を目標として次第に急坂を下り行けば山畑の間に三々五々の村舎あり漸く寺門に近くに隨つて人家は稍稠密と爲り中には道者宿なども見受けられたが今夜は室生寺に一泊の豫定であるから最早虐待の極點に達した膝栗毛を曳き摺りつゝ彼の反橋の下に立つたのが午後六時頃で大野より此處まで約二里程に二時間少餘を費したのである扱て此反橋の前には嘗て當寺の一部が類焼した時仁和寺門跡より贈られたと云ふ御所式の山門が巍立して門内突き當りに本坊書院及び庫裡が連続して居るから一見如何にも豪勢ではあるが伽藍や五重の塔が何れも山腹に散在して居るので全體の

寺觀を一眸中に收むる事を得ないのは聊か物足らぬ心地がした斯くて門を入つて左折して庫裡の方より案内を乞へば若僧一人飛んで出て餘りお着の遅き爲め今日是最早お出でがないのかと思ひましたなど摺揆があつて直に廣々とした上下二段打通しの書院に通されたので取敢ず風呂に入つて夕飯の膳に向はんとする時當寺の住職高圓一明師が紫衣を着して出座あり慰懃に余等の遠來を謝したる後、同席で夕飯を共にし當寺の來歴別して一時官没された寺有山林二百數十町歩を取戻すに就ての訴訟の顛末、佛法僧の啼き聲、美術行脚客の訪問、特別建造物である堂塔修覆の經過等様々の問題に觸れて滔々と辯じ來り辯じ去る其快濶洒脱の態度には少からず愛敬と興味を感じてヤット六十位の年輩かと思へば當年七十歳なりと云ふ小柄ではあるが精力絶倫と覺しく二時間餘の徒歩に疲れ果てたる余等は頓て其雄辯に壓倒せられて午後十時頃煎餅の如き木綿蒲團中の人となつた。

四

山寺に一泊するのは都人に取つては可なり難儀であると同時に又頗る興味ある事

である殊に當寺では新緑季節夜更けて佛法僧の聲が聞かれると云ふので余は隣室に寝て居る柳生と申合せて何でも今夜は其聲を聞き漏さぬやう互に注意すべしとて折々寢覺めしては耳を澄したが郭公やら河鹿やら其外に何やらんキイ〜と云ふ甲高い鳥聲は聞き附けたが佛法僧らしき聲を聞き得なかつたのは如何にも残念の至りであつた高圓師の説に依れば佛法僧は多く拂曉に啼く者であるが佛法僧とは啼かず唯ブツポ〜と稍聲尾を長く曳きつゝ啼くとの事である余は大正六年六月下旬馬越化生根津青山故朝吹柴庵翁等と高野山寶城院に一泊の折、奥の院にて佛法僧が啼き居ると云ふ報告に接して深更現場に駈け附けたが兎角精進の悪い人間は此鳥の聲を聞く事が出来ぬと云ふ傳説が適中せしやうにて何時まで待つても啼き出さぬので不平だら〜で歸院した事があつたから今夜こそと思つて待ち受けたが又々彼の鳥に愛想を盡かされたのはイヤハヤ笑止千萬である斯くて何時となくトロ〜したかと思ふ間もなく後山の鐘樓より曉天の空氣を劈いて搖曳長き鐘聲の陰々と響き渡る其清々しさは餘所に知られぬ感興で全く塵外の想ひがしたので

ある斯くては朝寝も心に任せず五時頃に早や起出づれば高圓師は朝飯前に自分が一應御案内致さんとて已に玄關先に待受けて居るので盥嗽も匆匆にして立出づれば師は先づ門を出て室生川に沿むたる松並木の一端より左折して石段を上り森々たる老杉の間に分け入られたが此時前面を仰げば小高き石階上に金堂あり其左手に彌勒堂即ち光明堂あり何れも檜皮葺の簷深く打見たる所華奢造りで形式優美なのが有難く双方共に額は大師の筆である山中の濕氣を防ぐが爲めか堂の外面は紅ガラ塗であるが其薄れ掛けた丹色が周囲の杉青松緑に映帯する光景は土佐派の山寺縁起繪巻物を左ながら眼前に開展したやうであつた。

五

室生寺住職高圓一明師は甲斐々々しく余等を彌勒堂に案内して其秘佛彌勒菩薩を開示すべく尺五寸許りのくの字形の先に曲鈎ある大鍵を堂扉の中央下部にある錠前の穴に差込んで開扉されたが是れは定めて弘仁時代其儘の鍵なるべく一種異様の形式であつた扱て此堂は四方に勾欄を繞らし縁内約五間四面で其中に入れば周

圍に九尺許りの廊下を取り内陣は凡そ三間半四方で中央に黒塗りの大厨子あり之を開扉すれば余等の目で當山第一の名作と見受けらるゝ彌勒菩薩の木像があつた今朝は夜來の濛雨が未だ霽れず堂内の光線が如何にも不十分なので若僧の持參した提灯を掲げて近寄りて之を諦視すれば面相手足又は衣紋の柔和なる作行非凡なるのみならず細密なる彫刻ある光背若くは蓮臺の完全具足して居るのが有難く是れは寺傳弘法大師作となつて居るが其作者は誰であつても胸中の括れた工合などは少しく推古式に近い所があつて兎に角木彫佛では奈良諸寺に於ける天平時代の名作に比して決して遜色なき逸物と思はれた又此彌勒像の右手に高さ約六尺許りなる釋迦如來の木彫座像があつたが是れも頗る名作で其指に水搔のある形式より云へば縦令へ弘仁時代とまで行かずとも可なりの古作であるらしい當堂内には此外役の行者の木像などもあつたが最も傑出したのは右彌勒釋迦の二像であつた斯くて彌勒堂を出て是れより十數間を隔て、斜に當堂と相對峙する金堂の秘佛を拜見すべく石階を登り行けば右手に天神の小祠があつて其奥に亭々天を摩する一株

の老杉があるが是れは當山第一の大木で先頃大阪邊の材木屋が之を見て五萬圓なら即座に手を拍ちませうと真面目に申し出されたのには呆れて物が言はれなかつたと高圓老師のカラ〜と大笑したのも時に取つての一興であつた。

六

室生寺の金堂は彌勒堂よりも一嵩大きく正面に高く懸けられた金堂二字の額は弘法大師の筆と云ふ事であるが彌勒堂には光明堂灌頂堂には悉地院と云ふ額面があつて何れも同筆と領かるゝ者である此堂は元祿年間桂昌院殿の寄進で前面朽廢の部分に補造したが後部三分の二は弘仁當時の原作其儘で造作の形式は總て彌勒堂と同様縁端に勾欄を繞らし内陣の周圍に廻廊を取つてあるが中央に立たせ給ふは木彫釋迦の立像で其丈八九尺もありぬべし而して向つて左に文殊及び十一面觀音の二立像あり右に大小二體の木彫地藏菩薩像がある而して其内釋迦と地藏とだけに木製の光背があつて其前面に佛像の繪畫があり〜と殘存して居るのは頗る有難く又此釋迦の背面にある壁板に一層大型の佛像畫が一面に描き詰めてあるのは

別して美術鑑賞家の尊重に價し法隆寺壁畫とまでは行かなくても日野法界寺の阿彌陀堂醍醐三寶院の五重塔大原往生極樂院の壁板畫等より少しく時代が古いだけ一段貴重であらうと思ふ佛像の方も釋迦を始めとして文殊觀音地藏の五體とも弘仁時代には相違なくたとへ非常の傑作と言はれぬまでも其凡作ならざるは勿論である扱て金堂より更に石階十數段を登つた處に在る灌頂堂即ち悉地院は當山に於ける弘仁遺物中の最大伽藍で本尊は如意輪觀音であるが特別保護建造物として目下大修繕中なので其本尊は厨子諸共當堂内に留置してあつたから同時に開帳を乞ふて仔細に之を拜觀したが是れは所謂六臂式の木像であつた元來推古時代の如意輪は大抵双臂式であるが弘仁まで降るや早や六臂式となつて一臂は例の頰杖を突き其他は寶珠を持ち蓮華を捧げ數珠を爪繰るなど其形式が大に複雑する程品位は著しく降下するの嫌ひがあるので余は古式の二臂を悦ぶ者である。

七

金堂の拜見終るや余等は目下修葺中の灌頂堂即ち悉地院を一覽したが高きトタン

屋根の外圍そとを造り風雨に曝さらさぬやうにして一旦全部を解き放し腐朽の部分を取り去りて更に従前通りに組立つるので當堂の修覆に六萬餘圓を要するとの事である扱さて此灌頂堂より更に石階數十段を登り行けば此處に大師一夜建立塔と呼ぶる小型で姿態優美なる五重塔があるが其第一重の四方に夫れそ其方面受持の佛像を安置してある外別に裝飾とてななき故斯く言ひ傳へた者であらう此五重塔に並んで織田常眞の廟又當山に多大の助力を興へられた桂昌院殿の石塔或ひは同院並に五代將軍綱吉の信寵を得て江戸神田に護持院を建立した隆光僧正の石塔もあつたが僧正は嘗て當寺の住持たりし時久しく南都東大寺即ち法相宗の管領に屬して居た當寺を元の眞言宗に取戻した大功勞者で桂昌院殿の寄進も畢竟僧正の勸誘に因る事であらう又織田常眞は豊臣秀頼に味方したので大阪落城後大和に隱退し三輪山の麓櫟の本に居住したが當寺に歸依深く多分其生前に廟所を茲に建立した者であらう是より奥の院の方に進み行く左側に在る圓形山は當山の中央に位する一峰で弘法大師が其頂に如意寶珠を埋めたので之を如意山と稱し一基の石塔が建

てられてあるさうだ元來當山は小峰九箇に分れ其間に八つの谷があるので之を八葉の蓮華と看做して居るさうだが山骨堅石より成り奇岩怪石千體萬狀で處々に龍穴鬼城仙人窟など云ふ巖窟がある此等は神武東征以前彼の土蜘蛛等の棲息して居た遺跡ではあるまいか扱て奥の院の磴道兩側は老杉天を摩して晝猶ほ暗く登り進んで山腹に達した處に御手洗石があつて是より四百十二段の石階が一直線に延長して居るのを見ては聊か夕ゆふの氣味であつたが七十の老僧高圓師が恰も平地を走るが如くサツツと此石段を登り行くに對して今更御免蒙るとも言ひ出し兼ね氣息奄々ながら遂に此長石階を登り詰めて奥の院大師堂に達し其前なる御供所に腰打掛けて暫時休息したのである。

八

奥の院大師堂は約四間四面と覺しく大師四十二歳の時親から刻まれたと云ふ當山第一の秘佛木像が安置してあるが當日は高圓師が嚴肅に呪文を唱へた上特に開帳して示された但し厨子内暗くして分明には見分け兼ねたが大師自作と云ふのは唯

寺傳だけだらうと想ふ當堂の前面には諸佛出現巖俗にツクネ岩と云へる一石山があつて其上に高さ一丈餘の石塔が立つて居る要するに當山は比較的一處に密着して石峰並び立ち溪流其麓を繞りて樹木繁茂し流石に大師が選定した靈場に背かず日本國中稀に見る所の勝地である斯くて奥の院參拜後例の四百十二段の石階を降る時は昇るよりも更に一層困難で途中でグラ〜と眩暈しさうになるのは蓋し全國無比の長石段であらう扱て朝飯前の伽藍拜觀が殆んど二時間に涉つたので一旦本坊に歸つて朝食後高圓老師の案内で今度は秘密靈寶藏と云へる倉庫に入り大師請來の佛具やら胎藏金剛の兩大曼陀羅など數々の靈寶を拜觀したが細説すれば際限がないから是れは省略して置かう當山の名勝は卅七箇所と註せられ室生川の兩岸には様々の神秘的遺蹟もあるやうだが生憎雨脚の絶え間がないので午前十時頃厚く高圓師の好意を謝し借り受けた油紙の合羽を纏ひ尻端折で雨中の徒歩と出掛けたが今度は嶮岨なる舊道に懲々して室生川に沿うた新道を大野まで約二時間半で着到すれば此處に自動車が待受けて居たので一散走りに初瀬まで乗着け元來た

道を奈良まで引返したのが午後二時頃であつた斯くて余は多年志望して居た室生寺參詣を果したが平常精進の足らざりし爲めにや又しても佛法僧を聞き得なかつたのは遺憾である又折悪く梅雨に際して限なく山中の名勝を歴觀する事の出来なかつたのも残念である併し當山の概觀は腦中に納めて如何にも殊勝な靈場である事を認められたから古美術的趣味ある方々には必ず一度參詣すべくお勧め申さうと思ふ弘法大師も

わが身をば高野の山にとむとも

心はひろに有明の月

と詠まれたさうで特に當山を愛された者らしいが高野と比較して考へて見れば如何様左もありなんと頷かるゝ節がないでもない余は折を得て其内今一度參詣する積りであるから委曲は又其折に再説する事としやう。

飛雲閣劍仲忌

(大正十三年六月五日)

西本願寺法主攝理大谷尊由師は同寺境内飛雲閣憶昔庵に於て藪内家祖劍仲居士三百年回忌茶會を催し五月下旬より數回を重ねられたが余は六月五日の客組に加はつて之に參席するの光榮を得た劍仲居士は寛永二年九十二歳で永眠したから本年は恰も其三百年遠忌に相當する而して尊由師が今度其遠忌茶會を催さるゝのは本願寺と藪内家と極めて深い因縁があるからである蓋し此因縁は劍仲居士と天正時代に最も有名なりし彼の顯如上人との間に起つた者と覺しく上人が五十歳で遷化せられた文祿元年には劍仲は既に六十の老翁であつたから居士は年長者として茶道上上人の歸依を得たのであらう其上波は長壽を保ちたれば其次の准如上人とも極めて入魂であつたらしい而して准如の子良如の時より西本願寺法主は正式に藪内宗匠を茶事の師範と爲し其次の寂如上人に至つては最も茶事風流を好まれたので藪内家を眷顧する事頗る厚く此頃より法主は藪内流を皆傳する慣習と爲り毎年清酒一樽鹽鱒一本を宗匠方へ贈るを嘉例として近年まで之を繼續したさうである

劍仲は藪内家に現存する木像を見ても容易に推察せらるゝ通り容儀端正なる中に福徳圓滿の相好を具へ所謂明哲身を保つて九十二歳の長壽を享けられた人であるから當時權勢ある武門に隨從した千利休や古田織部などの悲惨なる最期を見て處世上大に悟る所あり俗世の榮枯に關係なき宗門に寄託して安らかに其家業を傳へんと考慮した者であらう劍仲居士の此覺悟は果して能く世間的禍機に遠ざかり維新滄桑の變に遇ひても猶ほ其傳家の名器を保存して今日に至つたのは畢竟其託する處を選みて本願寺と通家の交はりを結んだ居士先見の明に因るのである而して今年には本願寺と斯かる縁故ある劍仲居士の三百年遠忌に相當したのであるから尊由師が多年の縁故を顧念して飛雲閣に其修忌茶會を開かれたのは誠に當然で且つ殊勝の盛舉と謂ふべきである。

二

余は六月一日東京を發し京都奈良を経て二日三日の兩日を室生寺參詣に費し四日一日京都に休息して翌五日の正午西本願寺を訪ひ猪熊七條上る入口より罷り通れ

ば門内に待受けた案内役は右手の通路より飛雲閣の寄附へと導かれたから夏木立の鬱倉たる間を潜り抜け小高き處にある曉花亭と云へる四疊半の一構へに達すれば當日の相客根津青山下郷傳平松風嘉定服部七兵衛諸氏は皆々既に先着して居た因つて先づ床中を窺へば利休居士の消息が掛つて居たが其文句が讀みにくいから今讀み得る所だけを掲ぐれば

玻茶碗まし候今お立て候茶にはこれがまし候數寄には別の茶碗能く候何も拜上に可申候頓首

藪どの

此消息が此處に掛けられた以上は定めて其所謂玻茶碗乃至數寄の茶碗を本席に用ゐらるゝならんとは以心傳心一同の豫想する所であつた扱て此待合は言はゞ第一待合で席中何等の取設けなく頓て五客打揃ふや案内役より第一の待合に通るべく促されたので次第に飛雲閣の方に近寄り其庭前の池邊に到れば一段小高き丘上に茅葺の圓形亭があつた折柄小雨が降り出したから露地笠を翳して雨中の光景を眺

めつゝ頓て此亭内に打通れば青磁二足瓶掛に天貓手取釜を掛け本願寺焼印入新調木地丸盆に三島振出しと新茶碗を載せ染附火入を備へた藪内好み松葉手桑葺盆を置き合されたから香煎湯を啜りつゝ池邊の新緑を隔てゝ巍然たる聚樂の遺構飛雲閣を眺め居れば又々案内役が出て來つて更に腰掛にお通りあれと言ふにぞ池に沿ひたる彎形の露地を辿りつゝ飛雲閣の一端に附屬する憶昔庵と云へる茶室と相對する腰掛の内に座を占むれば此處には厚手の讃岐圓座と桑木地葺盆に信樂瓢形火入を備へてあつたが其火入の底に利の字を偏と旁と引放して彫附けてあつたのは所謂利休信樂にやあるらん兎に角恰好よく火替り面白き珍器であつた。

三

飛雲閣憶昔庵前の腰掛は何時頃建造された者だか審かならぬが其屋根瓦は樂一入の焼かれた者で後年數枚破損したのを了入が補造したと云ふ事である小形で薄手の赭瓦が杜の下露に濕ほひて苔色蒼然たる其中にチラクと丹地を現はしたる其風情得も言はれず見廻せば正客の腰掛と相對して壁上に魚様牡丹形懸板が吊して

あつたから撞木を把つて五客の着到を報ずれば庵主尊由師は程なく憶昔庵の躡口を開き片手に露地笠を翳して柴折戸の邊まで出て來りて默禮せられたので乃ち根津青山翁を正客に推して順次入席する事となつたが庵室前の蹲踞石は利休好みの車軸形で聚樂より移轉した者だと云ふのに一同無限の興味を感じた斯くして次ぎく入席して床中を見れば上下茶地北絹一文字なし上代紗中表装の恩斷江禪師墨蹟が掛つて居たが其文句は左の通りである。

出處從來不自期 滄波滙鳥偶忘機 大千沙界俱旅泊 一箇閑身何處歸

雲去帝鄉寧有跡 珠回浦藏合韜輝 隣夫一見休相訝 吾本昔人殊昔時

百丈清藏主 將還日本 出示前淨慈靈石翁餞行之偈 因次韻云元統三年十二月

三日 文智老人覺恩 書于雲門千年之閣

右末尾に二印あり其一是佛師恩て他は其文字を審かにせぬが是れは當寺秘藏の一軸で大正二年藏器賣却の際にも保存の部に加へられた者であるさうだ紙中上下に十分の餘白あり文句と云ひ筆致と云ひ蓋し斷江墨蹟中の白眉と稱すべき者であら

う扱て當席は敷内の燕庵に酷似し四疊半の中に床を取りて疊敷三疊半の其右側に約二疊敷の次の間あり躡口より此次の間を経て本席に入るのであるが茶道口が本席の一端にあり給仕口が次の間の一端にあるので點茶の時と懷石の時と客座が變つて反對になる其趣向は總て燕庵通りだが唯燕庵は此席に比して次の間が約半分位に過ぎぬ是れが二席相違の點である。

四

憶昔庵の道具疊に沿ふた壁上に憶昔の二字額が懸つて居る其筆致の高雅秀潤なのは固より凡筆ならずと思はれたが落款も印章もないので後之を庵主に問へば良尙法親王の御筆と云ふ事である而して其道具疊の一端には檜扇を開いた形を組合せて雲華焼様に作られた土風爐に利休好み阿彌陀堂釜を掛けられたが此風爐は庵主の御自作で白地に緋襷の如き赤焦げ模様のあるのが面白く夫れに此阿彌陀堂釜が普通のと違つて稍小形であるので能く此風爐に取合つたのは庵主の隠し藝たる製陶の意匠が如何に徹底して居るかを觀るに足る斯くて程なく庵主立ち出で、慇懃

に一同に拶埃あつた後、藪内好み青漆棲紅四方膳及び黒塗小丸碗で親から懷石を運び出されたが其献立は左の通りである。

汁 白味噌 刻み唐瓜 向附 志野焼瓢箪扇面組 合形若狭鯛細切、蓼 椀 はも、水前寺菜、柚

焼物 染付四方手附鉢 吸物 若狭鯛の臍脾 八寸 藤豆、ごり煮、メ

張肴 金欄手馬上盃形 同 御所丸御本鉢 同 道八焼紫陽花形小鉢、根芋

同 尾州鹽艸焼鉢 同 禁黨皿、若狭鯛の腸 香物 露山焼小鉢、澤庵

酒器 白磁蓋燗鍋、不味公好出雲焼、藤巻手附德利、京焼銘々盃

今日の懷石は本願寺及び藪内家出入懷石屋川友の庖丁であるさうだが材料萬端吟味に吟味して兩家外の註文には容易に應ぜぬと云ふ程の大凝屋であるから何れも結構の鹽梅であつたが就中お椀のはもは雪の如く白く豆腐の如く柔かく無論少しも小骨のないのは當家獨得との評判に背かず得も言はれぬ好風味であつた又其食器も澤山の強肴に應じて數々席上に現はれたが別して馬上盃形金欄手鉢の美麗なのが最も衆目を惹いて一座の人氣者と成り濟ました。

五

憶昔庵で懷石が終るや庵主は直に炭手前に取掛られたが炭斗は唐物竹組透し羽箆は野雁灰器は深草焼、火箸は眞鍮、香合は鎌倉彫臺牛模様で此香合の蓋の甲に染附臺牛と殆んど同様の臥牛を彫つてあるのが蓋し一品物と覺しく恩斷江墨蹟と寸分動かぬ取合せであつた斯くて炭手前拜見後一同以前の腰掛に中立すれば此腰掛は飛雲閣及び其庭の側面に位して背後に高く鐘樓が巍立して居る其鐘樓を木の間を透して望見するに簷内四面に精巧なる彫刻が施してあつて何様由緒ありさうだから試みに相客の服部老に問へば是れは元聚樂邸の井筒屋形であつたのを飛雲閣と同じ時に此處に移築して鐘樓に轉用した者であるさうだが此一事を以ても聚樂の建築が如何に豪華であつたかを想像するに足る斯くて暫時休息する間に銅鑼五點の合圖が陰々として新樹の間を傳はつて來たので再び入席して床中を見れば一見仁清作と頷かる、信樂藥錠の鞍形花入に山額及び野菊を活けられたが此花入は嘗て靈元上皇より當時の法主に下賜された者であるさうだ此時庵主は十徳姿で立ち現は

れ悠然と座を構へて濃茶手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた。

茶入 唐物朝倉肩衝

袋 伊藤廣東

盆 天川四方

茶杓 藪内劍仲作、同竹翁

茶碗 破天目及び眞熊川

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

如上器物中朝倉肩衝茶入は元と朝倉義景所持に因つて此名あり義景の娘は顯如上人の長男教如上人と婚約があつたので義景が織田信長に滅ぼされた時娘に此茶入を持たせて本願寺方へ避難せしめたが爲め爾來同寺に傳來し別に翁と云ふ銘もある然るに一時本願寺より出で、堺の町人の手に渡つた事があるので再び本願寺に返つた時其儘貴人の前に出されぬとあつて之を洗ひ清めた形跡があるが流石に其底に手を觸れなかつただけが仕合せである廣口で肩がキツカリと衝き胸に沈み筋一線を繞らし手取の極めて軽いのは其唐物なるが故である。

六

憶昔庵に於ける尊由師の點茶は茶入が唐物朝倉肩衝なので之を天川四方盆に載せ

て藪内流の盆點を興行されたが悠揚迫らぬ態度で敢て手前の巧妙を衒はず行云流水滯る所なく自然に進んで然も能く要領を得る所に其人格の氣品が現はれたのが如何にも有難く思はれた而して最初例の玻天目で正客一人に一服を點て残る四客に眞熊川銘雲井茶碗を使はれたが是れは彼の寄附遠花亭に掛けられた利休居士の消息中にある文句を其儘此處に活現した茶略で庵主の如き學識ある茶人に非ざれば到底思ひ附かざる趣向である而して所謂玻天目は内外共に黒薬で一點の疵なく外部腰廻りの土際に少しく黄薬を見て一見灰被ぎのやうなれども内面黒薬の光澤に玳瑁蓋と頷かるゝ所あり眞に完全なる名天目であつた又眞熊川は内外共に白釉の中に粉引に見るが如き浸み模様あり熊川は古來其茶溜りの鏡落の小さを貴ぶ者なるに此茶碗のが殆んど梅花一輪の大ききであるのは嘗て其比類を見ざる所なり全體薄作で氣品の飽まで高きが爲め雲井と云ふ銘も起つたのであらう又劍仲の茶杓は藪内第七代宗匠西洞桂隱齋竹翁の筒で今日の追善茶會には無くて叶はぬ一品である斯て濃茶終りを告ぐるやイザ廣間へと庵主の案内に連れて憶昔庵より直

に飛雲閣の書院に打通れば上下二段に分れた其上段の間に更に一段高き疊敷ある
是れは貴人着座の場所至尊臨御の折は言ふに及ばず太閤や關白は之れに座して
臣下に對面したのであらう而して正面の壁床には後西院天皇宸筆五月雨の一首懷
紙を掛けられたが其歌は左の通りであつた。

五月雨に小篠が原をみわたせば

猪名野につゞく昆陽の池水

宸翰は斯かる大書院の床に掲ぐべき者て然も時候相應の御歌一軸は又なく有り難
く拜された。

七

飛雲閣上段の床に向つて右手の書院に徑二尺もあらんずらん砂張の盆を置いて其
上に横長き盆石を飾られたが是れは東山御物末の松山とて日本に唯二つの盆石で
あるさうだ石は堅緻質で黒すんだ色の中に處處白斑が點布し緩勾配の富士山形で
中央少しく折重なり横九寸幅四寸許りの小石であるが之を縁廻りに四筋の沈筋を

繞らした大砂張盆上に安置せられた處を遠見すれば恰も蓬萊山が海上に浮んで居
るやうで雄大な氣象が一座に横溢するのは名物の名物たる所以であらう而して此
石は黒塗の鯨皮函中に納まつて居るが是れは東山時代に於ける何人かの意匠と覺
しく如何にも名石に相應した入れ物と領かれた寺傳に依れば此盆石は有名な吳器
一文字茶碗と共に十餘年間繼續した織田信長と本願寺との戦争和睦の記念として
信長より本願寺に贈られた者で此二品と石山城即ち大阪城とを交換したやうな者
であるから當寺が之を無上の重寶視するのは固より其所である扱て是れより次の
間に引下つて更に其床中を窺へば兆殿司筆寒山拾得の大幅を掛けて古銅象耳大花
入に大山蓮花の一大枝を挿まれたが床中及び襖は總て狩野永徳筆で瀟湘八景の圖
であるが爲め之を八景の間と稱するさうだ斯くて茶室寄りの壁際に藪内現宗匠好
み劍仲三百年忌記念唐銅風爐釜を置いて其傍に染附水指を飾り梅上尊融師が庵主
に代りて薄茶手前を興行されたが其器物は左の通りである

茶入 盛阿彌索

替茶入 出石燒廣口

茶杓 藪内竹心作象牙

茶碗 白手高麗及び鳴瀧燒 建水 銅器

蓋置 古銅笹蟹

菓子器 唐物朱輪花式

八

梅上尊融師のお手前で薄茶一巡するや余等は飛雲閣の縁先に立出でて其構造を拜見したが是れは聚樂に在つた時池の中島に建てられた一閣と覺しく正面水際に開かれた石段より登る處が玄關口で船より直に閣に入る趣向であつたらしい庭は果して原形を寫したのか如何を知らぬが見渡せば池の中央に一條の大石橋を架し奇岩怪石の間に躑躅の今を盛りと咲き出でたのが清漪に游泳する緋鯉と相映帶し新緑鬱蒼たる老樹の梢より本願寺殿堂の一端が顯はれ右手に當つて例の聚樂遺構井筒屋形の鐘樓が丘上に屹立して居る光景は何とやら天正時代に生れ替りたるやうな心地がする想へば此閣は豊太閣を始めとして當時の英雄豪傑が宴遊歡樂したばかりでなく歴代の至尊中聖駕を枉げさせられた方々も少からず近くは昨年皇后陛下の行啓あり憶昔庵で親しく薄茶を召上られたと云ふ事である斯かる由緒ある書

院及び茶室に於て法主攝理たる尊由上人が劍仲三百年忌茶會を催されたのは場所と云ひ主人と云ひ將た其器物と云ひ誠に天下獨得で三十餘年間東西幾多の茶會に出逢つた筈庵も未だ曾て經驗せぬ莊嚴高雅な興味を感得したが劍仲居士も定めて地下で感泣して居る事であらう扱て當日は餘りに拜觀品が多かつたから定めて記憶漏れもあるだらうが他日懷記を頂戴する事を得たらば追つて之を補正する事としやう猶ほ當日の所感に就き例の拙吟あれば之を左に掲げん

飛雲閣

樂みを聚めつる世の夢をなほ

うつゝに見する高殿ぞこれ

憶昔庵

山を抜く雄々しき人もこの庵に

木の芽烹し世のしのばるゝかな

甲子初夏、大谷尊由師、張藪内劍仲三百年忌茗筵于西本願寺飛雲閣、

余亦辱寵招、乃次壁間所揭恩斷江詩韻、賦呈道謝

飛雲高閣趁幽期

半日清歡且息機

池長細蕪魚共樂

庭交深樹鳥知歸

瓦爐活火茶香迸

珠壁遺詩墨暈輝

師爲劍翁修遠忌

一年好景綠陰時

魯堂朝茶

(大正十三年七月三日)

上

當春余は京都に於て圖らず厚肉の大竹を獲たので自ら花入三本を作つた其中の尺八一本を仰木魯堂が所望して何か其銘を書附けてよと云はるゝにぞ正面節上に鉢杉の如き二本の黒斑があるのを三輪の二本杉に見立てゝ之を三輪と名づけた處が魯堂は胸中已に成竹あるものゝ如く何れ其中一會相催して御來臨を乞ふべしと約されたるに數日前來訪して向暑の時節とて俄に朝茶一會を思ひ立ちたれば七月

三日午前六時半千駄谷原宿寺暇樂庵に臨席せられたしと云ふ折悪く余は少しく腹加減を損じて茶會は當分禁物であつたが左ればとて久しき豫約を辭するも如何と示刻參庵して寄附に通れば相客は團令夫人田中親美梅澤鶴叟八田圓齋で余を併せて五客であつた斯くて席上を見廻せば釣り棚に田中氏模寫帝室御物金澤萬葉帖を載せ貝籠瓶掛に糸目銀瓶を掛け時代栗木地茶盆に染付小瓢形振出しと京焼茶碗とを置き時代桑手附煙草盆に繪志野筒火入を取合はされたが此火入は雲州家傳來の由て胴に浮筋一本ある草花の模様面白くべ出しに紅潮を帯びた工合が如何様不味公遺愛と頷かれ元益田無爲庵所藏桑木地手附煙草盆と寸分動かぬ取合せなので一座の人氣は湧くが如く寄附の初感已に斯くの如くなれば本席の趣向も大方思ひ遣られて茶味は愈々緊張し來つた其時庵主は淺黄無地服に十徳を纏ひて慇懃に迎はれたから余が正客を失敬して例の大石燈籠の前なる伽藍洗手鉢で嗽ぎ不味公筆寸暇樂匾額を仰ぎ見て頓て入席して床内を覗けば是れはと驚くばかりなる朝茶眞向きの芭蕉翁句入消息が掛けられて其文句は左の通りであつた。

麥のこでき申候得ばはやく御こし給はるべく候、一兩人客來有之候間ほしく御座候、御隙に候はゞ貴様にも御出可被成候、次手にうらにたくさんなる紫蘇御こし下さるべく候

角水さま 三日

はせを

麥めしにやつるゝ戀や里の猫

何と茶味ある文句ではないか宛名の角の字不分明或は他に讀みやうあるべし日附の三日とあるには庵主も吃驚せしやうなれば是れは定めて偶中ならん末尾の一句に思ひ合はすれば懷石に麥飯とろゝの出現は言ふだけ野暮の沙汰なるべし

中

寸暇樂庵の床に掛つた芭蕉句入の消息は是れ亦益田無爲庵舊藏で久しく今日の相客梅澤鶴叟の手許に在つたのを當庵主が懇望して今日此處に活用した者だと云ふ事だが左りとは鶴叟聊か鼻毛を抜かれた爲體で悔しくもあり嬉しくもありと云ふ感慨無量は此掛物を眺め居る其顔色に歴然であつた斯くて庵主は一應挨拶の後

小形溜塗四方膳で手料理懷石を運び出されたが其獻立は左の通りである。

麥飯 根來平鉢、燒海苔、刻み葱、向附 乾山繪替小皿 豆腐、黃瓜揉み 烹物 白無地堅手鉢
強肴 鱈白焼き 豆 御本刷毛日鉢 白瓜、大根味噌漬 菓子 栗田焼角皿 葛餅 燒角皿
朝茶の事として酒を出さず食物をも至つて少數淡泊に唯麥飯とろゝ一品で客の腹を膨らせる趣向を思ひ切つて徹底せしめた處に及ぶ可からざる庵主の鐵碗を示して居る斯くて懷石終るや庵主は直に炭手前に取掛られたが其器物は

風爐 永樂保全造胴丸 釜 寒雉作竹節銀付 香合 松平不味好溜塗へ

炭斗 時代竹組荒目歪み 羽箒 玄鶴小振 火箸 鐵象眼

取立て、褒むべき道具でもないが軽くて嫌味のないのが何より嬉しく平常此種の器具を用意して置く丹精は十分買つて遣らずばなるまい扱て此炭手前拜見後、暫時寄附縁先の腰掛に中立すれば茶室と腰掛と目と鼻の間なるを氣兼して極めて靜に打たれた銅鑼七點の合圖に庵主の注意周到を示されたので一同再び入席して床内を見れば先刻説明した拙作尺八銘三輪花入に山額一枝と青葉萱とを活け風爐釜の

傍に金森宗和好み溜塗釣瓶水指を置いて庵主の濃茶手前があつたが其所用器物左の如し

- 茶入 備前焼小肩衝
- 茶杓 作者知らず無銘
- 茶碗 本手ト、ヤ
- 建水 砂張廣口胴メ
- 蓋置 青竹引切

下

夏季の朝茶に釣瓶の水指は朝顔に釣瓶取られてもらひ水の句などを聯想せしめて如何にも清々しき感じがする本手ト、ヤ茶碗は一個所大疵繕ひこそあれ青味勝ちに潤ひがあつて何となく其朝顔の大輪を見るやうな心地もする作者知らずの茶杓は薄作にして其樋深く節の一部に蟲喰穴あり兎に角凡作と思はれぬので試みに之を入札鑑定した處が鶴叟は織部圓齋は遠州箒庵は少庵と三人三様であつたが後其筒を見るに口ベ印あるだけで名もなければ銘もないので當りと云へば皆な當り外れと云へば皆な外れで總體面目を維持したのは可笑しかつたが庵主としては何とか言ひ逃れて寧ろ其筒を示さぬ方が老獪手段であつたかも知れぬ斯くて濃茶一巡

するや同席で引續き薄茶手前あり水指は時代唐金薬罐と替り茶入は益田鈍翁好み松木棗茶杓は象牙黒塗盆に渦卷及び紅白有平總菓子盛り小貫入小服茶碗と口縁下に色繪桐紋繫ぎ一筋を繞らし内外白地で底に清の一字彫銘ある清閑寺焼茶碗で薄茶を振舞はれたが小貫入は豎樋一筋繕ひある外無疵で茶溜に數點の目あり内外枇杷色麗はしく所謂小利巧の茶碗で清閑寺焼とは誠に相應しき組合せであつた扱ても今度魯堂の朝茶は寄附の志野焼火入で先づ客に一驚を喫はせ本席芭蕉句入の文で再驚を與へ麥飯とろゝの趣向で三驚を起させ釣瓶の水指ト、ヤの茶碗と愈出で、愈々客を驚殺せしめた其進境の物凄さにたとへ御面とまで參らずとも何處へか一本打ち込み呉れんと客も去る者夫れ、其隙を狙つたが此輕妙なる朝茶に作者知らずの重苦しき大時代の茶杓は當世散髮頭の芝居の中に百日鬘の舊式役者が出現したやうで聊か調和を破るの嫌ひがあるから是れは氣の利いたソゲ物などで程よく調子を合せて貰ひたい又薄茶の小貫入茶碗は清閑寺焼と取合せ上に寸分非難すべき處はないが此處には濃茶のト、ヤ茶碗を再用して其濃薄兩用に適する器

量を顯はさしむるが茶器利用の道に相應すると同時に愈々朝茶の輕妙を示す茶略ではあるまいか先づ此二點位が聊か庵主の考慮を乞ふべき批評の材料で其他は滿點の好成績と謂つても宜からう處で大に用心すべきは此次の茶會で此れより以上の進境を示さんとするには百尺竿頭更に一步と進むの覺悟がなくてはなるまい

松滴涼味

(大正十三年七月十一日)

上

炎帝連日暴威を逞うして將に人間を焙殺せんとする時數年來茶烟絶えて颯らざりし千駄谷原宿團狸山翁の松滴庵より十一日正午粗茶一服進呈の招狀が到來したので餘りの意外に午睡の夢かとはばかり打ち驚きたると同時に腋下早く已に清風を生ずる心地がした左れど今頃何として此不時の一會を催さるるにやと恰も其前日赤坂梅若舞臺で萬三郎の井筒を觀覽中の益田鈍翁より容子を聞けば今より凡そ十年前舊大聖寺藩主前田利鬯子所藏小野道風筆繼色紙十一枚綴帖を分割の節松滴庵主

は海外旅行中であつたが鈍翁は數寄者は相見互ひの誼に由つて庵主の爲めに專斷で一枚申請けて置いた其色紙は白地で二枚繼ぎなる双方に上の句と下の句を散し書にした者で一首の歌は左の通りである

このよひのありあけの月のありつらん

君をあきてはまつ人もなし

斯くて鈍翁は其後此事ありしを打忘れて居た處が此頃彼の色紙の表具が出来上り庵主が横濱の原三溪夫婦を招いだ折、ゆくりなく之を床に掛けたと云ふ事を耳にしたので「ハ心得ぬ事共かな彼の色紙を掛けらるゝ時には當然愚老に沙汰あるべき筈ならずや」と云ふ鈍翁の抗議には庵主も一言もなく承服して後とも言はず茲に今度の一會を開かれたのだと謂はれを聞けば興味は愈々加はりつゝ示刻原宿松滴庵の寄附に着到すれば三疊小間の建具は總て風通しよき葭簀と替はり丸爐に銀瓶を掛け茶盆に染付茶碗と釉色變化面白き唐津香煎入とを置き合せ時代桑木地煙草盆に赤繪樹下人物模様火入を供へ隅棚の上に五十嵐道甫秋草蒔繪小硯箱を飾られた

扱て當日の正客は言ふまでもなく益田鈍翁で末客は伊丹揚山其外岩原謙庵福井親庵と余を併せて同勢五客であつたが程なく庵主の出迎ひあるや順次庭前に下り立てば築造以來數年を経て風致一段立ち優り露地の主人公とも觀らるゝ椎の老木は所謂綠樹重陰四隣を蓋ふの趣あり青苔日に厚うして自ら塵なしとは斯かるたゞずまひをや言ふならん乃ち庵室前の車軸形洗手鉢で嗽ぎ破風に懸られた松花堂筆松滴二大字額を仰ぎ見て三疊臺目の席中に繰り込めば先刻評判の道風繼色紙の一軸が人待ち顔に床の中央に掛つて居た。

中

原宿團邸松滴庵の床に掛けられた小野道風繼色紙の歌は固より戀歌であるが君をおきては待つ人もなしの下の句が其儘茶客に對する主人の會釋とも思ひ做されて一段茶席掛けに籤り表具は上下淺黄地梅鉢紋純子中焦茶地縫取一風紫印金で臺紙より牙軸に至るまで苦心の跡が歴々と窺はれた斯くて庵主は一同へ挨拶の後溜塗丸膳で直に懷石を運び出されたが其献立は左の通りである

汁

三州味噌、新芋の子

向附

志野焼四方繪替りアチ、甘酢、山葵

椀

夏鴨、鱸、いんげん

焼物

萩焼平鉢、茄子丸煮

吸物

山椒皮

八寸

京都産ごり、むしり、海老、青豆

香物

染付唐人笠繪小鉢、黃瓜

酒器

共蓋鐵燗鍋、朱塗引

菓子

水羊羹

如上食器中志野焼四方繪替り向附は稍小振で口縁下に一段あり白釉中に墨繪模様のあるのが如何にも涼しき膳附で一座の人氣を背負つて立つた萩焼平鉢も白地の處々に青味を帯びて朝鮮唐津と見まがふのが面白く懷石は時節柄他の奇を求めず唯アツサリと遣つて除けたのが嬉しかつた斯くて懷石相濟むや庵主が從來風爐茶の經驗なく然も近來用務多端で稽古の餘暇を得なかつたと云ふので令聞が代つて炭手前を勤められたが其器物は左の如し

釜

茄子鑲附、團扇中布、袋地紋

風爐

宗四郎作

炭斗

白寂ひ竹組平籠

香合

堆黒地紅臥牛模様

火箸

砂張梔子頭

羽箒

玄鶴

釜は何人の好みにや布袋の圖柄などより判斷すれば或は松花堂其人ならんか段紋麗はしき宗四郎風爐とは誠に絶好の組合せて堆黒香合砂張火箸の精美と共に見る

から清々しき感じがした扱て中立は庵室と棟續きの腰掛であつたが當家には今日の正客鈍翁の亡弟紅艶舊藏の名鉦が納まつて居るから正客より特に御合圖は必ず御鳴物で願ひますと所望し一同耳を澄して待つ間程なく庵室の方よりポーンと一聲互えくした響が傳はつて來た時には唯何となく頭の下がるやうな心地がした。

下

松滴庵の合圖は故益田紅艶秘藏の灰屋紹益傳來の名鉦であつたが最初の打ち込みのポーンと云ふ音色が上品で牙えくとして中頃より音波がムツクリと一嵩擴がるやうに響いて揺り返しつゝ長く其餘音を留むるのは實に名鉦の奇特とや言はん余も鈍翁も銅鑼好き仲間て所謂關西の三銅鑼も悉く聞き東都の名鉦も昨年焼失した淺草藏前の酒井清兵衛氏所藏の外は殆ど聞き盡して居るが音色に於ては當家の天下第一と云ふ事に今日兩人の意見が一致した斯くて此名鉦七點の合圖を聞き終り再び入席して床内を見れば稍小振の砂張船形釣花入を天井より吊るして廣葉隠れに睡蓮一輪を活けたる風情風呂釜の傍に置き合はされた木地釣瓶形水指と相

對して何とやら涼風蕪末に起るの心地がした扱て濃茶手前は引續き令園代理て興行せられたが其器物は左の通りであつた。

茶入 信樂燒銘布引

茶碗 三島

茶杓 江月和尚共倚

建水 南蠻メ切

蓋置 青竹引切

如上器物中の信樂燒茶入は一見金華山飛鳥川手の如く總體柿金氣地にて肩先より黒釉一筋瀧の如くになだれ掛つたのが布引の名を得たる所以であらう袋は清水と伊豫簾とを縫ひ合せたるが面白く箱書附は小堀蓬露かと思はれた三島茶碗は外側に檜垣模様二段あり内面に同じく三段ありて茶溜に花形十點散在し鼠色地に薄赤色を交へて檜垣が白くクツキリと現はれたる工合鮮麗無比で此種中稀に見る逸品である江月和尚茶杓は何となく利休の面影あり南蠻メ切建水は其形歪みたるが愛嬌あり輕重新古器具の組合せ巧を求めずして自ら巧に此點に於ては從來當家に行はれた茶會中の壓巻と謂つても決して過當であるまいと思ふ扱て濃茶一巡するや庵主は小間の炎熱を思ひ遣りて頻りに動座を促すにぞ庵前の梅見門を出て、廣庭

を前にしたる松平確堂公の遺構十二疊敷の碩寛堂に打通れば床に率翁筆布袋痴絶讚の一軸を掛け棚に定家卿筆小歌帖を載せ書院に文房飾りがしてあつたが炎暑の際とて唐津皮鯨茶碗で薄茶を建て出しアツサリと披きの間を打ち切つたのは流石に灰汁抜けた趣向であつた斯くて外間より見れば暑中の茶室入り嘸かし迷惑ならんと思はるゝかも知れぬが滅却心頭火亦涼で人間の苦熱をサラリと忘れ松滴半日の清涼を占め得たのは偏に庵主の賜ものであるから余は此點に於て特に深く庵主に感謝しやうと思ふ。

盆石末の松山

(大正十三年七月廿八日)

先頃大谷尊由師が京都西本願寺飛雲閣に於て藪内劍仲三百年回忌茶會を開かれた時同閣上段の床に向つて右手の書院に東山御物末の松山と云へる盆石を飾られた次第は飛雲閣劍仲忌記事中に大略記載して置いたが此程益田鈍翁より劍仲忌茶會

に參列した折の感想を申越された書簡中に左の一節があつた。

飛雲閣茶會に於ては茶席其物に感服し會主其人に感服し其他數々感服したる者之れあり候得ども盆石末の松山には盆にも石にも恐れ入り別して此二物を組合せたる茶人の大意匠に感服致候當日同席の村山玄庵翁の談に彼の石を載せたる砂張盆は如何なる理由か先年石と離れて道具屋の手に渡り現に拙者方へも賣物として持參致され候得ども餘り大形にて使用の道も之れなしと思ひ其儘見遁し候が關西にては全く買手なくして終に元の本願寺に復歸したるは盆石相離れぬ因縁と見え申候とあり因て老生は村山翁に向ひ此盆が己が掌中に歸すべき機會を捉へながら看す看す之を取り遁すと云ふ關西の好事家諸氏は扱てもく道具慾に乏しき者かな若し是れが老生の眼に留まらば金輪際之を見遁がし申さぬは勿論或は老生の愛藏品と取り換へんとならば御望み次第何物とでも取り換へ申すべしなど笑談を交へ候やうの次第にて彼の盆石には頓と頭が下り申候斯くて盆石末の松山に對する益田鈍翁の感服は所謂感服七種を通り越した眞劍正

銘の感服らしく思はるゝ又彼の劍仲忌茶會に余と同席せられた根津青山は石は夫れ程にも思はぬが盆は無類の名品であると云ふ感服振りである而して余は世に此盆石ある事を知らぬではないが唯漠然と其名を聞いただけで今度之を實見するまでは形狀は勿論其來歴をも審かにせず況して是れが何方に存在するやなど毛頭思ひ浮べた事もなく夫れが彼の飛雲閣の書院に飾られて遠く望めば蓬萊仙山の海上に浮びたるが如き光景を見ては勿論稀代の名物たるべしとは感附いたが時代黒塗鯨皮函に納まつて居るだけで餘り委しき由緒書もないので寺傳の儘織田信長より石山戰爭和睦の紀念として本願寺に寄贈せられた者なりとのみ報道して置いたが此頃少閑を得て各種の舊記を涉獵するに及んで略此盆石の經歷を詳悉する事を得たから更に之を追記して同好の清覽に供へやうと思ふ。

二

東山時代數寄者間に盆石の流行した事は足利義政の同朋相阿彌著君臺觀左右帳記書院飾の圖に葛鉢に載せた盆石飾があるので明白であるが此盆石は當時の支那

的ハイカラが之を輸入して例に依つて日本流の様々の飾方式作法を工夫した者であるらしい而して支那盆石の起源は何時頃であるか今之を審かにする事を得ぬが白樂天の盆石十德吟に

- 益精延愛顔 助眼除睡眠
- 澄心無穢惡 草木知春秋
- 不尋見海浦 不遠有眺望
- 不移入巖窟 迎夏有納涼
- 延年無朽損 愛是無惡業

と云ふのがあるから李唐時代より已に盆石愛玩の風習があつた者と見える而して日本に於ては最初唯書院飾であつた盆石が程なく茶室用と爲り一時盛に流行したる者と覺しく古茶書に石を茶室に立て置く時は之を床の中央に飾り固より盤石を表したる者なれば始中終其儘に差置きて卒爾に之を動かす可からず其石に附屬する記文あらば之を諸飾にする事勿論なれども他の掛物を掛けず又花をも活けざる

が定法なり而して之を觀る者は成るべく遠く床前を離れてさながら遠山を望む心地にてあるべしかまへて石の背後を見越す可からず是非に之を見んとすれば一會相濟みて退席の節ツト之を覗き見るべしなど記載してある然るに此風習が漸次廢滅したるに就き或る茶書に紹鷗の頃までは茶室に専ら石を立てしに利休が見立てとして石も如何様面白くはあれど第一手間かくり盆上に砂を打つ手敷を云ふ其上掛物をも掛けず花をも活けざれば茶の湯座敷には不相應なりと言ひ出でけるより茶室に石を置く事廢りたりとあり尤も往事夜會に花を活ければ燈影枝に映りて花色定かならずとて之を好まざる者あり之れが爲め利休は薄板に砂を蒔かざる盆石を夜會に使用した事があると云ふから時に變通の茶略ありて彼とて一概に盆石を排斥した譯ではあるまい又或る茶人は古法に依らず盆石飾りの床に思ひくの掛物を掛くる者さへ出て來りしが名石は至つて少く且つ之を飾り附くるに就き砂打の古傳を知る者も追々其跡を絶つに至つたので近來は茶室にも書院にも絶えて盆石の沙汰を聞かなかつた折柄偶々飛雲閣劍仲忌に其飾り附があつたのは眞に空谷

の寔音と謂つても宜からうと思ふ。

三

西本願寺所藏盆石末の松山は東山時代品と覺しき黒塗鯨皮函に納まつて居るが傳來書としては此石は天下二つの名物なりと書附けた一紙片が附屬して居るのに過ぎぬ併し古來最も高名なりと見え名物盆石と云へば必ず先づ其名を載せてある盆山秘言と云ふ書に天下の名石を擧げて
 淺間山末の松山萬里江山廬山石九山八海飛龍殘雪八橋夢の浮橋
 の九點と記載してある又源流茶話に
 義政公御代は専ら盆石を御賞翫あり萬里江山殘雪末の松山など云へる皆いにしへの名石にて盆は高麗鉢又は塗盆にも置かれたり砂は備後砂を用ひたまふ大凡盆石は遠山磯邊の風景を寫し候得ば砂の蒔きやう四季風景に従ひ春東夏南秋西冬北吹上げのかたを厚くする習ひなり
 とあり茶器名物集には

残雪……本願寺門跡にあり

此石様子五寸か巾二寸八分上の高さ一寸九分か黒き石に高さ所低き所山の如く
にあり其内に白き石峯あり之を残雪と云ふなり

末の松山……宗悦にあり

右の石も大方似たる様子なり上下一寸八分横へ五寸三分前後へ二寸九分ばかり
か是れも高き山低き山あり黒き石に白き石上に交りたり末の松山波こさじとは
と云ふ心か

右兩石形は定まらず鉢に立つる時備後砂と云ひて米程なる白き砂にて上手ほど
石の形を違ひて立つるなり

とあるが他書に織田信長が宗悦より末の松山を召上げられた記録あれば宗悦は正
に此石の舊藏主であつたらう唯茲に一つの不審は南都松屋喫茶記に

慶長十三年戊申九月七日晩藤堂大學様勢州安濃々津御城にて御茶盆石前に二つ
残る所皆青し石高さ七寸五六分横三寸四五分長さ八寸ばかり砂大きさ大豆大小

なく能くそろひて白し鉢は南蠻からかねなり大きき一尺二寸四五分なり縁の高
さ七八分少し縁のうへ怒りたり縁に筋あり石は名物末の松山なり

とある事なり末の松山が慶長十三年藤堂高虎の所藏ならば織田信長より本願寺寄
贈との寺傳は後人の謬傳たらざるを得ぬが茶書には由來傳聞の誤りが多いから松
屋喫茶記も必ず其正確を保つ可からず何れにしても天下名石の隨一が巖然として
本願寺に現存するのは國寶保存上誠に祝着の至りである

四

盆石末の松山は飛雲閣劍仲忌記事中に掲げた如く形状と云ひ大ききと云ひ將た其
色合と云ひ所謂八相具備の名石である或る茶書に萬里江山末の松山九山八海夢の
浮橋富士山を古より名石と言ひ傳へたれども總て石は日本石にて外國石は稀なる
由とあれば末の松山は何地産か審かならぬが兎に角日本石であらう而して此石は
美人が玉の輿に載つて一段其器量を上ぐるやうに其附屬し居る砂張の大盆に載つ
て愈々其光彩を放つやうである元來盆石は君臺觀圖中にも見ゆる如く葛鉢とて葛

の模様のある青磁鉢に水をば盛らす砂ばかり打つて其中に立て置く者である而して此砂は白色の備後砂を最好とし榎實程なる最大粒より次第に細かにして之を五段位に篩ひ分け鉢の真中なる立石を繞りて大汐の場合を示さんとすれば石根まで砂を打寄せ干瀉の時に寫さんとすれば州崎の現はれたる景色を作り長汀曲浦様々の景色を心にふくみて細かさ砂は打板の先にて打ち揃え大粒は竹箸にはさみて一粒づゝ之を布置する習はしてであるさうだ併し置物は必ずしも葛鉢とのみ限らず時に高麗鉢或は塗盆に飾る事もあり又彼の末の松山の如く砂張盆に載せる場合もある砂張とは一種の合金で南蠻砂張と云ふのが其最良品と云はれて居る地色蒼潤にして處々に銷氣を帯び其光澤に依りて別に金砂張銀砂張と云ふ者もあり稍劣等なるをば之を朝鮮砂張と稱する其音響が如何にも優雅なので多くは銅鑼其他梵唄用具と爲り日本に於て水指建水菓子盆等に使用せらるゝ者も本来樂器として生れた者が多いやうである而して古來日本にて此金屬を砂張と云ひ又砂張盆を青海盆と云ふのに就き今度聊か思ひ當る事があるのは末の松山が彼の砂張盆に載つた處を

見ると恰も蓬萊山が青海原に浮かんで居るやうだから謠曲高砂に松影もうつるなる青海波とは是れやらんなど云ふ文句に思ひ合せて緑青色の砂張盆を名づけたのではあるまいか又此邊より思ひ廻せば砂張と云ふのも盆石の砂を張ると云ふ意味よりして斯く呼び做されたのではあるまいか末の松山拜見後文献に徴して知り得た事やら延て自ら考案した事やらを掻き集めて之を彼の盆石の後談と爲し併せて大方の指教を乞ふ次第である

竹有庵名殘

(大正十三年九月廿二日)

庭の面に薄霧なびき叢に蟋蟀鳴きて村雨のはらくと降る今日此頃は所謂名殘茶會當込の季節なるに今年は一夏を通じて殆んど茶信を聞かぬばかりか秋風の吹き初めてよりも猶ほ何の音沙汰もない其寂寞を破つて空谷の鶯音とも謂ふべき名殘茶會の案内が目黒比翼塚の片邊りに住居する竹内竹有通稱廣太郎氏より到來した

氏は尾州出身で屋號を近江屋と云ひ先代より近善の通名を以て知らるゝ茶器商で
 昨年の大震災に日本橋東仲通の店舗は全焼したが七八年前より目黒に別宅を構
 へて居たので今度其方の竹有庵で遽に一會を催す事と爲つたに就ては何か深長の
 意味もあるらしいが其表面に現はれた経緯を承はり及べば昨年九月一日大震災の
 當日氏は茶友四五名と仰木魯堂の相州葉山の茶寮に參會した處が當日は一品持寄
 の茶會で主人の魯堂は茶杓を出品すべき筈であつたのに東京より之を持參するの
 を忘れたので葉山に有り合せの竹を切つて早速茶杓を作られた夫れを更に抽籤で
 來客に分つ事となり其籤が恰も竹内氏に當つた時グラ〜と大地震が始まつたの
 で一同寮外に飛出した其際氏は引き當てた茶杓を懷中して魯堂其他の茶友と共に
 先づ見舞として同地團狸山翁の別荘に駆け附けたが同翁の一家に金子溪水子爵等
 も加はつて庭前の芝生に避難し居る有様は何とやら彼の地震加藤に於ける桃山の
 一幕を見るやうであつたと云ふ事だ其時金子子爵は右見舞の同勢に向ひ苟も茶人
 たる者は斯かる場合に狼狽せず泰然自若として茶杓でも削るだけの餘裕がなくて

は相成るまいと云はれた聲の下より竹内氏は懷中せる茶杓を取出して仰にや及ぶ
 べき是れ此様に新茶杓が出来ましたと披露したので子爵もコレハ〜と大に感服
 せられて氏は思ひの外の面目を施したさうである

二

竹内竹有庵主は昨又大震災の節相州葉山で偶々懷中して居た茶杓の爲めに大いに
 茶人的名譽を博したので一年後の今日當時を追懷して其茶杓開きをしやうと云ふ
 のが今度の茶會の動機であるさうだ偕て斯くと承はり及んでは何とやら其茶杓を
 見て當時の實況談をも聞かばやと云ふ好奇心が動いて九月二十二日正午目黒の比
 翼塚より家數で三四軒手前の其反對側にある竹内氏の竹有庵に罷り越せば好事な
 る門構への茅葺屋根が即ち夫れてまづ其待合に打通れば是れは四疊半の中央に大
 爐を切つて天井に屋根裏を見せ片隅の長板に籠組瓶掛を置いて銀瓶を掛け栗木地
 茶盆に新茶碗と宗本作らしき振出を載せ鎌倉彫蓑盆に小形の織部火入を置き合さ
 れたが相客は田中親美、八田圓齋兩人であつた斯くて程なく庵主の出迎へを受けて

庭前に降り立てば樺の大樹ある其下に大時代蹲踞石を据えて青竹の筧より清水を引き其流末は白河小砂利を敷詰めた石組の間を遠りて植え込みの間に隠れ目黒不動の森やら近隣の柿の木などを庭中に取入れた趣向は實に茶味津津々たる者があつた扱て庵室は二疊臺目で床には翠巖和尚小色紙を掛けられたが其文句は左の通りである

文字己混

其人不振

無事是好

因稱貴人

翠巖野納印

此一軸の前には根來四方盆に載せた金紫銅鳥形香爐に一炷の名香を薫じてあつたが名僧の墨蹟に名香を捧げた此趣向の裏面には何か深長なる意味がなくてはなるまいと思ふ顧みて道具壘を見れば時代大窠れ鐵風爐に明惠上人茶道十徳文字入釜を掛けられたが庵主は一同に挨拶の後黒紋服豊に竹本何大夫とか名乗るべき堂々たる態度で大陀獻立の懷石を運び出された

三

竹有庵は庵主の意匠に成つた新形茶室で床脇に給仕口がある當日は雜木盆に栗飯と云ふ趣向で庵主が運び出された懷石は次の通りである

汁 三州味噌、茄子

向附 織部長角、山葵、甘酢

椀 茸、寄せ、隠元、しめぢ

焼物 志野焼三足魚、鉢若狭ぐち

煮物 萩焼茶碗、淺草海苔、葛かげ豆腐

吸物 海老、青豆

八寸 鮎附焼、銀杏

香物 赤繪菊竹小鉢、胡瓜、西瓜、奈良漬

菓子 葛羊羹

酒器 染附御興形蓋鐵銚子、備前及南、京染附徳利、黄瀬戸及京焼盃

庵主が喰道樂通人の本能を發揮して能く場所柄と時節柄とを辨へ如何にも名残茶らしき器物と懷石を案じ出された其苦心は前記に依つて何人も首肯するゝであらう而して右懷石器具中嶄然一頭地を抜いたのは三足志野魚鉢で胴廻り深く括れ例の粗畫の間にムラくと赭釉の浸出しを見せ其形の大寂びなるにも似ず珍らしく一點の疵さへなきに至つては一同無條件で庵主の鼻の伸び次第を許さざるを得なかつた斯くて懷石終るや直に庵主の炭手前あり香合は唐物箔繪長四方、炭斗は栗木

地鉄鉢形、羽箒は縞烏を使はれたが夫れより一同庭前蹲踞石脇の腰掛に中立すれば合圖を用ひず庵主自から出迎はれたから直に入席して床中を見れば當日余が庵主に贈つた一重切竹花入を掛け花臺の上に横三四枝と花鋏及び水次を添へ置かれた是れは余が本日出がけに庵主に對して何か土産をと思つたが格別思ひ付がないので恰も造りたての一重切花入があつたのに比翼塚を思ひ合せて銘を濃紫と書き附て持參した夫れを早速床中に利用せられて甚だ痛み入つたものゝ庵主の心入黙し難く乃ち彼の花入を取り卸して喉頃の權一輪を投げ入るれば庵主は跡片附を終りて直に濃茶手前に取掛り左の器物を使はれた。

茶入 備前土新兵衛作肩

茶杓 仰木魯堂作團狸山

茶椀 伊羅保、小猿道閑銘

水指 澁紙平一重口

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

茶 好の白

四

竹有庵の濃茶器物は前記の通りで新兵衛作備前肩衝茶入は白地古金襴袋に入りて

其作行も頗る面白く伊羅保茶碗銘谷川は無疵で碁笥笥で其底内に釘彫渦卷あり口廻りに處々べらあり總體赭味を帯びて寂味十分であつたが中に就き今度の茶會の主題となつた山崩れ茶杓が最も一座の注目を惹いたのは固より其所である此茶杓は仰木魯堂が葉山の竹で即座に作つた一品であるから竹の選びも作行も取立てて評すべき程でもないが團狸山翁が筒に山くづれとして下に狸山と認めた其書體は玄人跳足で能く其筒に取合ひ又箱蓋には金子溪水子爵の筆で左の書附があつた

地震天焦覆帝京

悲鳴號泣萬民狂

家顛娘死燒財寶

僅養兒孫恩賜莊

大正十二年九月關東激震偶在葉山別莊

溪水

堅

此山崩れと云へる銘は地震で山の崩れたと云ふ表面の意味の外に或る地方の方言に女房の事を山の神と云ふに因み彼の震災の節庵主が葉山に同行した女性の遭難を暗示した銘柄であるとも傳へらるゝが天機を漏らすの恐れがあるから其邊の穿鑿は之を他日に讓る事としやう斯くて濃茶一巡するや同席で薄茶の饗應あり今度

は令息善之助氏が代點で水指は藥罐と代り茶入は金馬藥器茶杓は不味公筒石州作象牙茶碗はノンカウ作啐喙齋銘月蔭と火災に罹つたのを蒔繪繕ひにした熊川茶碗とを用ひ建水は瀬戸蓋置は古銅惣菓子獨樂盆に載せて出された而して歸途廣間に於て番茶を出し床に探幽破墨を掛けて其下の伊賀大寂び壺花入に殘花數種を活け置かれたので又々此處に御輿を据えて清談時の移るを知らず日も西山に傾く頃厚く庵主の好意を謝して漸く自動車中の人となつた。

安樂茶報

上

(大正十三年九月廿五日)

東都實業家同人の寄合安樂會は當番大橋新太郎君に依りて九月二十五日夕景より京橋木挽町田中屋に著休後の第一會が開かれた大橋君は都下の紳士が組織して居る彩壺會員中の錚々たる者で九谷伊萬利鍋島薩摩其他京焼物の收藏の豊富なるは久しく同人間の評判であつたが環境と年齢とは何時か君を抹茶道に誘引して近時

大に其趣味に感染すると共に其向きの道具も今は十分具備するに至つたとの内報があつたので今度の安樂會は君が何程抹茶化したかを判定する試金石として大いに同人の興味を唆つたのである斯くて當夕來集の會員は藤田江雪團狸山原三溪根津青山三井泰山藤原曉雲福井親庵等の常連凡そ十數氏で多門店の丘崎彌太郎が茶道方を承はり山澄伊丹川部三世話方が接待役を擔當したが先づ六疊茶席に通れば床に土佐隆成繪畫後光嚴院詞書の繪巻物殘缺一軸を掛け脇棚に青貝梅月香盆を置いて砧青磁竹の節香爐を飾られた其風情自ら入席者の氣分を緊張せしめ先づ進んで一軸を拜見すれば白描繪巻物に細字詞書があつて何物語の殘缺にや兎に角南北朝時代頃の筆蹟と思はれた顧みて道具疊を見れば土佐光孚筆武藏野圖風呂先屏風内に長板を置いて左の薄茶器具を飾られた

- | | | | | | |
|----|----------|----|----------|----|----------|
| 釜 | 庄兵衛作四方羽累 | 風爐 | 立松山城作唐銅四 | 水指 | 仁清作雪月花 |
| 杓立 | 薩摩秋草繫 | 蓋置 | 同 | 建水 | 松平不味好モール |
| 火箸 | 砂張鳥頭 | 茶入 | 不味好桐紋棗 | 茶杓 | 久保田宗全作銘友 |

茶碗 古三島平

替入 初代六兵衛愚齋作

菓子

唐物黒塗菊形、總菜

如上器物中宗全作茶杓は有栖川職仁親王御歌銘友垣と云ふ筒書付が如何にも當會に相應はしく仁清やら薩摩焼やらは彩壺會員たる會主の御手の物で時代曳舟詩繪煙草盆中にも亦古薩摩火入を見受けたのは固より其所である

下

安樂會は都下の實業紳士にして已に五十路の坂を踰え漸く風雅趣味を樂まんとする境涯に達したる者をして順次當番同好共樂の清會を開かしむる趣向で順番とあれば否應なしに其責を塞がねばならぬ最れが苦しみであると同時に樂しみて主人としては可なり工夫を要せざるを得ぬ今度大橋君の如き此種の會主と爲るのは蓋し臍の緒切つてより始めてあらうから所謂初陣氣分で其陣立に苦心せられた事勿論だらうが當夜會衆の評論を總合すれば茶席の飾附がサラ／＼として非常の名品もなければ左りとて又駄品もなく凝す因はれず何處とて殊更に當て込んだ處を見ず無事は貴人で主人の直情徑行物に屈托せざる趣を現はした處に何とも言はれ

ぬ殊勝さがあると云ふ事に歸着した斯くて小座敷で薄茶の饗應終るや更に大廣間に動座すれば床には長澤蘆雪筆唐美人大幅を掛けて時代手附花籠に秋花數種を活け床脇棚には伸竹舞樂詩繪二重文庫と土佐光則筆源氏五十四帖及び爲家時代歌合帖とを置き合はせ濱町常盤屋庖丁の懷石饗應があつて後席上に會主出品の

宮川長春筆元祿風俗繪 一卷

鳥文齋榮之筆北廓漏刻圖 同

飛鳥井雅子筆扇面和歌 同

渡邊始興寫鳥羽僧正勝繪 同

を披陳し其外根津君出品探幽筆夢想觀音幅藤原君出品薄茶々碗團君出品青磁二閑人筆架等を順次點檢品評したが余は不日嚴島神社へ假納する筈である田中親美氏模寫平家納經中勸發品藥王品の二巻を出陳して人間業とも思はれぬ同氏の技巧を一同の前に披露した斯くて安樂會は毎會々主の異なるに依り其趣向も愈よ出て愈よ妙に又實地其會主と爲れば感興は益益加はりて知らず識らず趣味の友と爲り

來り大橋君の如き目下武州金澤に經營の新館に茶室の設計もありと云へば安樂會が實業紳士に對する趣味涵養の趣旨は年と共に益々其實効を奏しつつあるものと見て宜からう

筆峰大居士

(大正十三年十月十八日)

燦爛たる彩筆徳川初期の泰平を粉飾して餘光遠く後代に反映し我が繪畫道の隅々まで偉大なる感化を及ぼしたる宮内卿法印筆峰大居士探幽齋狩野守信は延寶二年十月七日七十三歳で大往生を遂げられたから昨年が恰も其二百五十年忌に相當した其處で我が日本美術協會は昨秋其修忌會を催す筈であつたが彼の大震災の爲め餘儀なく延期して當十月十八日より同協會内に遺品展覽會を開き居士の苗裔なる狩野探道氏所藏同柳榮筆探幽齋肖像の前に香華を供へ又會館脇別室に演壇を設けて正木美術學校長と余及び今泉雄作翁の居士に關する講話會を開かれた是に

於て余は探幽崇拜者の一人として當日會衆の前に聊か卑見を陳述したが維新後既に五十餘年の歲月を経て今や大正昭代を飾るべき大畫才を要望する時節に當り何人も此絶代の畫聖を追慕せぬ者はなからうから左に其大略を掲げて大方の清覽に供へやうと思ふ。

古今を通じて大畫家も少くないが探幽程公私各方面に亘つて完全無缺圓滿具足した人格はなからうと思ふ嘗て米國の或る富豪が功成り名遂げ年老いて己が傳記を編纂せしめた時に其編者が彼に對つて凡そ人間は一生を通じて何事も思ふまゝになつたと云ふ者はないやうだが貴殿は自ら顧みて如何思はるか尋ねた處が其富豪は得意満面でイヤ／＼私は一生何事も思ふ通りに成就して更に遺憾とする所がない若し私が今一度生れ變つて此世の中に現はれたらば寸分違はず同じ事を繰返す積りであると答へたさうだが余は我が筆峰大居士に於て此米國富豪の所言が其儘適用せらるゝだらうと思ふのである。

日本の畫家で狩野探幽程萬事圓滿具足した人格はなからうと思ふ其理由として彼の血脈如何と云へば嫡流ではなくとも兎に角同家の開祖祐勢正信を祖先とし古法眼元信を高祖父とし松榮、永徳、孝信と代々家業を相續したる其孝信の長男と生れ弟に尙信、安信あり實子に探信、探雪あり尊屬卑屬皆丹青の能手にして所謂桃李滿門の盛を極めたのは果して何たる幸福であらう又其師と云へば十七歳までは嚴父孝信に就き孝信歿後は伯父光信の門人狩野興以の懇篤なる薰育に依つて十分其天才を發揮する事を得たので是れ亦師匠運に愜つた者と謂つて宜からう而して其天分如何と云へば七歳にして已に神童と稱せられ慶長十七年十一歳にて徳川家康に駿府に謁し御前揮毫を以て早くも出世の端を開き元和七年二十歳で幕府より鍛冶橋外に邸宅を賜はり同九年二十二歳にして大阪城内繪畫御用を命ぜられ寛永三年二十五歳で二條城内壁畫を掌り同十三年三十五歳で現日光東照宮に保藏せらるゝ國寶東照宮縁起卷を描き寛文二年六十一歳の時には宮内卿法印の榮位を得又後水尾院尊像を畫いて筆峰大居士の號を賜はり禁中繪畫御用を承はつて畫家として古今

未曾有の榮譽を荷ひ徳川四代の將軍に歴事して無數の大作を後代に遺し延寶二年七十三歳の高齡を以て大往生を遂げたのは誠に光輝ある一代と謂ふべきである昔より天二物を與へずで一方に長ずれば一方に短なる者であるが探幽は天才夙成で然も健康で長命で頭腦明哲手腕優秀は言ふまでもなく之に加ふるに非常の勉強家で六十年間殆んど畫筆を握り詰め名畫を見れば悉く之を模寫し構圖着想日も亦足らず炎暑の際と雖も曾て繪事を罷めず夜分は蚊帳中にて執筆するを常としたと云ふ其精力絶倫に至つては所謂二物も三物も悉く之を具有して鬼に金棒虎に翼の能事を擅にした者と謂ても決して溢美であるまいと思ふ。

三

世には非凡な天才を抱いて居る畫家でも不幸にして亂世などに生れ遭ひ又は其能を認めて之を推輓する知己に逢はないが爲め折角の技倆も施すに處なく終に埋木と成り果つる者がないでもないが探幽は前述の如き門地才能を抱いて徳川氏勃興の盛運に際會した者で眞に時代の要求に直面した好運兒と謂つて宜からう徳川初

世は天下の人心擧つて泰平を欲求するに乗じて幕府は其威光を天下に示すの必要あり日光廟造營を始めとして大厦高屋を所在に起し其裝飾に壯麗善美を競つたのであるから如何に探幽が勉強家一門の子弟と共に其手腕を揮つた處で其山の如き畫債を償ふ能はぬ有様であつたのは今より想像するに難からぬのである之に加ふるに當代幕府の作事奉行として絶代の才能を發揮した小堀遠州の如き人物が此間に出現して茶道に於ては探幽の師匠であり繪畫に於ては推賞家であり註文者であり相談相手であり互に意匠を窮極したので今日京都の二條城、智恩院、其他諸寺院の襖壁等に残つて居る遺跡を見ても唯其繪畫の優れて居るばかりでなく裝飾構圖十分に能事を盡して優に後代の模範を示して居るのは同時代に遠州其地多數益友の援けを得たからであらうと思ふ。元來寛永年間には日本で最も大人物の現はれた時代で將軍に家光あり幕閣に酒井忠勝、松平信綱あり僧侶に澤庵、江月、松花堂あり藝術家に光悅あり武人に柳生、但馬宮本武藏等あり茶人兼意匠家に小堀遠州、金森宗和、佐久間將監等あり處士に石川丈山、木下長嘯子等あり各方面に大家豪俊、碁布星羅して居つたが此中最も傑出した者は家光將軍の外に澤庵和尚、狩野探幽、小堀遠州の三人で之を寛永の三秀と稱して宜からうと思ふ

四

探幽の繪畫に於ける其夙成の天才を以て先づ祖先傳來の狩野家流を會得し更に土佐畫風を究めて濃艶なる着色法を採用し和漢の長所を混化して彼の東照宮縁起卷だの或ひは宮殿障壁等の密畫だのを大成したので我が彩色畫に新なる大發展を遂げられた尙ほ其上に梁楷、牧溪、玉磬等の減筆若くは破墨法をも藥籠中に收めて濃抹淡粧行く所として可ならざるなきの手腕を示したのは眞に古今獨歩と謂つて然るべきであらう探幽は其本領に於て既に斯くの如き創造的大家であるに加へて餘技に長じ趣味に富み書畫の鑑識は遙に時流に卓絶して信を後世に取るに足り書は弘法大師流を學んで其堂奥に入り和歌も詠ずれば文章も作り茶事は小堀遠州に學んで其高足と稱せられ名器も所藏すれば茶杓も花入も造り彼が自作の瀟洒八景銘茶杓の如き優に作家の域に達して居る蓋し彼は其門地人に優れ少小幕府の俸祿を受

けて生計上何等顧慮する所がなかつたから其藝術上人に諛ねり世に媚るの必要を感ぜず恰も我が作らんと欲する所を作つたが爲め其作品に現はるゝ氣品の高邁なる事是れ亦古今獨歩と謂つて可なり此等探幽の長所を算へ擧ぐれば殆ど際限もない程であるが茲に余の最も彼に感服するのは彼が其本領は勿論餘技に對しても極めて忠實にして且つ熱心なるの一事である凡そ熱情は總ての藝術に必要缺く可からざる者で縱令其技術は少しく拙劣であつても全力を傾倒した作品には何處かに人を感動せしむる所があるものだのに探幽の如きは總ての長所を具備して居る其上に之を貫くに忠實なる熱情を以てしたのだから彼の作品が偶作と雖も輕薄ならず之に對して常に高潔幽雅なる觀念を生ぜしむるのは決して偶然でなからうと思ふ

五

探幽が平常熱情に富んで居た逸話は數々あるが中にも彼は弘法大師の書風を慕ひ常に其眞蹟を得たいと思つて居た折柄高野山の依頼に應じて其殿堂の壁畫を作る

事と爲つたので畢生の丹誠を籠て畫き上げた處が一山悉く其筆勞を感謝して金二千兩を贈つたさうである左れども彼は固辭して之を受けず若し能ふべくんば彼の大師眞蹟座右銘の一字なりとも割愛せられよと希望した其熱誠に感じて時の高野山座首は遂に同銘十六字を割與したので探幽の驚喜大方ならず彼は之を一巻と成して其前後に高野山及び和歌の浦の眞景を描き終世其座右を離さなかつたと云ふ即ち現今大師會の本尊と爲つて居る一巻が夫れで彼が其道を嗜む熱心の如何に深厚であつたかを證明するものである又彼は明曆の大火に秘藏の茶入種村肩衝を焼失したのを残念に思つて人の此問題に觸るゝを好まぬ程であつたが此茶入は不思議にも火難を免れて京都所司代牧野佐渡守親成の手に入つたので親成は探幽が寛文二年禁裡御繪御用を帯びて入洛した時不意に此茶入を取出して彼を驚かし且つ之を彼に與へた其報謝として探幽は何にても御希望通りの繪畫を作らんと云ひ出したので左らば富士十二幅對をと云ふ難題を持ち出し探幽は苦心慘澹して現今大阪の平瀬三七雄氏所藏の彼の名幅を描き上げたのである而して茶入の種村肩衝は

現今松平直亮伯の所藏たり探幽が當時京都より再び江戸に持歸つたので更に之を都歸りの茶入とも云ふのである右等の逸話を玩味すれば彼は何事にも熱情に富み涙脆くして想ひ遣り深く霞を憐み露を悲しむ風雅の真髓に觸れて居たのだから其性格が自然作品の上に現はれて彼が如き氣格高邁の名畫を遺し得たのであらう此外探幽に就て仔細に觀察したならば彼が十一二歳より既に其天才的繪畫を殘して居る事など今日の美術家養成法と對照して大いに反省しなくてはならぬ所もあらうが此等の問題は他日に譲り余は今彼の二百五十年忌に當り愈々彼の偉大なる人格事業を偲び大正昭代にも須らく斯の如き大畫才の出現せん事を熱望して已まぬのである。

一 木庵茶會

余は十月下旬赤坂自邸一木庵に於て連日名殘茶會を催した然るに同廿九日來會の野崎幻庵翁が詳細なる實見記を中外商業新報茶會記欄に載せられたから茲に

之を轉載して自筆の勞を省き且つ幻翁の芳情を謝す

筭 庵

上

この程所用ありて東京澁谷の舊居に起臥し贈遺存問殆ど虚日なき折柄偶々高橋筭庵に邂逅し月の廿九日正午小田原同村の長老益田鈍翁室田頑翁等と共に相迎へて殘茶一服を薦めむといふ。筭庵は常に東京に住居し余は湘南の僻地に幽棲し時には音信相通ぜざるにあらざるも互に膝を交へて相語らざること一年半その間彼の大地震火災の厄難に遭ふてさすがの交友も多くは世に憚りて茶事を催さず而も鈍翁や余等は花朝月夕雪晨雨夜の折々など一碗を啜りて共に風流韻事を談ぜざるにあらぬも凡そ茶會といふ茶會には參席せずして打過ぎぬ。犬も歩けば棒に當るとかやその日は恰も筭庵にこの相談を受けてまた間もなく團狸山の許よりも同日の夕刻是非に來遊を待つとの案内に接す仕合せなるかな一方は正午にして一方は夕刻といふなれば貧僧の重ね齋ともならず況してや筭庵とも狸山とも年來契分厚き間柄情誼勿論拒むべきにあらず彼にも應是にも諾と答へて當日は案内の刻限に遅れ

まじとて先づ箒庵が幽居なる赤阪一ツ木の伽藍洞へとは車を急がしむ
 寄付には時代の唐物緞通を敷きて程よき邊りに松花堂好杉木地鯨手付烟草盆に雅
 致ある志野四方の火入を備へて置き、壁床には恬淡瀟洒に探幽筆(瓢箪印駒の圖の
 小幅を掲げその脇なる棚には時代籠地の小硯箱に時代の色紙を添えて置合せを
 見るのみ。香煎は飯頭の漢が汲出して小田原老人組の一隊は東京骨董商の猛者
 伊丹信太郎を末客に控へて庵主の案内今や遅しと待ち掛けたるこそ樂みいと深し。
 一木庵の露地は綠蔭晝なほ暗く莓苔地に満ちて年と共に静寂を加へ風情幽玄恰も
 山中の孤庵に入るの趣きあり。いよ／＼本席に進み入るや床には一風紫地印金中
 唐物淺黄地織紋緞子上下濃茶地沱の表装を施せる西行法師の歌切を掲げたりしが
 いづれ世の風には當らぬ大名侯家の傳來と覺しくその歌にいふ

月を

こがらしに雲の衣ははらはれて

されるものなき秋の夜の月

京にはへりしころ高野より申つかはしはへりし
 小倉山ふもとの秋やいかならむ
 高野のみねはしくれてそふる

返し

をくらやまふもとの秋をまちやせむ

一讀歌意無限の幽懷を覺えつ次で爐邊に移れば鹿苑寺の三文字を鑄こめしやつれ
 の鐵風爐に九兵衛作の尾垂釜銀付は竹の節を掛くるを見る。ことに爐中の灰は晩
 秋肅條の光景を現して心ひそかにその手腕の凡ならざるを感嘆す。

下

おの／＼著坐に及ぶや庵主徐ろに席中に進み出で、型の如くに挨拶しさて時刻も
 既に午過なればとて懷石を饗す。その獻立は如左。

膳椀 溜塗隅切皆具

銚子 糸目志野蓋

酒器

雲鶴 酒次、染付黄瀬
戸蓋

向付 鈍阿焼割山椒、鱈、岩茸、山葵、甘酢

汁 焼茄子

椀 鶉たゝき寄せ、しめじ、笹の雪豆腐、柚輪切

焼物 吉兵衛作備前焼片口手付、彫名、京都産海老芋

小吸物 紫蘇の實

八寸 木葉鰯、隠元

香物 高取小鉢、胡瓜

菓子 乾山繪替木地銘々盆、栗羊羹、柿の葉敷きて

時節は己に晩秋その獻立は先づ以てこの外はあるべからず兎にも角にも東京は人生の極樂園時新の魚菜は奢靡を尙ひ猫も杓子も口腹何を求めてか得られざるものなきも常に湘南の遐陬僻境に生活せる余等には恰も太牢の羹、八珍九醞前に在るが如くに覺え席が席客が客なれば松濤鼎に應じて茶烟翠に花影杯に和して酒氣香しといふが如き興趣はなきも庵主が攝待極めて懇ろにして會心快目一同やうやくに枯腸を慰し食事を終りて後炭手舞を見る。使用の器物は次如し。

香合 時代唐物輪寶

羽箒 青鸞

火箸 時代鐵張拔

炭斗 紙捻、太郎庵什器

就中香合は雅趣に富みて而も優麗、炭斗は流石に太郎庵の手澤にかゝりしものだけに雅致ありて最も稱すべく名残の茶事としては蓋し適當の品なるべきや。かくて

香合の一覽を本席の一段として暫時腰掛に憩へば天地に秋は深く木梢に風の音ぞして、冷氣人の肌に迫り來れども胸懐おのづからに爽快言はむ方もなし。五點の磬の音に促されて再び本席に入るや床には唐物木耳竹組籠の花入を掛けて、己に露にも霜にも飽きて、千々に染めたる蔦萱、芒野薔薇の實、割木香野菊さては夢のやうに咲き残れる女郎花など插みて、晩秋蕭條の風物を偲ばしめつ。道具疊にはやつれの鐵風爐を中心として、その左手に空中彫銘經筒形の水指またその右には名物正法寺裂の袋に藏めし茶入を置き合はして飾り付く。四邊幽寥席中聲無く、只だ爐中紅炭方さに熾にして、釜中幽かに松籟の音を傳ふるのみ次で徐むろに茶碗、建水などを運びし庵主は、爐前に端坐して専ら金針の腫を茶碗に注ぎつ、洒々落々と點て、侷めし茶を味ふに、殘茶といふは名のみ茗芽一啜便ち芳潤脾腑に逼るを覺え、正客鈍翁その銘を問ふや、庵主之れに答へて獅子の白といふ、獅子の白は即ち先年英皇太子に薦めまゐらせし縁に依りて之れを名づけ、その味や殆むど好みの白に異ならず未客やうやく嘸み了はりて、茶器類の一覽を遂ぐるに如次。

茶入 丹波焼 神尾元知箱 銘 紅葉

箱蓋裏に一首の歌を記せり

嵐ふく大江の山のもみぢ葉は

生野に織れる錦なるらむ

茶碗 織部黒 箱片桐石州

瀬戸やき茶碗織部より來ることあり

茶杓 宗旦共筒 銘 半身 建水 塗曲物 蓋置 半枯引切

茶入は釉薬形相共に寂びて、残茶の催しには最も相應しき品柄なれど、さて何處の焼とも容易くは見分け難く、蓋し多くの茶客もその鑑別には苦みたらむか。さすがは正客鈍翁一見丹波と判定して、一座皆なその鑑識の高きを稱ゆ。茶碗は御所丸を狙ふて、而も一の品格を備へしもの宗且の茶杓も亦放膽に割り上げたる所に一見識を示して妙味あり。一器一物いづれも相當の品格を保ち、その配合亦おのづからに適處々々に能く篋り、これにつけても箒庵が茶境の老熟嘆稱すべしと謂はむ哉。

後段の薄茶は藤谷宗匠萬事周旋の勞を執りしが、總ての器物本席に順應して如左。

茶碗 鬼熊川

換茶碗 母茶碗再用

水指 金森宗和好口付湯桶

茶入 唐物立鼓形薬器

茶杓 利休好象牙

建水 蓋置 再用

菓子器 時代杉木地

菓子 豆粉吹寄、松葉

この間庵主は客と共に晏坐して清談に耽り、汲めども盡きぬ興趣に身も世も忘れて茶を味はふに余念も無く寔や白居易は雖慵興猶在、雖老心猶健といへり。余等一期の月影已に傾きて、餘算山の端に近しといへども身も心も猶ほ壯且つ健にして、清興の享樂感銘の深さを喜びて伽藍洞を辭し、日暮蕭々安藤阪を明治神宮の外苑に向ふて去る。

熊野巡禮

(大正十三年十一月九日)

紀伊國は音無川の水上に立たせたまふは船玉山と云ふ俗謠で音に響いて居る熊野

本宮は素盞鳴尊を主神として總體十二神を祀り創建は崇神天皇の御宇であるさうだ次に熊野川を九里降つた川下の新宮は景行天皇の御宇の創建で主神は速玉大神である又其次の那智神社は夫須美大神が主神で十二神を祀り仁徳天皇の時の創立に係り以上三社を熊野三社とも又は三山とも云ふ昔の信神家は伊勢に七度熊野に十三度など云ひて參詣巡禮極めて多く常に一般民衆ばかりでなく應仁天皇を始めとして仁徳、天智、天武、平城、清和、宇多、花山、白河、鳥羽、後白河、後鳥羽、土御門、御嵯峨、龜山、五天皇の行幸あり中にも鳥羽院の十六度、後白河院の三十四度、後鳥羽院の二十三度など云ふ御幸數の多きに依つて如何に當時朝廷の御崇敬が深厚であつたかが分るのである往昔京都より三社に御幸の時は和泉を経て紀州に入り和歌山より海岸に沿うて田邊に到り此處より山又山を経て先づ本宮に達し熊野川を新宮まで下り更に那智神社に着到する順序で歸路は同じく新宮より熊野川を曳船て本宮まで上るのであるから京都より往復殆ど一ヶ月を費されたさうだ左れば龜山院を最後として爾後天皇行幸の御儀は絶え民衆の參拜も漸く其數を減じ唯那智神社と同境内に

ある西國第一番札所青岸渡寺に詣づる所謂西國巡禮者が今猶ほ昔の如く繼續して居るのみである。

抑も紀伊は山國で樹木の多さに因りて木の國と稱せられ熊野は樹木鬱蒼としてくまなすと云ふ意味より斯く呼ばるゝので今日に至るまで紀州海岸よりも伊勢海岸よりも鐵道の未だ此地に通じないのは山岳重疊して其工事の困難なるが爲めてあらう併し追つては鐵道が聯絡するであらうから交通の便未だ開けず熊野が一方の桃源郷である今日に及んで一度之を踏査して見たいと云ふ志望で余は尾州の森川如春を同伴十一月六日大阪より紀州新和歌の浦に赴き同所より勝浦行の汽船に乗込んだのが午後六時頃であつた。

二

余は尾州の森川如春と十一月六日大阪より紀州新和歌の浦に赴きて午後六時商船會社の大阪尾州間回航汽船に乗込み翌七日午前四時半頃同國の南端勝浦に着到したが船中で暫く天明を待ち棧橋より上陸後午前六時勝浦驛發汽車に乗り二つ目の

那智驛で下車するや先づ那智の瀧を見物せんとて同處より自動車一里程の那智村
 宇市野々と云へる處まで乗着ければ是れより新道舊道の二筋に岐れ舊道は所謂御
 幸道で箱根八里的のゴロタ石組急勾配であるから近年開通された緩勾配の新道路
 を取る事とし同地の茶亭常磐屋主人を東道に頼んで是れより瀧壺まで十二丁程と
 云ふ其半道まで登り行けば古松老杉亭々として天を摩する其木の間より天半に一
 條の白布を懸けたるが如き那智の瀧の見えつ隠れつする其壯嚴さは到底筆舌の及
 ぶ所でない斯くて彌瀧壺に近づくに隨ひ窸々たる瀑聲は次第に地を撼かし來り道
 轉じ溪巡りて愈々瀧の正面に達したのが午前八時頃であつたが瀧は懸崖絶壁の中
 央より落口に於て約四間幅を以て漲り落ち全長三分の一までは懸崖より三間許り
 離れて所謂裏見の形を成し夫れより岩壁に打當りて瀧幅も次第に加はり落口より
 直立七十二間で瀧壺は自ら深淵を成し夫れより更に激湍と爲つて大小石積の間を
 流れ落ち水力電氣ダムのある處まで約十九間の落差があるさうだ此間に例の文覺
 上人が荒業を行じたと云ふ行者岩があつて處々に小瀑が懸かつて居る而して本瀧

の左右は幅廣き屏風狀を成し所謂那智黒石に大壇紋の如く巖劈の跡を留め其周圍
 に松杉雜樹の鬱蒼と蔽ひ被さつて居るのが折柄霜に厭きて錦繡を綴り成し純白一
 條の瀧と相映射する光景は何とも言はれぬ壯觀である。

三

那智の瀧が海内無双である事は今更余の嗚々を要せぬ是れは唯其高さ廣さと云ふ
 點ばかりでなく海拔八十八丈の高さより南面して高く懸つて居るので熊野の沖を
 通行する汽船より明白に之を望見する事を得べく日光華嚴の瀧の前面の眺望を缺
 いて居るのに似ず廣濶なる空間に昂然として南面の尊を示して居るのが何とも言
 へぬ此瀧の威嚴である處で日中は太陽が瀑面を直射して飛沫が自ら彩虹を現じ人
 をして一種の靈感を生ぜしむるので古來飛龍神社とて三輪山の杉と同じく此瀧自
 身を御神體と看做すに至つたのであらう左れば古來此瀧を寫した畫工も少くない
 其中に長澤廬雪の寫生は人の能く知る所で實景には相違ないが如何にせむ瀧の皮
 相を畫いて其精神を寫さぬ憾みがある然るに此瀧の神髓を描いて觀者に渴仰の念

を生ぜしむる者は現今根津青山翁所藏傳巨勢金岡筆那智の瀧が即ち夫れで然も極彩色の秋景であるから恰も余が今度實見した實景其儘で眞に神來の靈筆と稱して宜からうと思ふ余の參觀した日は幸ひ小春風の晴天であつたから山徑を傳うて瀧壺近くまで徘徊する事を得たが平常は飛沫が濃霧を起して青嵐の如く前面に吹附けるので近傍の樹木が悉く片靡さして居るのでも其瀑勢の壯烈を知る事が出来る往時は此瀧に直面して飛龍神社の社殿があつたさうだが山霧の濕氣で久しきに耐えないので今は唯幅三間許りの長方形石壇を設けて置くばかりである惟ふに古來熊野が靈地として知られてゐるのは所謂熊野三社あるが爲めでもあらうが此瀧に依つていよく其莊嚴味を加へ例の御詠歌なる

ふだらくや岸うつ波はみくま野の

那智のみ山にひく瀧津瀬

を西國巡禮が有難がつて唄ひ巡るのも如何にも尤も千萬と思はれた

四

那智の瀧の實見者中には高名な文人墨客もあるが古來名吟を見受けぬのは對象が餘り偉大なので如何に技巧を弄した處で到底之れに超越する譯に行かぬからであらう余も何か記念にと思つて一考して見たが無論凡作を免れぬ

那智の瀧

水上は天の川かとおもほえぬ

空より落つる那智の大瀧

那智の瀧は文覺上人が荒業を試みた處として古來人に知られて居るが常磐家主人の説に依れば如何に文覽でも本瀧の下に近づく事は出來ぬので其下流にある小瀧に打たれて勤行したとの事である其瀧は高さ九尺ばかりで落口に坐禪に適する平坦なる石があるから上人は或は此處に觀法の座を構へたのかも知れぬ土俗呼んで之を行行者瀑と云ふさうだ拙詩あり左に録す

行者瀑

寶地金繩佛自靈

松風吹面帶龍腥

覺公苦業留遺蹟

猶聽瀑聲如誦經

往昔後鳥羽院が熊野に行幸せられた時途中駐蹕の瀧尻やら切目やらで旅次の徒然を慰むる爲め供奉の公卿が當座を試みて之を懷紙に書附けたのが熊野懷紙とて今猶ほ世上に寶重せられて居る而して昨年若州酒井家の藏器入札會に出た十一枚は瀧尻王子で作られた者である又切目王子で作られた者は現今西本願寺所藏であるが其他離れ々々になつて世間に散在して居る者もある後鳥羽院を始め奉り當時著名の歌人飛鳥井雅經卿等の筆蹟も加はつて居るので古來懷紙中の巨擘に算へられて居る而して此至尊の行列が瀧の正面に練り込まれた時は宛然一幅の繪卷物として如何に壯觀であつたらうか之を思ひ浮かべて圖らず左の一首を得た

熊野紀游録一

霜楓御道錦屏圍

鳳輦曾經駐翠微

瀑下靈湫虹飲澗

五雲掩映袞龍衣

五

那智の瀧を一覽了つて歸途天を摩する老木の間の石磴を登り行けば是れが舊道即ち昔の御幸道で處處に胸を突くばかりの急坂があつて約六丁で熊野權現に達するのであるが其道すがら綠樹紅葉の間に一條の巨瀑を見るのは何とも言はれぬ壯觀で之れに別れ去るのが如何にも名残惜かつたから斯なん

幾度かふりかへり見ぬ那智の瀧

また來ん時し定めなければ

斯くて急坂を登り終れば忽ち廣瀨なる山腹に出て、右方の一段高き處に西國第一番札所青岸渡寺が屹立し其地續きに熊野權現十二社が立並んで居たが老松の間に伽藍と社殿の巍然として並び建つて居る光景は參拜者をして自ら敬虔の念を起さしむるに足る青岸渡寺は豊太閤時代に再建された者で特別保護建造物として目下大修繕中であるので其本尊を拜見する機會を得なかつた又之に隣接する熊野權現は背後に山を負ひ十二社完全に並び建つて境内頗る廣く慣例として春秋行はる祭典は上代の遺風を存して最も奇異なる者であるさうだ此境内より更に舊道を八

丁降れば最初新道と分岐した市野々で、余等の一行が同所まで歸着したのは午前九時半頃であつたが是れより再び自動車を急がせて九時五十八分那智驛發新宮行の汽車に飛乗り十時四十一分新宮驛に着到すれば今日當所御幸町河原より午後一時出發九里川上なる本宮行のプロペラ船便ありと聞き新宮拜觀を後廻しにして直に御幸町河原に向へば是れは瀧野川の右岸に在る廣々とした場所船宿若くは水夫小屋等が二列に立ち並んで居るが何れもバラツク式の小屋で出水の場合は悉く取外して野方に立退く仕掛けて凡そ六七十軒ばかり小部落をなして居るのが他所には見られぬ面白い光景である當地より本宮までの船便は午前午後各一回で近來發明したと云ふ長さ五六間許りの細長い川船の船尾に揮發油動力のプロペラを据付けて九里の間を上りは三時間下りは其半分て上下するやうになつたので從來の曳船に比較して兩宮間の交通に一大革進を來し地方人は勿論旅客も御蔭で大に時間に儉約するやうに爲つたと云ふ事である。

六

新宮より熊野川を上つて本宮に至る川筋は九里あるもので之を九里峽とも云ふ處々急湍もあるが今日でも普通物資は曳船で上下して居る程であるから富士川、木曾川、保津川等の如く急激ならず且つ川幅割合に廣く大抵河水と河原と相半し處に依りては河原が三分の二を占めて居るから兩岸遙に懸け離れて船は山又山の間を進み行くにも拘らず柳々洲の所謂舟行若窮而忽又無際と云ふやうな變化には乏しいが沿岸に葵瀑、三重瀑、飛雪瀑等あり又網代淵、撞木山、鐘巖等の奇勝あり新宮より四里川上の右岸上川村大字楊枝と云ふ處には彼の有名なる三十三間堂の棟木を伐つた跡だと云つて楊枝薬師堂が立つて居るのが大に余等の感興を唆つた斯くて此九里峽を例の揮發油動力船で遡るのに約三時間を費して午後四時頃熊野本宮に着到すれば明治二十二年の大洪水まで鎮座まじくした本宮の靈域は熊野川と音無川との合流する處の中島で今尚ほ樹木鬱蒼たる一廓を成して居るが二十二年の大洪水は十津川方面より押出した山海嘯で二千年來の大社殿を一夜の間に押流して仕舞つたので其後新社殿を此處より三四町隔つた高丘の上に移築した始末で傳來の寶物

も追々河底より発見した一部を除くの外悉く流失して其の跡を留めないのは誠に千古の遺憾である扱河岸より一帯の石河原を傳うて先づ本宮の舊跡を巡覽し其流失前社殿の規模宏大なるを想像しつゝ更に彼の丘上なる本宮に參拜する途中古歌に

熊野なる音無川に渡さばや

さゝやきの橋しのびノゝに

とあるに因たる私語橋と云ふ一橋あるのが所柄頗る面白く思はれた

七

熊野本宮は官幣大社で現今の社殿は明治二十二年後に再建せられ三棟の中に十二社を合祀したものだから舊時の如く大規模ではないが數十級の石燈を登りつめた高丘上の平地に鎮座ましまして豊臣秀頼より寄附の銅製釣燈籠などが今猶ほ現存してゐるばかりでなく寶庫中には罹災後蒐集せられた種々の寶物があるので宮司横山秀雄君が余等の爲めに態々寶庫に出張して懇切に説明の勞を取り且つ熊野三

社に關する歴史概要を説示せられたのは誠に有難き仕合であつた斯くて本宮參拜を終るや午後五時頃ともなりければ同地より約一里程なる湯峰温泉まで自動車を走らせて同地の温泉旅館に投宿したが湯峰は熊野街道の一驛で往時小栗判官が來浴して其難病が全快したと云ふ傳説があるので俗に此地を小栗湯とも稱するさうだ驛中を貫く一道の川筋より處々熱湯が噴出し河岸に突き出して甕の如き石室のあるのが判官の入浴した遺跡であると云はれて居る浴場は共同で三軒の温泉宿より出浴する都合であるから浴客に取りては甚だ不便であるのみならず山中の事として旅宿の設備も至つて粗末な様である處で夜分浴場に赴かんとせしに川筋より湯氣が盛んに立昇り澄み渡る山間の明月も霧中に濛朧と見ゆるので左の一首を口吟んだ。

谷あひに出湯のけふり立ちこめて

おぼろに見ゆる秋の夜の月

扱翌八日は午前八時本宮河岸より出發する例の揮發油船に乗り込み約三里川下の

宮井と云ふ處より分岐して北山川に廻り有名なる瀨八丁を見物して午後三時迄に新宮に廻着する都合なので余は早朝同行森川如春と湯峰温泉を出發して本宮より乗船すれば此船は新宮に直行するので一旦宮井で上陸し更に新宮より瀨八丁行の船に乗り替へて午前十時頃より北山川を上り始めたが瀨八丁までは大約三里程で其峡口に達したのは正午近い頃であつた

八

北山川は源を大臺ヶ原に發し紀州に入つて熊野川に合する者であるが水量は熊野川より稍少く且つ淺瀬が多い爲めにプロペラ船の進行割合に遅く熊野川との合流地點なる宮井を發して約三里許りを上るのに殆ど二時間を費して所謂瀨八丁の入口に達したのが正午頃であつた抑も瀨八丁と云へる瀨の字は和歌山の文學倉田積翁の工夫に係り従前は水流凝つて油の如くドロ／＼して居る意味でドロと云ひ之に泥の字を當嵌めて泥八丁と言つて居たのを新に瀨の字を作つて之に換へたのであるさうだ而して此瀨八丁は三重和歌山奈良三縣の境なる宇田戸を分界として上

瀨下瀨に分れ上下共各八丁と云へど其實十丁許りあるので併せて二十丁程の間を指すので舟峡中に入れば斷岩絶壁の兩岸相迫り岩上に松杉雜樹叢生して水深十五尋に達する所あり水は紺碧を湛へて漾々として油の如く奇巖怪石一曲一曲よりも變化して岩壁の景物悉く其影を倒涵する光景誠に言語道斷なり今船足を緩めて徐々に峡中に進めば從來此處に來遊したる文人墨客が其形に因て命名した様々の巖石あり洞天門墜落巖玉笥巖石人峰など云ふは唐人臭い名目であるが瀨二見眠龜鶴松巖筆投岩など云ふは通俗にして却て名實能く相應して居る斯くて上下峡中下峡は幅狭く水深く其光景凄絶を極めて居るが田戸に至つて一旦淺瀬と爲り是れより更に上峡に入れば川幅稍廣く眼界頗る快濶にして前後陰陽の變化あるのが一段の偉觀を添えて居る水中處々に山鴛鴦の浮遊するあり又山鴉とて鵲に類して鳥の岸邊に飛廻るなど宛然山中の神仙境で實見者に非ざれば到底其秀絶を領知する事を得ず鹽原富士川木曾川保津川耶馬溪など其距離の長さ其規模の大きさに於ては或ひは之に優る者があらうが水石景物の奇絶を論ずれば斷じて之を日本第一と稱し

て宜からうと思ふ。

九

瀨八丁を以て日本第一と推賞するのは余一人に限らず同行の森川如春の如きは余より一層熱烈なる同案主張者で左顧右盼する處に奇絶怪絶を叫んで止まなかつたが上瀨の極端を窮めて後今度は上流より見直しつゝ田戸まで引返して川岸の茶屋で午餐を喫し暫時休息しつゝ樓上より見渡せば文字通り斷岸千尺で若し今夜此處に一泊して舊十月十二日の月を眺めたらば蘇東坡赤壁の游など到底比べ物にならぬであらうと如春と共に語り合ふた併し頻に歸程を急ぐので午後一時頃峡中の奇景に名残を惜んで見返り勝ちに歸途に就いたが是れより新宮まで十里の間は所謂千里江陵一日還の概があつてプロペラ船の進行矢よりも迅く午後三時前に新宮御幸河原まで歸着した當峡では和歌は一首も詠まなかつたが詩は左の四篇を得たから之を左に掲げやう

瀨 峡 四 首

奇巖窮處洞門通

兩岸染霜千樹楓

秋入澄潭齊倒影

舟行錦浪繡波中

誰穿混沌試神劔

松翠楓紅境不凡

一棹撼山過急峽

水中粉碎百巉巖

一碧成潭凝不流

山鬢朶朶鏡涵秋

舟人緩棹笑相指

箇箇鴛鴦抱夢浮

瀨峽壯觀知者誰

扶桑第一我先推

賴翁唯說耶溪美

却失紀南天下奇

扱て新宮では最初船都合で神社を見残して置いたから河原より三四丁徒歩して聽て其境内に入れば本社は明治十六年火災に罹つて其後再建した一社殿内に十二社を合祀したので官幣大社と云ふに似ず至つて小規模ではあるが火災の際寶物の大部分を持出したので寶藏の國寶は百餘點に達する由を聞き特に開庫を乞ふて仔細に之れを拜覽したが後小松天皇の烏頸銀裝飾劔二口南北朝時代蒔繪手箱數個足利

義滿奉納御輿などが其最優秀品で概して鎌倉以後の遺品ばかりであつた。

十

新宮神社の寶物拜觀後余等は再び御幸町河原に引返す途中時間あらば紀州藩祖南龍公建立の徐福碑を巡覽しやうと思つたが河原の對岸に木の本行の自動車が待受けて居ると云ふので之を見合せて午後四時發自動車て是れより七里程の木の本に向ひ同所を八時發の汽船に乗込んで翌九日早朝勢州鳥羽港に着し森川如春は序ながら伊勢參宮の爲め關西線山田驛で下車余は大阪經由夕刻無事に京都に歸着した此行沿道の所見に就き記すべきもの猶ほ甚だ多いが其後出逢つた京都名古屋等の茶會記事が山積して居るから今唯其概略を記すに止むるが茲に一寸附記して置きたいのは紀州の舊熊野參宮道筋に瀧尻王子、切目王子など云ふ名稱あり謠曲俊寛の文句にも九十九所の王子まで悉く巡禮の云々とあるが聞けば此王子と云ふのは往時天皇行幸の節、行在所毎に遙拜所を設け道すがら祈誓を籠めつゝ參詣せられた此遙拜所を王子と云ふので即ち小さき熊野の分社と看做すべき者であるさうだ勿論

九十九所と云ふのは其極數を云つたので實際夫れ程の數があつたのではなからう又熊野午王神符とて長方形の白紙に様々の形したる鳥の圖を印刷した者を參拜者に下附する古來の慣例があるが此鳥は八十八羽あつて其箇々を切抜き虚言を吐いた者に吞ますれば忽ち吐血すると云ふ扱て何故斯かる神符が出来たかと云へば熊野本宮は素盞鳴尊が主神で尊は天照大神に對して堅く其誓約を守るべく誓はれたと云ふ因縁より熊野權現は誓約を司る神となり往昔起證文の第一に熊野權現を擧ぐるに至つたのであるさうだ余は此外此桃源郷に語り傳へられた傳説挿話がありはせぬかと里人に就いて聞き質して見たが熊野に往昔一の多々羅と云へる大力の鬼人があつて寺々の釣鐘を引卸して亂暴を働くの屏風太郎と云へる勇者が現はれて終に之を退治したと云ふ位の事だ急遽の際別に面白い小説種を拾ひ得なかつたから熊野巡禮記は先づ此邊で打切る事としやう

松風夜會

(大正十三年十一月十二日)

上

京都の洛陶會長松風嘉定君は十一月十二三兩日鷹峰光悅會に於て騎牛庵の一席を受け持たれた馬越化生翁が滞洛中、恰も余が同會に出席すべく熊野巡禮より歸洛した機會を捉へて同十二日午後五時半より清水五條坂上の自邸茶室に鄭重なる口切茶會を開かれた相客は何れも光悅會に參列の東京勢仰木魯堂、八田圓齋、山澄、靜齋、一行五人であつたが當夜寄附に充てられた母屋の廣間に罷り通れば床に應擧が松花堂の筆意に倣つた枝附き熟柿一個の横物を掛け書院に表山水馬、裏扇菊花、蔣繪時代硯箱を飾り、桃山百双の内宇治橋模様屏風一雙を立て廻したる内側に木地四方瓶掛を置いて之れに砂金袋形鐵瓶を掛け松の木茶盆には唐津燒香煎入と朝日燒内刷毛茶碗を取り合せ席上に根來塗大火鉢と染付松竹梅火入を供へた一閑黒長方形煙草盆を置き並べた飾付先づ以て其陣容の整頓を見るに足る扱て主人の出迎ひを受け化生翁を先達に推して一同庭前に立ち出づれば庭は清水寺境内に接近して眼前に老樹の林立するあり崖に臨んで懸け離れた一棟の庵室に順次繰込んで床内を見

れば夜會の事とて花を先きにし小堀遠州作銘初霜と云へる輪なし二重切竹花入に初嵐椿一輪とハシバミ一技を挿まれたる風情、口切氣分を席上に漂よはせて又なく嬉しく思はれた扱て茶客としては口も八丁手も八丁の剛の者たる當主人の亭主振を今夜初めて拜見すれば處女的優美とは言ひ難きまでも少くも宗匠的沈着を以て懇懃なる挨拶を述べ終るや直に炭手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた

- 釜 古天猫作琴柱銀付 炭斗 時代竹組 香合 志野燒寶珠形
- 羽箒 大島 灰器 南蠻内澁 灰ヒ 桑柄
- 火箸 仙叟宗室所持

中

松風夜會に琴柱銀付釜を掛けられたのは彼の齋宮女御の琴の音に峰の松風かよふらしと云へる古歌に思ひ寄せたるにや志野寶珠香合と相對して重からず輕からず寸分動かぬ取り合せてあつた斯くて一閑半月膳で主人自ら運び出された懷石は左の通りである

- 汁 燕、三州味噌 向附 祥瑞在銘針木皿草
- 燒物 備前燒中手附肴鉢 吸物 海藤花、雲丹 椀 ツムギしんじよ、湯葉、菜、なめ茸、柚皮
- 強肴 赤繪福字鉢、大徳寺 豆腐夫婦だき、花鱈 香物 菜千枚漬 八寸 唐墨、銀杏、海老
- 菓子 蕎麥まんぢう 酒器 樂付壽老人蓋鉢、三島口樂徳利、阿蘭陀色繪盃

懷石器物は何れも洗練せられた選擇であつた中にも酒器は主人が左利きだけに三嶋徳利、阿蘭陀色繪盃など流石に拔群と見受けられた頓て懷石終りて庵室前の腰掛に中立すれば十六夜の月色水の如く澄み渡りたる庭前にかんくと炭火を焚きて夜寒を防ぐ老人優遇の趣向は以て主人の心入の深切を見るべし程なく石磬五點の合圖を聞き再び入席して床内を見れば澤庵和尚の普化禪師自畫讚を掛けられたが禪師が後向きになつて片手に鈴を振つて居る粗畫で其上に若衆之所望に因つて之を書すとして例の書判あり讚歌は左の如し

手にとりて振るとは見れどきこえぬは
わらやの雨か鈴のそらねか

たれさしてまさねそらねをわけぬらん

あやしの鈴の繪にかける聲

此時主人は紋服に袴で静々と常座に着き茲に裏千家流の濃茶手前を執行されたが其器物は

- 茶入 利休好仙叟書付黒 茶杓 宗且作銘腰折 茶碗 ノンコウ作赤樂
- 水指 木地曲 建水 砂張 蓋置 青竹引切
- 茶 萩の白

下

松風夜會の濃茶器物は澤庵自畫讚掛物より割り出して何れも御流儀裏千家緣故品のみを選まれたが輕くて肩の凝ぬのが何より嬉しくノンコウ赤樂は銘こそなければ底に宗且の直書判があつて篋作頗る面白く同人作銘腰折茶杓利休好み黒棗と配合の妙一言もなかつた斯くて濃茶一巡するや同席にて引き續き薄茶の饗應あり水指は仙叟書付菊紋古銅と替はり茶入は瀬戸累座、茶碗は黄伊羅保に仁清作金筋を配し

茶杓は象牙、建水は塗曲で唐物、堆朱盆に千代結及び打物の總菓子を出されたが代點は裏千家高足、金澤宗匠で年輩最早古稀に近く小作りの老人で、面體能樂の翁の如くニコ／＼として座に着くや極めて自然に極めて沈着に何時茶を點てたか分らぬやうにサラ／＼と手前を遣つて除けられた其老練振には一同大方ならず感に堪へ紳士藝として拔群の巧者と見られた松風君の御手前も之れに對しては徒に引立役と爲り畢つたのは固より當然の至りて余は先年尾州大高の故下村西行庵老人の老練な手前を見た以來嘗て斯く迄感心した宗匠に出逢はぬが是れも用意周到なる主人の御馳走として厚く感謝する次第である松風君は加州の産で本據を清水五條坂に構へ同所に大規模の製陶窯を營み又加州に於ける硬質陶器會社長たり業務柄古陶器鑑識に一隻眼を具へ曩に推されて洛陶會長と爲るや其八町式の手腕を振つて京都出身古製陶家の事蹟を表彰し洛陶會は今や當地年中行事の一と爲るに至つた斯かる關係より茶人仲間に入られられて屢々他の茶席に招がれ之れが返茶を出さざれば口善惡なき茶友達より何時も呑み逃げは相成らぬぞと突込まるゝ其口塞ぎの

爲め假に茶人に化けたのだとは主人が毎度宣言する所だが古來風雅の勝境たるに似ず紳士茶人の寥々晨星の如くなる當地に於て此有力なる松風君を得たのは實に千人力にも相當するであらうから余は當夜會の佳招を感謝すると同時に愈々君が將來の發展を希望して止まぬ者である

甲子光悅會

(大正十三年十一月十三日)

東西數寄者の人氣を聚めて連年盛況を加へ來つた京都鷹峯の光悅會も昨年は震災直後として遂に休會の已むなきに立至つたが兼て當會に一席受持の豫約があつた馬越化生翁は今春大阪藤田香雪翁追善茶會に東京方を代表して大いに名聲を轟かした其時より餘力綽々として愈々十一月二十三兩日鷹ヶ峯光悅寺境内の騎牛庵を受持つべく決定した處で關西方に於て誰が其相棒と爲るべきや最近まで未定であつたので光悅會長益田鈍翁は野村得庵君に白羽の矢を立て今年光悅會には馬越

翁がシテ役たれば貴下は枉げて其ワキを勤められたし、其代り來年は貴下をシテとして愚老が其ワキを勤むべしとのノツビキならぬ交渉に得庵君も納得して遂に大虚庵を受持つ事となり本阿彌庵は京都の道具商服部七兵衛老が引受けて馬越シテ野村ワキの其間に自ら狂言方を買つて出で翁千歳三番叟の三役出揃ひで開幕前より一層人氣を集めたのは誠に當然の成行である是に於て余は十一月十二日午前九時頃一番乗りを期して先づ鷹ヶ峯に着到せしに當日の席主は言ふに及ばず益田鈍翁野崎幻庵田中親美諸氏相前後して參着し相携へて馬越化生翁の受持騎牛庵の寄附に入れば是れは茅葺土間附大休憩室で床には光琳百圖中の絶品紫式部石山寺の一軸を掛け其前に小川破笠作玉河の圖蒔繪文臺と時代橋に楓蒔繪硯箱を置合せた其風情一見して先づ是れはくの歎聲を洩さぬ者はなからうと思ふ此光琳石山寺の圖は紫式部を土佐風の極彩色に畫き湖水の月影土坡の樹木等に於て巧に彼の特色を發揮し概して沈着綿密の筆致で幅柄も正に一間床に篋り蛇籠と千鳥を蒔繪した笠翁作玉河の文臺と楓蒔繪の時代硯箱との對照得も言はれず光悅會も既に十會

を重ねて居るが寄附の床飾りに斯程の適役揃ひは未だ嘗て見受けず今後と雖も恐らく之を見る事を得ぬであらう

二

馬越化生翁受持騎牛庵寄附の床飾りは前記の通りであるが此席には萬曆緞通を敷いて遠州藏帳唐銅耳附手焙と宗本鮫鱈火入を備へた宗和好み松の木蓑盆を置き並べて來客到着順に騎牛庵に繰込ませた扱て其本席の一軸如何と見れば土方縫之助舊藏定家卿初雪二首で其歌は左の通りである

はつゆきふりたるゆふくれに人の

こひわひてありけるほどの初雪は

きえぬるかとそなたかはれける

返し

ふれはかくうさのみまさる世をしらて

あれたる庭につもるはつゆき

此歌は何切と云ふにや砂子地紋の臺紙で從來殆んど其類を見ず田中親美氏等も初めて出逢ひたる者なりとて頻に珍らしがつて居た殊に京都は去る九日より驟寒を加へ北山一帶に初雪の積つたのは此掛物の出現する前兆なりしならんと來客の口々に感歎したるも時に取つての一興であつた斯くて此一軸の前には出來面白く釉變り美事なる伊賀耳附花入に臘梅と寒菊を挿み時代木地丸太爐縁に千家名物古天猫唐犬釜を掛けられたが其他席中の諸道具は左の通りである

茶入 中興名物利休銘村 袋 小石疊金入 盆 唐物四方内朱、山里雨、後銘山里 茶入に添ふ

茶杓 小堀遠州共筒山里 茶碗 膳所焼、遠州藏帳 蓋置 青竹引切 茶人に添ふ

建水 南蠻メ切 香合 染附分銅蝶、香千爐 炭斗 唐物兜巾

羽箒 鶴 火箸 櫻皮卷 灰器 湊燒

茶 香の白 菓子 松屋製銘霜夜

如上器物の中利休銘村雨文琳は伊達家傳來古瀬戸作中興名物で加藤風庵が後山里と改名した者だが何れにしても時候場所相當で名物とは云ひながら其作行景色共

大寂で又なく當庵に適合した此茶入には袋が三つあつて唐物四方盆が之に添ひ小堀遠州が特に大佗竹を以て添茶杓を作り置かれたるなど古來茶人の賞玩大方ならざるを知るに足る

三

膳所焼茶碗は箱表に小堀遠州筆でせゝやきとあり遠州が三代將軍家光を品川御殿山の茶室に請じた時控茶碗として作らせた者で其作行に光悦の手癖があるので別に證據とてはないが古來膳所光悦と云はれ白地に黒釉の飛模様が如何にも面白い茶碗である又雜器中では古天猫唐犬釜が千家名物で宗旦の箱書附あり杉木普齋が其傳來を證明して居る次に香合の染附分銅蝶は江戸長岡家舊藏で蓋の甲に分銅形があつて其中に蝶の模様あるのが珍らしく無論型物であるが余等は今度初めて拜見する者である馬越翁は今春藤田家の蘆庵飾り附に於て既に稀代の名譽を博し今又茲に萬丈の氣焰を吐いて一年兩度天下の數寄者を驚かしたのは茶人老後の面目と謂ふべく余は翁の爲に其大成功を祝福して已まぬ者である

扱大虚庵に陣取つて馬越翁のワキ役を勤めた野村得庵君は先づ其寄附の床に常信筆雀鳴子の圖を掛け探幽唐繪寫手鑑帖を陳列して來客の展覧に供せられたが此唐繪手鑑帖は探幽が黒田侯爵家所藏筆耕帖の一部を模寫した者で伊達家に傳來した者であるさうだ斯くて順次本席大虚庵に繰込めば床に探幽筆稻穂の一軸を掛け時代唐物木耳籠に秋草種々を活けられたが騎牛庵の口切濃茶に對して此處は名残薄茶の趣向で時節柄寄附の常信雀と鳴子と本席の探幽稻穂とを對照せしめた手腕の非凡さは何人も先づ首肯さるゝであらう殊に此探幽幅は仁和寺宮傳來で金森宗和表具と傳へられ、中紫地印金など名残の掛物としては少しく勿體なき感じもしたが一席の主役たる掛物に於て先づ來客の膽を拉ぎ置くは之を茶人巧妙の作戦計畫と看做して宜からう更に道具疊を見れば紹鷗時代道仁作唐銅肩衝風爐を長寛作片木目板に置いて淨雪作卍字手取釜を掛け香合は水戸家傳來哀公銘我宿と云へる小瓢に抱一上人が其葉を畫き添えた者で名残茶會には寸分動かぬ組合せてあつた

四

野村得庵君受持大虚庵の床飾は略前記の通りだが其他一座の道具組合は左の如くである

茶入 松平周防守 好み吉 野薦金林寺

替茶入 青磁尻彫

茶碗 御本半使、簀内休々 齋銘いすか

替茶碗 宗和好、仁清作ら

茶杓 簀内比老齋共筒 銘不破

水指 古備前ハンネラ蓋

蓋置 月の輪、時雨櫻木地

建水 瀬戸耳附

炭斗 唐物藤組姥口

火箸 明珍貞家在銘

鏝 徳元在銘

灰器 八田玄齋

羽箒 野雁

茶 三丘園詰銘寶瑞

菓子 甲府松風軒製 銘月の雫

猶ほ席上には古染附楓に鹿の圖火入を備へた石州好み眞塗手附蓑盆に時代獨樂蓑入を添へ小川破立翁作青貝入手爐を置き並べられたが得庵君は益田鈍翁の所望に副ふべく何處までも馬越翁のワキ役者として努めてシテを引立て待ち女郎が花嫁の美を現はすべく自ら華美を避くると同様の趣向に出でられたのは能く其立場を諒解した者で大に之を多とせねばならぬ併し來年は鈍翁との約束通り定めてシテ

役を勤めらるゝてあらうから其節ウンと大氣焰を吐いて思ふさま鬱懷を散ぜられ
 たが宜からう扱て此シテワキの間に立つて狂言方を勤めた集翠庵服部七兵衛老は
 本阿彌庵受持ちて床には澤庵和尚の墨蹟を掛けられたが其文句は左の通りである
 龐道玄云、難々百斛油麻撒樹上、婆子云、易々百草頭上祖師意、靈照女云、下易不難、飢來
 喫飢、困來打眠
 騎牛庵の定家の歌切、大虛庵の探幽の稻穂に對して此處に澤庵の墨蹟を掛けられた
 のは對照上誠に其宜しきを得た者で三席各其趣を異にしたが是れは夫れ々容
 易ならぬ苦心の結果であらうと思ふ

五

服部七兵衛老受持の本阿彌庵は前記澤庵一軸の前に小堀遠州作一重切竹花入を置
 いて之れに初嵐椿とハシバミ一枝を活け杉丸太爐縁に露尾垂釜を掛け南蠻砂張大
 青海盆に光悦好み健肥及び有平捻菓子盛りて茲に薄茶の攝待を興行されたが其
 他一座の道具組合せは左の通りである

茶入 利休黒棗宗且替り
 茶碗 土屋傳來古染付松
 替 萩燒銘唐織

茶杓 光悦共筒鷹峰にて
 水指 空中作矢管口彫銘
 建水 古尹部燒

蓋置 古銅唐花透
 香合 黄瀬戸寶珠
 炭斗 唐物藤丸組

火箸 桑柄
 羽箒 大鳥
 灰器 藪内竹窓長次郎寫

席上には住友知足男好み楓木地葺盆同火入煙管葺入と益田鈍翁好み鈍阿燒手爐と
 を置き並べ何處までも軽く狂言役を勤めたのは流石に此役を買つて出た程の手應
 へがあつた扱て今年の光悦會は三席の調和、殊の外面白く天氣都合も申分なく松翠
 楓紅の風景を眼前に控へて茶室巡りの合間に重詰め辨當を喫する會員に對して茲
 に一大供養の行はれたと云ふのは野崎幻庵が小田原沖で取り立ての鮪を氷詰めに
 して當會に持參し之を刺身にして來賓三百人に配給した一事で生身の儘遠路之を
 當會まで携帶する其手数は容易に非ず葷酒禁斷の山門に此腥物を持ち込んで和尚
 の鼻をヒョコ附かせたのは聊か罪深い業ではあるが此供養にありついた餓鬼會員
 は旨いくと舌鼓を打ちつゝ無上に施主の好意を感謝し是れぞ正しく鮪當りであ

らうと駄洒落たのは全く先例のない甲子光悦會の景物と謂つて宜からう斯くて來年の茶席受持當番まで已に豫定せられて居る光悦會の前途多望なるは斯道の爲め誠に祝着の至りである

玄庵殘茶會

(大正十三年十一月十四日)

浪華の耆宿村山玄庵翁は十一月初旬より攝州吉住自邸玄庵に於て殘茶會開催中余と馬越化生翁が同十三日洛北鷹峰光悦會に參會の由を耳にせられ其翌十四日午前十時玄庵に臨席すべく申越された處が余等は同日午後三時野村得庵君の東山碧雲山莊に赴くの先約があるので如何はせんと當惑した因つて想ふに余は多年玄庵翁と道交あり東西各處の茶會に於て同席の光榮を荷ふた事幾回なるを知らぬ程だが掛け違ひて未だ翁の茶會に參列した事がない今度も又々參會が出来ぬかと失望したるに翁も亦之を遺憾としたりけん野村君と交渉を遂げて夕刻までに京都に歸着

すべく時間の繰合せを附けられたので余は十四日午前八時半馬越翁及び當日末客を承はつた服部七兵衛老同道京都出發住吉に參向の汽車中大阪にて今日相客たるべき泉州堺の宅徳平君に邂逅したれば相携へて住吉着停車場より五六丁程の村山邸に人力車を驅り門を入りて突き當りの本館玄關前より右手に向へば老樹陰森たる間に一條の石徑あり樹間の紅葉霜に飽きて箒目正しき露地にハラ／＼と散點したるも風情あり斯くて數十歩爪先上りに登り詰めたる丘上に一構への庵室あるは即ち玄庵で入口に廣き土間を取つた六疊ばかりの一室が今日の寄附なりト見れば壁側に萩焼蘆舟繪雪舟文字入爐屏を立て其前の時代大内鍍金山水彫瓶掛に寒雉作篋れ鐵瓶を掛けモール縁木會盆に朝鮮唐津香煎入と染付蘆雁の繪茶碗とを取り合せ掛物代りに應舉が桐皮付板に啄木鳥を畫いた柱懸を掛け置かれたのが一風變つて面白かつた扱て相客はと見れば余等同行四人の外に大阪の春海敏子と大日本麥酒會社吹田支店長高橋氏が參加して同勢六人であつたから馬越翁を先達として此寄附と背中合せなる鎖の間の廊下傳へに庭前に出て切戸を潜つて茶室と相對する

腰掛に罷り通ればホドロギと云へる稻根編み圓座を並べて時代夫合利蓋に黄瀬戸三つ足大形火入と乾山作木彫狸糞入とを置き合はせ老松幾株亭々として天を摩し叡山苔蒼々として地を蔽ふた茶庭の枝折戸を開いて徐々と余等を出迎はれた白髯清癯の玄庵翁は何とやら此山中に住む神仙でもあるかの如く思はれた。

二

住吉村山邸の茶寮は瓦葺の寄附及び廣間に接續して茅葺の燕庵寫小間あり其廣間を玄庵と云ひ小間を燕庵と云ふ而して今日の濃茶は燕庵で出さるゝので庵主の出迎ひあるや苔蒸したる蹲踞石で漱ぎ順次小間へと入席すれば是れは庵主の御流儀藪内家の燕庵を其儘寫された者で三疊臺目の床に掛けられた一軸は珍らしや白地銀紋唐紙の寸松庵色紙で其歌は

心あてにをらばやをらん初霜の

みつね

あきまとはする白菊の花

である寸松庵色紙は古來紀貫之筆と言ひ傳へられ烏丸光廣卿が泉州堺の南宗寺よ

り取出された時は三十六枚あつたと云ふ其内十二枚は一時佐久間將監實勝の創建に係る紫野大徳寺塔頭寸松庵に在つたので世に之を寸松庵色紙と稱するに至つた余が明治四十二年探索の上其模寫帖を作つた時は僅に十八枚に過ぎなかつたが其後尾州の森川如春が諸方で發見して現存二十九枚と云ふ事であつたのに思ひきや今又茲に一枚出現せんとは而して一風紫地上代紗上下萬曆唐子紋純子の表具申分なく歌は百人一首に出て居る秀逸で時候相當なのが又なく目出度見受けられた斯くて程なく庵主の挨拶あり今日は前茶とて午餐前に濃茶を出ださるゝ趣向なれば直に炭手前に取掛られたが其器物は左の如し

釜 古天猫作車軸、牡丹

風爐 大西淨久作鏡紅鉢やつれ長寛作荒目敷板

炭斗 長次郎作素焼大炮

羽箒 野雁

香合 鎌倉時代粉溜丸内桐紋蒔繪錫縁長角

火箸 長山宗仙好桑柄灰七共

鑲 徳元作鏡象眼

如上器物中時代蒔繪香合は丸内桐紋模様珍らしく錫縁の窠れ具合得も言はれず風爐釜も亦大侘で長次郎大炮烙に炭と灰とを盛合されたるなど遺憾なく名残氣分を

現はして居た

三

燕庵にて庵主の炭手前終るや敷内形縁高に盛て出されたる銘行く秋と云へる御菓子頂戴して元の腰掛に中立すれば頓て銅鑼七點の合圖ありしにぞ再び入席して床内を見れば敷内劍仲作一重切に咲き残りの醉芙蓉を活けられたのが余等の目には又なく珍らしく見受けられた斯くて庵主は病後起居不自由なれば敷内拙庵宗匠に濃茶代點を依囑したる旨挨拶あり乃ち宗匠入り替はりて濃茶手前を執行されたが其器物は左の通りであつた

茶入 唐物丸壺三宅亡羊銘三津山袋白極純子

茶碗 千家名物赤織部

茶杓 織田有樂共筒銘初霜

水指 宋胡録花紋

建水 南蠻ハンネラ

蓋置 信樂輪

唐物丸壺三津山は名物には非ざれども寸松庵色紙やら流祖劍仲作花器に對して能く對等の威嚴を保ち松平伊賀守傳來て古來一品物と稱せらるゝ千家名物赤織部茶碗織田有樂銘初霜茶杓其他宋胡録水指ハンネラ建水等何れも大佐の名品と配合其

宜しきを得て飽まで晩秋幽寂の茶味を一座に漲らせたのは如何様大家の名殘茶會と領かれた斯くて濃茶一巡するや廣間玄庵にて懷石並に薄茶を差出すべしとの案内があつたので元來し露地を逆戻りして最初の寄附と背中合せなる八疊廣間に動座すれば一間床に一文紫印金、中風帶茶地造土印金表具の卒翁筆布袋滅翁禪師讚豎幅を掛けて其前の唐物黒無地中央卓に砧青磁袴腰香爐を置き書院には寒菊を活けた原叟銘蝸牛と云へる備前扁壺花入を飾り久以作木地爐縁に唐物黄銅の自在と利休より劍仲に送られた釣環で淨味作長耳筒秋草地紋釜を釣り薄茶饗應に先だつて庵主並に拙庵宗匠共々盡善盡美の懷石を運び出された

四

玄庵廣間は前記の床飾で薄茶に先ち長寛作鉤目折敷及びうるみ塗椀を以て庵主と節庵宗匠とが共々左の懷石を運び出された

汁 茄子、合せ味、喰、摺り

向附 無地志野向、烏賊も

椀 南瓜しんじよ、隠元豆、しめぢ、茸、穂紫蘇

燒物 備前十角平鉢、かま

吸物 海藤花、針しようが

強肴 祥瑞二段捻井、吳洲蟹繪小皿、鯛作り身、山葵、黄菊

玄庵殘茶會

同 青磁端反小鉢、鹽辛

八寸 鮎すし、松茸鹽焼

香物

斑唐津三角小鉢、瓜
奈良漬、茄子辛漬

酒器 鐵砂金袋形燗鍋、吳洲赤繪
徳利一對、唐津猪口

猶ほ此外に萩のびつ鉢、信樂片口小鉢に盛りて二種の強肴を出さるる筈であつたのを余等が歸程を急ぐので今日は之を省かれたが懷石の鹽梅と云ひ献立と云ひ何れも庵主が慘憺たる苦心を経たる者で之を盛りたる器物と共に之を細評せんとすれば殆んど際限がないから總て結構づくめであつたの一言を以て之を蔽ふ事としやう斯くて懷石終りを告ぐるや藪内竹猗筆千本松畫風爐先の内に桐丸卓を置いて瀬戸野田手一重口水指と輔信好み溜塗菊形彫薄茶器を飾り拙庵宗匠座に直りて最初に炭手前を次に薄茶手前を執行されたが其器物は

香合 唐物象牙彫鴛鴦香

炭斗 庸軒詩銘古瓢

羽箒 青鸞

火箸 時代蒔繪柄

茶碗 古刷毛目

替 黒一入作銘落葉

茶杓 舟越伊豫守共筒
銘龍田

惣菓子 唐物青貝栗鉢、吹寄、燒
櫃及び銀杏實

如上所記に依りて此廣間の飾附が如何に善美を盡されたかは容易に推測されるて

あらう余等の茶趣味より言へば今回の茶事は小間燕庵が十分に殘茶氣分を發揮して居るから成るべくは懷石も薄茶も此席で頂戴して飽まで晩秋幽寂の滋味を味はひたかつたのであるが庵主としては遠來の客を厚遇せんとする盛意に引かれて口切茶會も及ばざる程の堂々たる此廣間を出すに至つたのであらう此時午後二時半近く最早歸洛の時間が迫つたので此上餘歡を盡すを得ず厚く庵主の芳情を謝して名殘惜くも玄庵を辭した

蘆葉一曲

(大正十三年十一月十四日)

大阪財界の巨頭野村得庵君は數年前より京都東山南禪寺畔に碧雲莊と云へる宏莊な別業を經營中であるが南禪寺は昔石川五右衛門が其山門に棲んで居たと云ふので彼の山門五三桐の狂言のセリ出し大道具で遍く世人に知られて居る實に東山四百八十寺中形勝第一の地と推され頼山陽が一帶青松路不迷と詠じてより文人墨客

行樂の場と爲り殊に近年此地が琵琶湖疏水尻と爲り其剩水を庭園に引くの便利を得たので故山縣公の無隣庵を首として市田稲端山中塚本中井諸家の莊園が碁布星羅の狀を爲し又旗亭には有名な瓢亭などがあつて何れもいざ見にごんせ東山の誇りと爲つて居る其中にも碧雲莊は東面して右手に近く南禪寺を控へ永觀堂鹿ヶ谷より黒谷に至る三十六峰の大部分を一眸中に收め庭前に大池を湛へて其周圍に亭臺庵室を配置した結構眞に風雅幽清を極めて居るが別して珍しいのは池畔に繋げる大屋形船中に藪内家雲脚席を寫した茶室があつて花晨月夕客を載せて池中を漕ぎ廻る事が出来る一事で是れは當莊中特別の興趣と謂つて宜からう斯くて大正十一年初夏余が初めて當莊を訪ふた時莊主は此船中で薄茶を供し何がな余に命令せよと言はれたので余は其後勘考の末終に之を蘆葉と名け更に蘆葉に象つた茶杓を作り之れに小唄一篇を添へて莊主に送つたが其文句は左の通りである

浪華江のよしあし繁き折ふしにちよつと一いき月と花いざゆきて見む東山並木の松に問はずとも路迷はずと山陽が口ずさみたる南禪のみ寺の鐘もちかぢ

かとひゞくみどりの雲の宿心もすめる池水に浮かべる船は昔彼の達磨が乗つた蘆の葉にさながら似たる苦屋形内ぞゆかしき焚物や木のめのかをりとめてくるみやびの友とまどゐしてしばし浮世をかくれ里靜に聞かん松風の音

二

野村得庵君が壯年氣鋭且つ其業務の多忙なものにも拘はらず餘裕綽々として時々趣向に富んだ茶會を催さるゝのは一見甚だ異數のやうではあるが聞けば君の祖父も先考も皆な茶事を嗜まれたさうだから庭訓の素養が傳統的に君を此方面に引き附けた者であらう左れば本年初夏余が君に蘆葉茶杓並に其小唄を進呈した時から君が胸中には已に成竹があつて光悅會時分余等が入浴するを期し茶杓及び小唄開きの一會を催さんと準備せられた者であらう乃ち光悅會の翌日十一月十四日午後三時より余等を東山碧雲莊に招かれたが余等は當日午前十時より攝州住吉村山邸の玄庵殘茶會に參席したので同茶會を勿々に切上げ急ぎ歸洛して碧雲莊に馳參じたのは午後四時半頃であつた處で今日の相客は同じく玄庵に招かれた馬越化生翁服

部集翠老の外、光悦會世話方を勤めた東京及び京坂道具商連で梅澤鶴叟、山澄静齋、伊丹揚山、林樂庵、土橋無聲、今井貞次、郎戸田音一諸氏であつたから自ら光悦會慰勞會の姿と爲り何れも昵懇の顔觸れとて互の挨拶も勿々にして未だ暮果てぬ間に庭園拜見と出掛けたが花泛亭と云へる披きの間の前より茶室と寄附の傍らを過ぎて東山側の池邊に沿つゝ奥へくと進み行けば一叢茂れる樹木の中に驚々たる瀑聲を聞く此處に御影石の幅廣き石橋あるが何とやら虎溪三笑の昔を偲ばしめ橋下を流るゝ溪水は涓々として大池に注ぎ洲濱に亘む雌雄の丹頂は千歳の齡を莊主に捧げて瑞氣一庭に漲るの風情あり池の北端を繞りて母屋の前を通り澤飛びを渡りて漸次元の出發點に近づけば待月軒と云へる腰掛待合の前なる池畔の高卓に是真熟柿繪重箱を並べて栗銀杏など云ふ折詰を備へ青竹の三叉に手取釜を掛けて落葉を焚火に充てたのは彼の林間に酒を煖むる風流を學びたるにやあるらん高卓を繞れる床几に腰打掛けて上戸は一杯きこしめしつゝ蒼然たる東山の暮色を眺むる心地好さ一刻千金は唯春宵ばかりかはと思はれた

三

南禪寺の晚鐘が陰々として響き渡り東山の秋色が夜の帷幕に鎖され終つた時余等は導かれて今夕薄茶會の寄附と定められた花泛亭と云へる八疊廣間に打通り入席最初に先づ一喝を喰つたのは床に掛つた圓山應舉寫道八達磨の一軸である道八達磨とは織田信長の實弟同有樂齋長益の次男で同苗頼長祝髮後雲生寺入道道八と云はれた人が所持して居た兆殿司筆朱衣達磨の事である道八は在俗の頃從四位下主計頭で左門と稱したが乃父有樂齋は利休七哲の一人であるから彼は夙に其茶法を傳へ且つ頗る書畫を善くし人と爲り飄逸奇警にして人の步趨を追ふ事を好まず晩年洛東に隠れて山華老人又は一谷山人と號し元和六年九月行年三十九で歿したと云ふ而して彼が所持した兆殿司筆朱達磨は最も能く其相貌に似たりとて其儘自身の肖像と爲し圖上に左の文句を書き附けた

不足なりと我れが姿とならしませ

昔は達磨今は道八

我が影とながめながらも世のうさを

知らぬ顔こそうらやましけれ

磨も人も知らざる古坊主を我が影となし無き跡に残し置くべきかと

虚空元年月日

兆殿司の畫いた達磨を我が肖像と爲し其達磨が世のうさを知らぬ顔なのが美ま
いと云ふのも已に一風變つて居るが虚空元年など云ふ着想も随分彼の奇藝振りを
發揮して居る而して余は今より數年前或る人より此一軸を譲り受け達磨の畫は左
ほど感心もしなかつたが道八の題詞が非常に面白かつたので戯れに道八達磨と題
する一曲を物し東明節家元平岡吟舟翁に節付して貰つて東明節集に載せた事があ
るのに今夕突然應擧寫しの同圖を見て道八達磨の幽靈ではないかと少からず吃驚
したのである聞けは此幅は東本願寺舊藏であるさうだから本歌も一時同寺の所藏
で應擧に模寫せしめた者であるかも知らぬ唯惜むべきは余が其後何心なく彼の本
歌を人に譲つて今は其行方さへ分らぬ一事で若し猶ほ之を所持したらんには直に

取つて今夜の返茶の材料と爲すべき者と暫時感慨に堪へなかつた

四

碧雲莊寄附花泛亭の床には前記の如く應擧寫道八達磨の一軸を掛けて遠州好み桑
卓に古赤繪金欄手向獅子香爐を置き其傍らに定家卿筆讚岐入道集帖を飾られたが
爐邊を見れば直齋好み一閑張紅葉に水蒔繪爐縁に茄子形手取釜を掛け竹雲畫讚南
禪寺五勝汲出茶碗織部燒瓢形香煎入色繪三人形蓋置を茶盆に置き合はせ席上に織
部燒手焙と景文曳船畫入糸巻形火入を備へた手附煙草盆を出された飾付莊主が如
かに周到なる意匠をこの一會に凝されたかを知るに足る程に莊主は此寄附の
障子を開きて懇懃に默禮して去られければ馬越長老を先達として一同歩みを池邊
に運び汀に繋げる例の屋形舟に乗り移れば是れは藪内家雲脚席を寫した者で廣さ
約三疊ばかり船尾寄りの板床には彼の蘆葉茶杓に添えたる小唄の一軸を掛け床脇
柱には白椿と鶯神樂を活けたる油滴天目藥筒花入を懸け其前に箒庵作共筒蘆葉茶
杓を飾られたが小唄の表装は五節の舞の舞姫に縁故ある色絹を中とし上下も似寄

りの古紙を用ひ莊主が寄送者に花を持たせんとて容易ならざる意匠を費やされた者で今更慚汗春を沾すばかりか最と勿體なき心地して殆んど之を正視する能はなかつた此時莊主は悠然と座に入り來つて一同へ夫れくの挨拶あり直に炭手前に取掛られたが其器物は左の通りである

釜 光悦好平丸山光水
色文字入

爐縁 正倉院古材

炭斗 唐物藤組平丸

香合 交趾燒狸

鐙 明珍作

火箸 時代桑柄

灰匙 藪内流桑柄

灰器 隅田川燒

光悦會に一席を受持たれた莊主が茲に又光悦好み平丸釜を使はれたのを見ては何人も其寶藏の奥深さに驚かざるを得まい又交趾狸香合を使はれたのも眉唾もので兼ねて南禪寺畔に棲むと云ふ古狸が今や其魅力を現はして我等を此處に引寄せたるにやあるらん左あらば此舟と見ゆるは蘆の葉にて頓てブクク沈みはせぬかと一座中に内々怖氣を催した様子が見えたのも可笑かつた

五

茶舟蘆葉席で莊主の炭手前終るや備前燒紅葉形皿に鹿の子金とんを盛り又菓子重箱の上に茶豆下に雲脚打物及び錦木有平を入れて莊主自から薄茶手前を興行されたが其器物は左の如し

茶入 古瀬戸作山科宗市
銘かくれ里

替 仁清作中次菊色繪

茶碗 空中作小服

替 御本四方樂暮の文
字あり

水指 古丹波燒頭巾形

建水 時代七寶

蓋置 青磁夜學

如上器物が輕妙で洒落で如何に茶舟蘆葉席に當て箆つたかは今更贅辭を要せず中にも小唄中に「しばし浮世をかくれ里」と云へる文句あるに因て山科宗甫銘かくれ里と云へる古瀬戸茶入を用ひられたるなど果して何たる適品であらう寄附に道八達磨の一軸を掛けて昔彼の達磨が乗つた蘆の葉にさながら似たる苦屋形」と云ふ文句に利かせ本席に此適品を出して前後相照應せしめた猶手段彼の交趾香合の狸も及ばぬ魅力の凄さに驚かざるを得ぬ斯くて薄茶一巡するや夕食は母屋の方にて差出すべしと云へる案内に連れて其二階廣間に打通れば床に圓山應震筆櫻に雉子紅葉

に鶏の二幅對を掛け書院に寒牡丹を活けた遠州好み瓢花入を飾り甲朱高槻膳で心入の懷石を運び吳洲菊竹小鉢伊賀杏鉢入形手馬上杯など數々の珍器も出たが宴將に酣ならんとする頃金屏風を背景としたる次の間に有名なる舞踊師匠井上春女が現はれて後見座に着き祇園の歌妓辻村てい子が地方にて春女の高弟なる舞妓奥村久龍に彼の蘆の葉の小唄一曲を舞はしめた聞けば是れは莊主の好みで小林静子とか云へる長唄師匠が節付し舞の手附は無論春女の考案であるさうだが達磨が乗つた蘆の葉にと云ふ邊で二三足前へよろめき出る工合など船に乗つた氣分を現はして一段殊勝に見受けられた扱て舞ひ終つて愛弟久龍がヤンヤの喝采を浴びた時八十餘歳の老師匠までが終に浮かれて鎗さびを踊り出るを見れば梓の腰は何處へやら其輕妙胡蝶の舞ふが如くなるには一同感嘆の外なかつた淀屋介庵鴻池道億逝いて二百餘年關西に復た此風流の沙汰を聞くのは已に甚だ痛快なるに御蔭を以て余の小品までが大に器量を揚げたのは誠に望外の仕合せて厚く碧雲莊主に感謝する次第である

蘆葉別曲

(大正十三年十二月廿一日)

當代詩壇の魯靈光として余の常に敬重する裳川岩溪晋翁が年末我が伽藍洞を訪れて述懐高作を示さるゝのは數年來恒例となり舊臘も二十一日午前相變らず翁の聲音を聞く事を得た其節翁が袖中より取出されたのは

歲晚偶賦

裳川老漁晋

諸省群僚各戰競

履來大地薄干氷

亡羊失馬交悲喜

野鶩家鷄見愛憎

天下經綸誰所策

聖朝文献據何徵

殘年獨聳窮愁骨

風雪書窓夜對燈

の七律一篇で近頃の官省整理より馘首沙汰の悲喜愛憎に及び翁が時事に對する眼光の老て益々明かなるを見るべく三四の一聯用典自在以て其學殖の富贍を知るに足る斯くて詩談湧くが如くなる際余は先頃蘆葉茶杓に添えて京都東山碧雲莊主野

村得庵君に贈つた小唄蘆の葉の一曲を翁に示した處が翁は俄に詩興を催したる者の如く何が出来るか兎に角貴作を漢譯する積りて一篇試作して見やうとて彼の一曲を持ち去られたが中二日を隔て、早速回示されたのは左の七古一篇である

寄題野村得庵居士碧雲莊茶舫

舫名蘆葉、高橋箒庵所命、亦有蘆葉小曲、京妓爭歌舞

萬里過江一葉蘆

曇摩心鏡明月孤

聖者常說有無漏

眼底萬有歸一無

趙州禪是大公案

定裡茶味澹而腴

東山自似曹溪地

碧雲莊接南禪寺

松風入鼎蝦眼湯

主人深得清寂意

四時待客池繫舟

花月兼泛供茶事

箒庵爲命蘆葉名

小曲水調新譜成

京粧聲妓爭相學

鶯歌宛轉蝶舞輕

何謂風情老無分

綺才綺語知平生

華嚴法界空是色

喧靜皆禪了々得

聞說茶道分源流

猶同宗派有南北

石泉槐火蒲團座

一小天地水精域

堂々たる一雄篇蘆葉達磨より茶禪一味に入り更に進んで茶舫小曲に及び原唱と即かず離れず別に一地歩を占むる處、餅は餅屋で凡慮の及ぶ所でない翁の老詩友滑川澹如翁は之を評して

茶禪相關、亂拍參差、一鳴一應、和而不同、極見結構

と嘆稱されたから余は此詩と評とを併せて裳川翁に揮毫を乞ひ直に之に野村得庵居士に贈つたが居士は死馬骨を買うて遂に千里の馬を得たやうな者で定めて満足せらるる事であらう

飽霜軒開爐

(大正十三年十一月十五日)

上

十一月十二日京都鷹峰の光悦會に參席した益田鈍翁は余と野崎幻庵に向つて今や名古屋に於て開爐の茶會を催さんとする者二人あり一は同地敬和會員なる鮑霜軒山内茂樹君一は今年還曆に達して初陣の一會を開かんとする龍溪高橋彦次郎翁である兩人共に貴下等が鷹峰より歸京の序を以て臨席あらんことを望み愚老に其勸誘の使命を托せられたれば鮑霜軒には十五日正午龍溪翁方には十六日正午愚老同道致したしと言はるゝにぞ幻庵も余も二つ返事で承諾し余は十四日深更野村得庵君の東山碧雲莊より歸宿するや俄に歸裝を整へて翌朝五時京都發汽車にて同十時名古屋着後一旦丸文旅館に投宿して一の宮在祖父江町なる山内鮑霜軒正午茶會に赴くべく十一時頃更に停車場に向へば今日同席の約ある益田鈍翁野崎幻庵丘崎彌太郎の東京勢又當地の富田重助横井庄太郎兩氏が待ち受けられたから汽車で先づ一の宮まで赴き同驛より電車に乗換て正午近くに祖父江着出迎ひの自動車程なく鮑霜軒に馳付ければ郷士風の茅茸門嚴めしく門内の廣場に二抱もあらんずら

ん松の太木がニヨキ直立する風情など昨年二月余が初めて當軒を訪れた時中京茶運と題する茶道記中に記した通りなれば今總て之を省かん扱て一同玄關より六疊寄附に罷り通れば床には應舉筆殘柿三猿の圖を掛け床脇に龍田川蒔繪硯箱を置き朝鮮飯胴に名取川形鐵瓶を取合せ時代鹿の繪茶盆に染附湯呑を備へ時代桐蒔繪手焙と雲鶴火入附仙叟好み蓑盆とを置並べ寄附に於て先づ軒主の心入が如何に深厚であるかを示された而して去る二月は軒主茂樹君が亭主役を勤め嚴父龜次郎翁が之を補助されたが今度は父翁が亭主令息が補助となつて父子其役割を取替へられ乃ち一同腰掛まで立出づれば實に鮑霜軒の名に背かず滿庭の楓葉霜に飽きて錦雲天を蔽ふばかりなる長露地の中潜門を開き父翁が門内に躑まりて遙に掛腰の方に默禮した其風情流石に老功の茶人と頷かれた

中

鮑霜軒老主の出迎ひを受け益田鈍翁先達の下に一同中潜り門を経て松翠楓紅の長露地を辿り茶室前の苔蒸したる蹲踞石で漱ぎ又隱寫し四疊半席に繰込めば床には

行成卿筆朗詠九月盡の詩歌を掛けられた是れは最近伊豫西條藩主松平頼和子舊藏を有志者申合せて分割した其一切で爾來之を伊豫切と稱するさうだが一文字風帶崩黃地金欄中色絲古金欄上下茶地紵の表装が能く取合ひ此切の茶席に掛けられたのは實に今度が最初であるから先陣の名譽は無論當家に歸せねばならぬ斯くて老主出て、一同へ挨拶の後炭手前に取掛られた其器物は左の通りである

釜 定林作伽藍形

爐縁 木地、原叟直書附宗且時代とあり

香合 青磁柿

炭斗 宗全作平達磨

羽箒 鶴

火箸 桑柄

銀 金森徳元在銘

灰器 信樂

如上器物中青磁柿香合は作行色合とも申分なく時候相應で定林作伽藍釜と共に好く此席に取合つた扱て炭手前終るや角切らず折敷と遠州好み丸椀で懷石を運び出されたが其器物及び献立は左の如し

汁 三州味噌、火取百合

向附 金欄手寄せ向、平目このわたあへ

椀 頭芋、葛あんかけ山葵

燒物 備前絨笠鉢、鯛ふき

吸物 寒蕨、芽獨活

八寸 からすみ、松露

香物 伊賀杓小鉢、白菜

菓子 ぜんざい、時雨、椿椀に盛りて

金欄手向附は六客共に悉く替はり中には非常に珍らしい模様があつたので各之を取換つゝ賞玩した前回此席で拜見した唐津手鉢が餘りに結構なので其後大野鈍阿に命じて之を寫させた程であつたが今度の備前編笠鉢及び伊賀杓小鉢も又候衆客の目を惹いたのは當家が頗る食器に富んで居る一證と謂ふべく懷石の平目のこわたあへ、頭芋の葛餡かけ若くはぜんざい、時雨など何れも斯道の甘苦を経た巧者の調理と頷かれた

下

飽霜軒又隱席の懷石終るや茶室と相對する小丘上の腰掛に中立し紅葉黄葉錦繡を張りたるが如き露地の景色を眺め居れば頓て合圖があつたので再び入席して床中を窺へば細川三齋作二重切花入に妙蓮寺椿と檀香梅とを挿み爐邊には杉木普齋が利休所持と箱書附したる南蠻芋頭水指を置き軒主が宗匠的老練を以て濃茶手前を興行された其器物は左の通りであつた

茶入 春慶窯小堀政之銘
袋 伊豫簾白地古金襴
茶碗 志野燒小堀權十郎
鹿子斑
縫合せ
箱書付銘夕陽

茶杓 金森宗和共筒
建水 木地曲
蓋置 半枯竹

志野茶碗は六十以上ならでは使ひこなせずと古來言ひ傳へて居るが今日の主人など全く其人と器と相應し伽藍釜や芋頭水指と共に又なく似寄りの取合せて茶味深きこと言ふばかりなかつた斯て濃茶一巡するや薄茶は廣間にて差出すべければ其順路庭前の紅葉を賞玩あれかしと言はるゝにぞ茶室を出でて池邊を巡り老松槎枿たる其間に今を盛りと染出せる紅葉の下蔭を踏み分け行けば木曾川を隔て、遠く連山を望むに因りて望山亭と名けられた一構への庵室などありて當春來訪の節此庭は晩秋紅葉の盛りに今一度拜見したしと思ひたる其念願が届いて今日此秋色を賞し得たのは誠に無上の眼福である扱て庭前を一覽して六疊廣間に打通れば床には狩野探幽筆寒雲二大字の一軸を掛け長寛城ヶ端寫菓子器に紅白椿落松葉を盛り紅葉半使茶碗利休雪吹寫棗て薄茶の饗應あり此席は若主人が代つて専ら周旋せられたが近來當地方は京阪地方の茶事の餘りに煩雜なるを嫌ひ濃茶後の薄茶席はあ

あつさりと切上げて故なく客に二重の重荷を負はしめざる流儀が流行し出したさうて是れには東京茶風が餘程影響したらしく余等は双手を舉げて之を賛成する次第であるが本日も廣間は至つて淡泊で小間で満喫した茶味を忘れしめざる工夫に出でられたから午後四時頃軒主父子の厚情を謝して一同飽霜軒を退出した

龍溪翁初陣

(大正十三年十一月十六日)

明治後半期に於て名古屋米商界に高彦の名は雷の如くに轟いた高彦とは即ち龍溪高橋彦次郎翁の事で其奮闘時代には荒波を渡り嶮山を踰え七倒八起の境涯に立たれたが近年成功裡に危険界を脱して今や中京屈指の富翁と成り澄された而して昨年は還暦の壽に達したので華甲祝賀の茶會を催す事となり十一月十六日を初會として益田鈍翁を始め余及び野崎幻庵等の參席を乞はれければ余等は中京に新茶人の新に一人出現したるを喜び當日正午西區和泉町なる高橋邸に推參した扱て余は

龍溪翁とは今日初対面であるが翁が只の米商人でない事は久しき以前より承知して居た故下條桂谷翁は常に高彦の名を口にし彼は上京毎に吾宅に來つて頻りに揮毫を請ひ其潤筆料として白米を贈り越さるゝので下條家は年中米を買つた事が無いよと毎度自慢に語られたが聞けば高橋家所藏下條翁の繪畫は殆んど百幅に達して其中には傑作も尠からぬと云ふ事である此一事を見ても翁が其業體に似ず一種風雅の嗜みある事が分るので今度還曆祝ひに自ら初陣茶會を開かるゝのも決して偶然でなからうと思ふ處で高橋邸の寄附は正門を入りて左手の離家で凡そ三疊敷ばかりの一室の床に抱一上人筆木兔の圖を掛けられたが其上に上人自ら烏丸光廣卿の歌を書き附けられた其文句に

夜が明たら湯をわかさう

湯がわいたら茶をたてよう

とあるのが如何にも好く此席に當嵌つた而して丸爐に銀瓶を掛け時代木地長角盆に森川如春手造瓢箪形香煎入と新萬古燒汲出茶碗とを取合せ白井半七作雲華燒手

爐と備前緋襷種壺火入を備へた一閑釣瓶菴盆とを置並べてあつた當日の相客は益田鈍翁野崎幻庵田中親美丘崎彌太郎と余を併せて五人であつたから程なく主人の出迎ひあるや益田鈍翁を先達として寄附前の梅見門より手廣き平庭に出で母屋に接續する本席の前なる蹲踞石で嗽ぎ頓て入席した庵室は三疊臺目で其名を蓬庵と云ふのである

二

高橋家本席蓬庵の床には佐竹家傳來信實筆後京極良經詞書の三十六歌仙切を掛けられたが歌仙は大中臣能宣で歌は左の通りである

千とせまてかされる松もけふよりは

きみにひかれてよろつよやへん

此一軸は今日の正客益田鈍翁が其表具を好み箱書付をなされた者で目出度さ子の日の歌であるから今回使はれたのであらう而して茲に奇遇とも謂ふべきは此歌仙切分割の肝煎たる鈍翁幻庵等庵と田中親美の四人が何心なく偶然此一軸開きに參

會した事で如何にも不思議の因縁なれば分割當時の思出談で暫時一座を賑した扱て此一軸の前には木地丸三寶に載せた長熨斗の上に樂旦入作金溜松笠の押へを載せ置かれたが庵主龍溪翁は臍の緒切つてより今度初めて茶室の主人公と爲られた然も其第一日なれば窮屈さうに茶道口より現はれ出で最と丁寧一同へ挨拶あつて直に炭手前に取掛られたが其器物は左の通りである

釜 蘆屋富士形、銀附鶴 爐縁 久以作木地 香合 青磁木瓜鶴

炭斗 一閑葛桶 羽箒 白鴨 鏡 徳元在銘大角豆

火箸 時代桑柄 灰器 且入寫ノンカウ形 灰匙 時代桑柄利休形

還曆祝賀を主題とする鶴銀附釜、青磁木瓜鶴香合など寸分動かぬ取合せと首肯れたが初陣の初日にも似合はず庵主が案外平氣で無事に炭手前を濟まされたのは椿事を好む今日の不良老年茶客に取りて寧ろ失望の方であつた斯くて炭手前終るや庵主は桐朱搔合塗折敷上り子碗で自ら懷石を運び出され其器物及び献立は左の如くであつた

汁	火取百合、落頭、三州味噌	向附	祥瑞針木口紅鶴丸二詩、鯛一鹽、人參、蔘三杯酢	椀	豆腐鴨抱身、葉附燕
燒物	吳洲赤繪青福字針、白皮鯛醬油漬	吸物	燒昆布、祝の子	八寸	からすみ、丁呂木
香物	信樂香鉢、あちやら漬	酒器	鱒口慶長年號入銚子、唐津三鳥德利、白芙蓉盃		

三

蓬庵の懷石は當地に有名なる川文の庖丁と覺しく其鹽梅の結構は言はずもがな器物も庵主が多年今日を期して蒐集せられた丹精が思ひ遣られて一々敬服の外なかつたが頓て縁高に盛られた庵主好み銘九重と云へる菓子を頂戴して庵室と背中合せの廣庭に面した縁側に中立すれば合圖はなくて程なく庵主自ら出迎はれたから再び入席して床中を見れば金森宗和作尺八竹花入に紅白椿とハシバミを挿まれたる風情口切氣分が一座に漲つて茶味津々たるものあつた斯くて庵主が濃茶手前に取掛らるゝを見れば其器物は左の通りである

茶入 鈍阿燒肩衝、歌銘瓶 袋 絲屋製 茶杓 石州共筒、孤篷庵大

茶碗 釘彫伊羅保銘常盤 水指 木地曲 建水 砂張合子

蓋置 青竹引切

茶

横井松柏園詰
銘初昔

如^に上^{じやう}器^き物^{ぶつ}中^{ちゆう}鈍^{どん}阿^あ燒^{せう}肩^{かた}衝^つ茶^{ちや}入^{いれ}は益^{えき}田^だ鈍^{どん}翁^{うう}が主^{しゆう}翁^{うう}の還^{くわん}曆^{れき}を祝^{いは}ひて贈^{おづ}られた者^{もの}で自^じ筆^{ひつ}の銘^{めい}書^{かき}附^{つけ}に姫^{ひめ}小^こ松^{まつ}とあり尙^なほ箱^{はこ}裏^{うら}の色^{しき}紙^しに書^{かき}附^{つけ}けた歌^{うた}は

千^ち早^{はや}振^{ふる}加^か茂^もの社^{しゃ}の姫^{ひめ}小^こ松^{まつ}

萬^{よろづ}代^よふるも色^{いろ}はかはらし

とあり鈍^{どん}翁^{うう}が大^{だい}震^{しん}災^{さい}後^ご頻^{ひん}繁^{はん}に當^{たう}地^ちを訪^{おんづ}れて新^{しん}進^{しん}茶^{ちや}人^{じん}を誘^{いざな}導^{どう}するの努^{どり}力^{りき}は余^よ等^ちの感^{かん}嘆^{たん}措^そかざる所^{ところ}であるが此^{この}茶^{ちや}入^{いれ}寄^き贈^{そう}の如^{ごと}きも亦^{また}其^{その}一^{いっ}例^{れい}と看^み做^ぞして宜^よからう釘^{くぎ}彫^ひ伊^い羅^ら保^ほ茶^{ちや}碗^{わん}銘^{めい}常^{じやう}盤^{ばん}は里^り村^{むら}玄^{げん}陳^{ちん}筆^{ふで}で箱^{はこ}に

常^{じやう}盤^{ばん}なる松^{まつ}の緑^{みどり}も春^{はる}くれれば

今^{いま}一^{ひと}しほの色^{いろ}まさりけり

と云^いへる古^こ歌^かの書^{かき}附^{つけ}あり概^{がひ}して今^{こん}回^{かい}は祝^{しゆ}賀^がの事^{こと}とて子^ねの日^ひの歌^{うた}の一^{いっ}軸^{ぢく}、姫^{ひめ}小^こ松^{まつ}の茶^{ちや}入^{いれ}常^{じやう}盤^{ばん}銘^{めい}の茶^{ちや}碗^{わん}など松^{まつ}に縁^{えん}ある銘^{めい}柄^{がら}多^{おほ}く斯^かくては蓬^{ほう}庵^{あん}と云^いへる茶^{ちや}室^{しつ}の名^なも蓬^{よもぎ}が嶋^{しま}より思^{おも}ひ附^つきたる者^{もの}にやあるらん多^た年^{ねん}風^{ふう}雪^{せつ}を凌^{しの}ぎ來^{きた}つた主^{しゆう}翁^{うう}に似^にたる老^{おひ}松^{まつ}の緑^{みどり}一

入^{いれ}色^{いろ}まさり茶^{ちや}筵^{えん}に颯^{さつ}々^つたる松^{しょう}聲^{せい}を聴^きくのは何^{なん}ぼう目^め出^で度^たき次^じ第^{だい}ならずや

四

蓬^{ほう}庵^{あん}に於^おける庵^{あん}主^{しゆう}の濃^{こい}茶^{ちや}手^て前^{まへ}は還^{くわん}曆^{れき}の今^{こん}日^{にち}初^{しゆ}陣^{じん}なり初^{しよ}日^{にち}なりて時^{とき}々^く停^{てい}電^{でん}もあり又^{また}庵^{あん}主^{しゆう}一^{いっ}流^{りゆう}の珍^{ちん}手^{しゆ}もあり少^{すく}からず一^{いっ}座^ざに愛^{あい}嬌^{けう}を振^{ふり}蒔^まかれたが流^{りゆう}石^{せき}に機^き敏^{びん}なる主^{しゆう}翁^{うう}の事^{こと}とて目^め的^{てき}たる點^{てん}茶^{ちや}は至^し極^{ごく}上^{じやう}出^で來^きて丸^{ぐわん}藥^{やく}もなければ爆^{ばく}彈^{だん}もなく紳^{しん}士^し茶^{ちや}人^{じん}として瀟^{せん}灑^{さい}點^{てん}及^{きふ}第^{だい}せられたので翁^{うう}の悦^{よろこ}び譬^{たと}ふるに物^{もの}なく東^{とう}京^{きやう}歴^{れき}々^くの宗^{そう}匠^{しやう}達^{たつ}より此^{この}御^ご賞^{しょう}讃^{さん}を頂^{ちやう}戴^{たい}する以^い上^{じやう}は最^も早^{はや}千^{せん}人^{にん}力^{りき}を得^えたるも同^{どう}然^{ぜん}と大^{おほ}に安^{あん}堵^どの色^{いろ}を現^{あら}はされたのは時^{とき}に取^とつての一^{いっ}興^{きやう}であつた斯^かくて濃^{こい}茶^{ちや}一^{いっ}巡^{じゆん}するや同^{どう}席^{せき}にて續^ついて薄^{うす}茶^{ちや}の饗^{きやう}應^{おう}あり水^{みづ}指^{さし}は伊^い賀^が耳^{みみ}附^{つき}茶^{ちや}入^{いれ}は紹^{せう}鷗^{おう}小^{せう}棗^{そう}茶^{ちや}杓^{しやく}は象^{さう}牙^が珠^{しゆ}德^{とく}形^{がた}茶^{ちや}碗^{わん}は不^ふ昧^{まい}公^{こう}手^て造^{ぞう}玉^{ぎよく}造^{ぞう}温^{おん}泉^{せん}入^{いれ}湯^{たう}中^{ちゆう}の作^{さく}て時^じ代^{だい}黒^{くろ}丸^{まる}盆^{ぼん}に長^{ちやう}生^{せい}殿^{てん}の總^{そう}菓^{くわ}子^しを出^いされたが同^{どう}座^ざにては餘^{あま}りに窮^{きゆう}屈^{くつ}ならんとて更^{さら}に案^{あん}内^{ない}せられた披^{ひら}きの間^まの床^{とこ}には孝^{かう}敬^{けい}豊^{へい}彦^{ひこ}景^{けい}文^{ぶん}三^{さん}筆^{ひつ}散^{さん}紅^{こう}葉^え横^{よこ}物^{もの}を掛^かけ床^{とこ}脇^{わき}棚^{たな}に桑^{くわ}木^き地^ぢ浪^{なみ}に鶉^う蒔^ま繪^え見^み返^{かへ}し梨^り子^し地^ぢ十二^{じふに}支^しの文^{ぶん}字^じ入^{いれ}硯^{えん}箱^{はこ}を飾^かり石^{せき}州^{しゆう}好^{この}み黒^{くろ}四^し方^{ほう}手^て附^{つき}貝^{かい}足^{あし}菴^{あま}盆^{ぼん}に吳^ご洲^{しゆう}冠^{かん}手^ての火^ひ入^{いれ}を備^{そな}へ果^{くだ}物^{もの}又^{また}は番^{ばん}茶^{ちや}などを出^いされて緩^{ゆる}々^く餘^{あま}談^{だん}を繫^{けい}續^{ぞく}する餘

地を興へられた扱て龍溪翁が功成り名遂げて目出たく還暦の年を迎へ信實筆歌仙の一軸を掛けて祝賀茶會を催さるゝのは翁の晩年に一異彩を添ふるものであるが之れと同時に翁の茶會に參集した者は勿論之を聞傳へた者まで高彦さんが還暦祝にお茶の湯をなされたと云ふから吾々とても眞似の出来ぬ事はあるまいとて之を羨み之に倣ふ者が續々出て來つたと云ふ事である左あらば龍溪翁は間接に中京に於ける茶道奨勵の殊勳者と謂ふべく而して翁を奮起せしめた原動力は實に今日の正客益田鈍翁にあるのだから鈍翁が當地の茶道に及ぼした影響は實に多大な者でお蔭で道具屋連中まで内々商賣繁昌を悦び合つて居るやうである兎角一方の大立物たるべき人は其背景たる餘技に依つて彌其人格を高くし其輪廓を大きくする者であるから龍溪翁が齡還暦に達して始めて茶事に其指を染られたのは同君の爲にも社會の爲にも幾久しく祝着を申述べて宜からうと思ふ

夕陽茶會

(大正十三年十一月廿三日)

青山根津嘉一郎君は十一月二十三日を初日として赤坂青山自邸斑鳩庵に開爐茶會を催されたが床に東山御物徽宗皇帝讚馬麟筆夕陽の圖を掛けられたから余は此茶會を夕陽茶會と稱する事とした抑も此夕陽の圖は東山御物中でも最も有名のもので古來模寫も少からず絹本堅一尺七寸横八寸八分全幅四尺九寸の小幅で下方に墨繪で山水を描き其山の端より淡彩を以てほんのりと赤く夕焼けの雲を棚引かせ其間に群燕の翩々として飛び交ふ景色得も言はれず向つて右端に臣馬麟の小楷落款あり上端中央に徽宗皇帝が

山含秋色近

燕渡夕陽遲

と方一寸五分ばかりの大字を達筆に揮はれたのが何とも言へぬ上品な氣韻を示して傍に朱印二箇ある其間に賜公主の三字あれば徽宗皇帝が馬麟に命じて此圖を描かせ親から讀して公主即ち内親王に賜はつた者であらう左ればにや畫風溫潤にして和氣を含み其絹本なるが爲め畫面聊か黒ずんで居るが宋畫としては綺麗なる方

にて古金欄表具の結構さは言はずもがな高貴の書名匠の畫双絶併せ備へて風雅の骨頂であるから古來最も人口に膾炙したのも決して偶然ならずである此幅は近年まで麴町通の質商倉又右衛門所藏で何れは大家家の流質であつたのだらうが彼が所藏名物李迪筆歸牛二幅對名物志野丸壺茶入などは明治中期に於て早く既に數寄者の手に譲り渡されたに拘はらず此一軸のみは容易に手放さなかつたので彼の大地震災の節或は焼失せしならんと甚だ懸念に堪へなかつたが何時の間にか根津家に舞ひ込んで居たのは洵に勿怪の幸ひである余は倉又所藏中兩三度之を目撃して居るが今度根津邸口切茶會に於て重ねて之を拜見することを得るのは實に無上の眼福であるから遂に今度の茶會を夕陽茶會と名づくるに至つたのである

二

十一月二十三日正午所謂夕陽茶會に招かれて定刻根津邸に推參すれば殘楓霜に飽きた初冬の景色を賞玩せしむべく庭前より一段低き崖下の露地に導かれたので弘仁堂の傍を過ぎ黄葉紅葉の間を辿つて更に又丘腹まで攀ぢ登れば此處に一構への

庵室あるが即ち今日の寄附で三疊敷の壁床に利休より茶友在中齋に宛てた消息を掛け置かれたが其文句は左の如し

此花入唐物にて候我等かたに前持申候と同前に候能似申候かしく

在中齋老

抛筌

此處に此文を掛けられたれば本席に其所謂唐物花入を使はるゝ事勿論であらう而して室隅の伊賀焼瓶掛には不味好み寒雑作大圓庵鐵瓶を掛け根來茶盆に織部耳附瓢形香煎入と新茶碗とを取合せ杉蒔繪火鉢とベルシヤ草花繪袋形火入を備へた石州好み手附黒塗蓑盆とを置合せた風情今日の茶會の陣容が前衛よりして已に正々堂々たるを知るに足る斯くて相客はと見れば原三溪岩原謙庵前山久吉三君で余を合せて四人であつたから頓て庵室の出迎ひあるや三溪君を先達として此寄附より更に一段高き丘上に登り行けば庵室の手前に中潜門あり門を入りて腰掛あり又其奥に廣間あり廣間に接續する一端が即ち斑鳩庵であるが此茶室前に横の老木ある其傍に大和法隆寺傳來の大石燈籠があるので法隆寺所在地を以て其庵名と爲した

のであらう此石燈前より飛石二三段を降りて苔蒸したる大蹲踞石あるに木の間に
 青竹の筧を傳ふて滾々と落ち来る清水にて嗽ぎ順次席中に進み入れれば是れは二
 疊中板で板敷床の一隅に奈良興福寺古材の大丸柱あり床中には果して例の馬麟夕
 陽の圖が掛つて居たが茶席で拜見すれば一段見榮があつて思はず頭の下る心地が
 したのは名幅の威徳と云ふものであらう更に爐邊を顧みれば胡桃鐵附光信下繪海
 濱遊馬地紋蘆屋釜を掛け庵主出て一同に挨拶の後直に炭手前に取掛られたが其
 器物は左の如し

- 香合 形物交趾狸
- 炭斗 不味公好瓢銘再來
- 羽箒 遠州所持替り鶴
- 灰器 緋磗
- 火箸 宗且傳來宗偏紙
- 灰ヒ 宗和好桑柄櫻皮卷

三

夕陽茶會に光信下繪海濱遊馬の釜を掛けられたのは一軸と對照上斯くなくては叶
 はぬ事なり交趾狸香合も亦甚だ適品と云ふべく其他羽箒火箸に至るまで何れも第
 一流を出されたのは千兩役者の組合せに座主の苦心の尋常ならざるを見るべし扱

て炭手前終るや玄々齋好み一閑折敷と小丸椀で直に懷石を運び出されたが其器物
 及び献立は左の通り

- 汁 三州味噌、大根
- 向附 金欄手寄せ合せ、こ
- 椀 鴨、ほうれん草、芋頭、
柚皮
- 燒物 備前半月手附鉢、鶉
- 吸物 土筆
- 八寸 百合、海老
- 香物 刷毛目小鉢、澤庵薄
- 酒器 青磁蓋鉢子、乾山色繪盃、臺
宋胡錄徳利、唐津及捻盃
- 菓子 栗饅頭

如上器物中金欄手寄せ向は當茶會としては餘りに佻び過ぎたらんとの批評もあつ
 たが何れも目覺しき綺麗揃ひなので實地に於ては左る感じも起らなかつた又饅頭
 抜け模様ある備前手附鉢やら刷毛目小鉢やら其他数々の酒器が何れも餘所行の特
 別品であつたのは庵主が此方面に於ても亦如何に奮發して居たかを知るに足る斯
 て懷石終るや一同庵室と斜に相對する腰掛に中立すれば是より程近き廣間の方よ
 り山鹿流の陣太鼓ならねど底力強く腸に浸み渡るやうな大銅鑼の響きが耳を劈き
 來つたので扱ては雲州家傳來の名鉦なるべしと一同靜肅に固唾を吞んで耳を澄ま

せば大小大小中中の音色間隔寸分申分なく打ち終られたのは言ふまでもなく庵主の手並と領かれた而して夕陽の一軸拜見後直に之を耳にするのは宛ら山寺の晩鐘を聞くが如き心地して夕陽茶會に一段の意義を添へ偶發か故意かは姑く問はず兎に角庵主近來の出來茶と稱して宜からう斯くて再び入席して床中を見れば古銅象耳花入にハシバミ一枝と咲頃の白玉椿一輪を挿まれたる風情前席の一軸と相對して寸分動かぬ處である而して花入は薄作て形式好く寄附て拜見した利休の文が之れに添ひ箱に住吉花入とあるのは片桐石州筆で原叟の書附まで具備して居るのは如何様名物花入と領かれた

四

青山宗匠も茶臘の重なるに隨ひ善く云へば沈着悪く云へば横着になつて濃茶手前に客を吞んで掛るの呼吸は已に免許皆傳の域に達し今日など初會であるにも拘らず手前に停電なく碗中に爆弾もなかつたのは天晴大出來と謂ふべく而して使用の器具は左の通りであつた

茶入

中興名物破風窯本歌銘正木

袋

渦綴子

茶杓

利休作銘松本權十郎筒管付

茶椀

古伊羅保片身替

水指

木地曲

建水

南蠻締切

蓋置

青竹引切

中興名物茶入正木は島原松平家傳來て小堀遠州の丹精に係る箱書附修覆等完全具備して居る而して茶入の半面に此窯特有の黄釉が掛つて他の半面と片身替を成し正木の蔓の黄葉した景色に似て居るので此銘を得たのであらう是れが即ち正木の本歌で大阪の高谷宗範翁所藏大正木は其同手である斯くて此茶入に取合せた伊羅保片身替茶碗は時代古くして一點の疵なく色彩の變化も亦頗る面白い者であるが今日の正客原三溪君は茶入茶碗双方片身替で見た目に色取が相即くから茶碗を古井戸などにして茶入を今一段引立たせたいと言はれた此一評は最も先づ我意を得た者で感服ばかりが客方の能事でもあるまいから是れ位の託宣は庵主も辛抱して聞いたが宜からうと思ふ尙ほ此茶入と茶碗に對して利休作銘松本茶杓を配したの器物の格式上斯くあるべき筈で共筒ではないが作行は頗る秀逸で土屋藏帳品で

あるさうだ斯くて濃茶一巡するや廊下傳ひに廣間に繰込む道すがら水屋に飾られた例の雲州銅鑼の前に坐して試みに之を一撃すれば音響一分以上に亘つて鳴り止まず氣短な庵主が先刻緩々打たれたやうに思はれたのも道理こそ銅鑼の傍に坐すれば其音波の稍鎮まるのを待つが爲め勢ひ打込みの間隔を緩くせざるを得ぬから今日の打方が其度に適つたのは強ち庵主の手柄のみでもないとして彌名鉦の妙徳を稱へたのも可笑しかつた

五

夕陽茶會の廣間は四疊半で一問洞床に鳥羽僧正禽獸遊戲畫の幅四尺五寸もあらんずらん斷片を故山西宗五郎が古代色裂で表具した一軸を掛けられたが此斷片は世間に同圖を所藏する者があつて何れが眞物で何れが模寫か々今猶ほ疑似の間にあるさうだ庵主が之に掛けられたのは自ら所信があるだらうが小間で夕陽の名幅を拜見した後の廣間の掛物は何れにしても其選定が極めて困難であるべき筈だ而して此一軸の前には時代青貝卓の上に黄瀬戸向獅子香爐を飾り爐邊の隅棚に染附菱

馬の水指を置いて川部太郎が庵主に代つて薄茶を代點したが其器物は左の通りである

釜

大四五郎左衛門作 姥口

茶入

不味公好秋野蒔繪

茶杓

象牙

茶碗

御本半使權十郎銘 紅葉山

替茶碗

乾山作柿の繪

蓋置

織部燒輪違

菓子

獨樂盆紅白打物

如上廣間飾は成るべく手軽くして小間と衝突させぬ庵主の意匠らしいが左ればとてガクリ落する譯にも行かぬので此邊最も苦心を要した事であらう今度の茶會は後代に傳ふべき特殊の一会で余が夕陽茶會と名けた程であるが地震後當邸屋下の無事庵が修理未だ全からぬので已むなく大佗太柱板敷床二疊中板席で催されたので銘物掛物も花入も聊か茶席と相當せざる憾みがあつた併し庵主が若し今一層思ひ切つて夕陽茶會の名に稱ふべく寧ろ廣間を抜きにして小間に於ける無限の茶味を専ら客に味はせたらば夫れこそ猶更大天狗であつたらうが佗茶人ならぬ庵主に對して左る放れ業を所望するのは或は無理なる註文かも知れぬ斯くて所謂備を君

子に責むと云へる古語通りに様々批評は試むるものの今度の夕陽茶會の如きは往昔の將軍大名と雖も容易に企て及ばざる盛事で今生斯る茶會に遭遇した余等の幸福は大いに古人に誇るべき者であるから此點に於て余等は庵主に極めて深厚なる感謝を表しやうと思ふ

曉雲殘茶

(大正十三年十一月廿八日)

上

實業界の現役將校中百忙の間より一閑を偷んで時に茶會を催す者が東都に三四人ある而して藤原銀次郎君の如きは即ち其隨一人で暇と客とを見附け次第ポツリポツリと茶會を開かるゝので十一月中旬より始まつた殘茶會が十二月まで延長したのも其筈であるが主人に取つては是れが却て其樂みを長く且つ深くする事であらう斯くて余は十一月二十八日正午の佳招を蒙り例の通り麻布新網町曉雲庵の寄附に推參すれば思ひきや其日庵杉山茂丸翁が早や既に先着して居た聞けば今日は後

藤子爵が正客で川部太郎が末客を承はり外に女性も一人加はつて余と共に五客であるさうだ扱ては自然流の大宗匠後藤子爵の正客振やら其相棒たる杉山其日庵宗匠の活躍など定めて目覺しき會合ならんと大いに興味を感じつゝ先づ一座を見渡せば小書院に菊蒔繪蘆手硯箱を飾り丸爐に鐵瓶を掛け唐物箔繪茶盆に染附茶碗と唐津香煎入とを置き伊賀焼火入を備へた一閑黒四方蓑盆と籠目火鉢とを取合せてあつたが程なく後藤子爵も參着して哄笑一番余に向つて今日は大宗匠と同居なれば萬事御指導を受けねばならぬが拙者も自然流宗匠の資格を以て當庵に招かれた次第なれば其所謂自然流を發揮すべき場合も之れあるべきは豫め御承知ありたしと先づ高飛車に一本參られた斯くて庵主の出迎へあるや無論自然流宗匠を先達として庭前の池に沿ひたる長露地を曉雲庵へと繰込めば例の四疊半茶席の床には西行法師筆白河切が掛つて居たが其歌は左の如し

思ふ人にはへりける時

秋の夜にかりかねなきて渡るなり

わか思ふ人にことつてやせむ

題しらす

秋山の霧とひこえて来るかりの

千代にかはらぬこゑきこゆなり

もの思ふも月日の行くも知らさりつ

雁こそなきて秋とつけつれ

残茶會に西行法師の歌切は寸分動かぬ適役なるに其箱書附が抱一上人で出来一段面白く其歌意が今度の一會の趣意を最も雄辯に説明して居るには自然流宗匠も自然に感服したらしい顔付であつた

中

曉雲庵で主客一應挨拶済むや懷石は直に庵主に依つて運ばれたが其器物及び献立は左の通りである

汁 獨活、三州味噌

向附 唐津洲濱形、鯉、甘酢、山葵

椀 鴨しんじよ、松茸、ずゐき、柚

焼物

海老、蓮根、干蒟、栗、椎茸、入延命袋

吸物 雲丹

八寸 銀杏、ちか

香物

伊賀小鉢、胡瓜

酒器

鐵銚子、井戸脇徳利、染附及刷毛目盃

菓子 牡丹餅

名残の事として器物も懷石も大佗を旨とし客に晩秋幽寂の茶趣を味はせんとする庵主の苦心は如上の趣向に依りて直に夫れと領かるゝと同時に又其進境の著しきを知るに足る扱て此懷石中自然流宗匠と其日庵宗匠との應酬は眞に雄辯高談四筵を驚かすの概があつたが其中にも一昨年自然流宗匠が京都の野村得庵氏別業碧雲莊に招かれた時小鉢に盛つた五客取廻しの葎菜の酢物を宗匠一人前と早合點して殆んど半分程平げたのを末客であつた京都唯一の茶人老妓竹香より「御前はん妾等にも少しはお福分けを願ひます」と注意されて扱ては一人分ではなかりしかと俄に之を次客に引渡したのは此宗匠が茶席入り以來の失策であつたよと物語らるゝに就ても如何に此宗匠が健啖であるかを想像するに足らう夫れより談話は嘗て自然流宗匠の舊住であつた當家の事に及んだが當家は維新前幕府の門松御用人某が幕府の役人御馳走場として築造したもので殊の外木材を精選し土藏の下杭に樺の丸太

を埋込んだなど非常なる贅澤振を示して居るさうだ而して其後伊藤博文公實父十藏翁の住宅となり明治十四年政變の際伊藤公は煩累を避けて一時當家に潜匿されたさうである夫れより折田平内氏の手に渡り更に後藤子爵の住宅となつたさうだが折田氏住居の時は亂暴にも此茶室を養鶏場と爲したので之を復舊するには中々手数が掛つたよと後藤子が語るを傍より其日庵宗匠が聞き耳立て左らば此庵室は爾來曉雲庵を改めて養鶏庵と名づけたが宜からうとの警句には一同噴飯を禁じ得なかつた

下

曉雲庵で自然其日兩宗匠の興味ある雜談中に懷石が終りを告ぐるや庵主は直に炭手前に取掛られたが其器物は左の通りである

釜

八景地紋釜、與次郎 鐵風爐

炭斗

南部籠

香合

時代唐モール編鈞

羽箒

鶴

灰器

漆燒

右炭手前終りて一同元の寄附に中立すれば程なく銅鑪七點の合圖があつたので再

び入席して床中を見れば土中物と覺しく一部に鉄痕の如き凹ある時代經筒に龍膽蔦われもかうしもつけ草馬つなぎ草など云ふ數々の殘花を挿まれたが是れは庵主の參謀長として茶事に執心なる令閨が自身玉川邊まで出馬して採收せられた殘葩遺英で其丹精は眼前に現はれ得も言はれぬ風情であつたが後箱書附を拜見すれば此經筒は元金森宗和所持で小堀遠州所持銘九重と云へる經筒に酷似して居るので宗和が之に面影と銘じたと云ふ傳來あり名花名器と相俟つて遺憾なく名殘氣分を發揮したのが嬉しかつた斯て庵主が濃茶手前に取掛るを見れば其器物は

茶入

古瀬戸、袋逢坂

茶碗

井戸銘雲井

茶杓

權十郎歌銘

水指

備前種壺

建水

木地曲

蓋置

青竹引切

茶 好の白

如上器物中井戸茶碗は寂味十分にて能く古瀬戸茶入に取合ひ又權十郎茶杓は筒に『時わかぬまがきの竹のいかにして秋のあはれの深く見ゆらむ』とあり杉山其日庵宗匠が此茶杓を見て一本槍に遠州作かと言はれたのは此宗匠が中々只の鼠でないこ

とを證明した斯くて薄茶は同席で茶入は黒棗茶杓は益田鈍翁作茶碗は茂三作を正了入作を副とし蓋置は信樂に替はり吹寄せ打物惣菓子で令嬢のお手前鮮かなる代點あり薄茶は程なく終つたが兩豪傑宗匠の坐談は何時止むべうも見えなかつたお蔭で余も圖らず自然流の實地演習を拜見する機會を得たのは誠に無上の光榮であるから此客組に余を加入された庵主の好意に對して茲に深く謝意を表しやうと思ふ

喜壽鈍翁

(大正十三年十二月四日)

嘗て三井王國の柱石たり海外貿易の恩人たりし益田鈍翁が功成り名遂げて古哲嘉遯の跡を學ばれてより今は早や十餘星霜を閱し翁は茲に喜壽の遐齡を迎へられたがヴァイタミン研究、半搗米宣傳の實行は著しく其健康上に現はれて撫松紅艷二令弟の既に鬼籍に上つたにも拘らず其伯兄たる翁は童顏鶴髮鏤鏤として壯者を凌ぎ時

に國家經濟問題に觸れて陰然其智謀を働かす形跡がないでもないが評茶品水宛然江湖の一閑鷗に成り澄まして悠悠々世機を忘れたるが如く舊冬品川御殿山太郎庵に茶友を會して喜壽茗筵を開かれたのは多年翁と雅俗の熟交ある余等の欣賀措かざる所である斯くて余の佳招を蒙つたのは十二月四日正午で相客は室田頑翁野崎幻庵、丘崎彌太郎と併せて四人であつた扱て例の太郎庵寄附に罷り通れば長爐に自在を以て與次郎作手取釜を掛け唐物六角茶盆には染附捻鶴首香煎入萩燒蓋置と新茶碗とを取合せ繪唐津火入を備へた判木寄細工莢盆と時代車軸火鉢を置き並べられたが壁床を見れば下に時代時繪松鶴硯箱を置いて上に箒庵筆熊野紀游詩歌を掛けられた是れにて想ひ當るのは舊冬余が熊野遊覽の歸途名古屋で當庵主と會談の際庵主は余に向つて定めて旅中の吟詠あるべし一筆書附けて示されよと言はれたが其儀ならば歸京後に相願ふべしとて頓て紅葉漉込みの古紙に認めて翁に送つたのは左の詩歌である

熊野紀游錄一

霜楓御道錦屏圍

鳳輦曾經駐翠微

瀑下靈湫虹飲湖

五雲掩映袞龍衣

湯峰にて

谷あひに出湯のけふりたちこめて

おぼろに見ゆる秋の夜の月

右の如く浮かと庵主に送つた拙筆が今日一軸となつて此寄附の床に掛けられたのを見れば紙中の紅葉を浮出させる爲め淡紅色の裏を打ち上下は時代紙を用ひ中廻しは何人の筆蹟にや熊野詣の寫生らしき圖畫を程よく切合せて表装された其お蔭で馬子にも衣裳の譬の如く悪筆が案外器量を上げたのは偏に庵主の後輩を愛護せんとする好意に外ならぬ左るにても此熊野紀游を寄附に掛けられたのは讀めたりな讀めたり先頃若州酒井家の熊野懷紙一枚を庵主が手に入れたりとこの事なれば今日本席に掛るは其熊野懷紙ならんと茲に始めて庵主の茶略を領解したのである

二

太郎庵寄附で飾附を拜見しつゝ香煎湯を啜り居れば頓て庵主の出迎へがあつたら室田頑翁を先達に推して一同庭前に降り立てば冬ながら未だ暖けき日光は苔蒸したる露地を照して小笹の露は玉かと疑はれ庵室前の大蹲踞石に音立て、青竹の筧より流れ落つる清泉に口嗽ぎて山縣老公筆の太郎庵額を仰ぎ見れば其傍眼前に浮かび來りて在りし世の事共何くれと想ひ出ださる扱て入席して床中を見れば果して然り熊野懷紙を掛けられたが其歌は

山川水鳥

源

具

親

いはた川いくせの波にすみなれて

渡れとのこる鴛鴦のひと聲

旅宿埋火

ならひきぬ朝たつ程になりにけり

あたりによわるよひのうつみび

とあり是は正治二年十二月後鳥羽院熊野行幸の節紀州瀧尻王子にて右二題に就き

御製あり供奉の面々皆相和して詠出でたる歌を懷紙に認めたもので一昨年若州酒井家の藏器入札の際十枚あつたのを夫れく數寄者間に分配した其一枚が即ち是れで元メクリであつたのを庵主が丹精して今度斯く美事に表具が出来上つたのである而して此一軸の下には鉛色釉美事になだれ大きさも頃合で一見由緒ありげなる呂宋茶壺を飾られたが是は利休所持で銘を鳴瀧と云ふ者であるさうだ願みて爐邊を見れば久以作澤栗爐縁に豊太閤より金森宗和に傳來したと云ふ古天猫作銘破窓とて胴廻りに其名に相應しき窓形の穴ある大甕釜を掛けられたる風情天正時代の茶席も斯くやあらんと如何にも奥床しく感じたが程なく庵主出座して一同に挨拶せられたから先づ其許しを得て順次お茶壺を拜見すれば庵主は懷中より一紙片を取出して此中にて何なりお好みの茶を御選みあれと渡されたので披き見れば

鳴瀧

御茶入日記

一極上半五

宇治の里 別製

初昔

松の花

御詰 白昔

子九月吉日口印竹田紹清書判

三

とあつたので一同評議の上今日は宇治の里を頂戴する事とした

太郎庵主鈍翁は余等が宇治の里を所望するや茶壺を抱えて一旦引退り更に炭斗及び灰器を持出して炭手前に取掛られたが其器物は左の通りであつた

- 香合 染附 吠々鳥 炭斗 唐物 一文字、小堀家 羽箒 大鳥
- 鐵 鐵金象眼 火箸 宗和好時代桑柄、皮 灰器 長次郎、利休番附
- 灰匙 宗和好桑柄

如上器物中染附吠々鳥香合は甲に藍繪で枯木に吠々鳥の圖があるので此名あり至

つて稀有なもので天下に五個以上あるべしとも思はれず然も多くは疵物であるの
に是れは合口に少々繕ひあるばかりなのが珍中の珍と云つて宜からう唐物一文字
炭斗は精作無比其他雜器一切悉く餘所行品なるは庵主の一世一代たる今度の茶事
の緊張味を示して居た斯くて遠州好み溜搔合板足膳と黒腰高椀で懷石を運び出さ
れたが其器物及び献立は左の通りである

- 汁 三州味噌、小燕 向附 阿蘭陀筒、鯛昆布、岩茸
- 燒物 乾山松の繪、内波の繪、蓋物、鶉蒲鉾、海老芋 強肴 青磁一閑人猪口、野毛生雲丹
- 八寸 唐墨、百合、はらゝご、磯の花、姑慈 香物 御本小鉢、淺漬大根 酒器 鐵鹿地紋銚子、宋胡德利井戸及金欄手盃
- 菓子 翁饅頭、蕎麥粉入 椀 石州好梅鉢、甘鯛、花菜、生椎茸、口柚

懷石は食物博士たる庵主が腕に撚をかけての鹽梅で例ながら眞似難き風味あり器
物は何れも逸品揃ひなる中にも乾山燒物鉢は彼が最も得意の作で其名書の如き殆
んど指金石とも謂ふべき者だが此器物に相應すべく鶉蒲鉾と海老芋とを盛られた
ので内容外觀併せ得て妙なる燒物であつた其他酒器雜器の美事さは筆舌を以て形

容し兼るから總て懷記に依つて夫れく讀者の推察を乞ふ事としやう

四

太郎庵で懷石終りを告ぐるや一同庵室南手の腰掛に中立すれば程なく名鉦七點の
合圖があつたので再び入席して床中を見れば古銅細口銘ソロリと云へる花入を利
休宗旦傳來の朱四方盆に載せて之に淡紅色の太郎庵椿一輪を挿んだ風情如何様熊
野懷紙に對する後座の床飾りと頷かれた此ソロリ花入は世に謂ふ鶴の一聲と略ぼ
同形で普通よりも稍締り其蒼潤なる古色が朱四方盆と極めて好對照であつた是れ
も熊野懷紙と同様若州酒井家に傳來したのを近頃同家より庵主に贈られた者であ
るさうだ斯くて庵主は例の鼠色紋服に朽葉色の腰衣を纏ひ喜色満面濃茶手前に取
掛られたが其器物は左の通りである

- 茶入 中興名物古瀬戸肩、衝銘山内、袋鶉頭裂 茶杓 小堀遠州作銘曲舞
- 水指 南蠻繩籠 建水 木地曲 蓋置 青竹引切
- 茶碗 本阿彌光悅作銘障

如上器物中古瀬戸肩衝銘山内は古來土州山内家に傳はつたのを明治三年容堂公が

出入道具商に對して戯れに三百圓ならば割愛せんと言はれた其行掛り上、本屋平藏の取次で若州酒井家に譲渡された者で其形稍文琳に類し瀬戸釉の變化極めて面白き者であるが之に配した光悦茶碗銘障子は古來光悦七種の隨一として知らるゝ者で同人作としては稍締りたる方で半筒形を成し窯内の變化で障子の格子の如き火割の上にビードロ釉が薄紙の如くに掛り湯水は漏らざれども光線の透き通るに因りて斯くは命名せられたのであらう又此間に立交つて三分鼎足の權威を保つた小堀遠州作銘曲舞茶杓は中程の節廻りに渦卷の如き自然の斑紋があるので此名を得た者と覺しく遠州名物茶杓中無類の傑作として知られて居る此茶入茶碗茶杓三名物に對して火變り面白き南蠻繩簾の水指を用ひ建水と蓋置を新物にされたる器物配合の意匠は實に庵主が慘澹たる經營中より出來りたる者で喜壽茶筵に遺憾なく此名器を配合し得た庵主の茶人冥利は何人も美艷せざるを得なからうと思ふ

五

太郎庵にて濃茶一巡するや廊下傳ひに應舉館附屬八疊披きの間に動座すれば床に

は若州酒井家傳來梁楮筆鷄骨の圖を掛け床脇棚には五十嵐道甫菊に籬蒔繪硯箱を飾り高臺寺蒔繪爐縁に東山御物高砂尉と姥の圖に義政公筆蹟われ見ても久しくなりぬの歌地紋ある銘物釜を掛け鴻池舊藏唐物文字入風爐先の前に宗哲黒長板を置いて薄茶器飾附があつたが其器物は左の如くである

水指 祥瑞芋頭、在銘共蓋 薄茶器 富田重慶好朱丸棗 茶杓 利休象牙

茶碗 伊羅保椀形 替茶碗 高取燒遠州切形 杓立 青磁風風耳

火箸 紹鳴所持砂張 建水 砂張鐵鉢 蓋置 唐銅唐子遊

如上道具附を一覽すれば如何に堂々たる廣間飾りであるか直に夫れと分るであらう尙ほ席上には青貝雲鶴文字入盆の上に長生殿及び青松葉を盛り時代木地蒔繪火鉢と吳洲水鳥火入を備へた黒鯨手莢盆とを置並べて茲に薄茶の饗應があつたが此一座を飾つた五彩燦爛たる器物を一々品評せんとすれば殆んど際限がないから是は讀者の判斷に任せて扱て今度の茶會に就き一二聞き傳へた事共を報告せんに庵主は今度使はれた大秘藏の光悦障子茶碗を此上度々取出したらば或は粗相をせぬ

とも限らぬから今回を最後として最早重ねて之を使用せずと誓言された其處で大阪の戸田露朝が小間の床に飾られたソロリの花入と此茶碗とを見較べて口切てそろりと障子しめにけり

と即吟したのは一座大喝采であつたさうだ又根津青山が今度の茶會に對して何か一本參らんとて破れ窓の釜は餘りに寂過ぎたり阿蘭陀の向附は餘りに高過ぎたり廣間の朱丸棗は餘りに輕過ぎたりと評されたさうだが破れ窓の釜は障子の茶碗と先づ銘柄の對照を採らねばなるまい朱丸棗は今度喜壽祝ひに茶友より贈られた者だと云へば是れも論外とせねばなるまい唯阿蘭陀向附の丈けが膳に割合はして高過ぎた事は余も青山と同感である併し小間廣間滿艦飾の大茶會に唯此一點の非難だけで事濟みとは無類の大出來茶と云はねばならぬ是に於て余は此喜壽茶筵に滿腹の祝意を表し近く又八十壽茶會の如何なる趣向を以て現はれ來るかを待つ事としやう

古壁庵茶會

上

(大正十三年十二月廿三日)

好古學者白石村治翁は臘末二十三日正午上根岸町自宅古壁庵に歲暮の一會を催して益田鈍翁と余及び美術學校長正木直彦夫人とを招かれた翁が其庵室を古壁と稱する由來に就き嘗て翁より聞く所に據れば十數年前大和國法隆寺金堂壁畫保存の爲め其筋の人々が會議した時同寺五重の塔にも金堂同様矢張壁畫があつたらしいと云ふ説を出す者があつたので更に法隆寺を調べて見ると元祿年中桂昌院寄進で五重の塔の破壁を修復せられた際其壁土を吹に納めて爾來二百三十餘年間同寺に保藏してあると云ふので左らば其壁土を篩ひ分けて壁畫の有無を見證せんとて直に之を實行した處が金屬の佛器若くは古裂の斷片などが數々其中より現はれたばかりで壁畫の痕跡は皆目見當らぬので疑問は直様解決したが扱て其篩分けた壁土は此上保存する必要なければ寺邊の水田に抛棄せんと云ふのを白石翁が聞込んで

左る不用の者ならば悉皆拙者に與へよと云へば寺僧は厄介拂ひと喜んで二つ返事で承諾したので程なく之を東京に廻送した其一部で塗上げた一室なれば之を古壁庵と云ふのださうだ余は此由來を聞いて如何にも好古學者に相應しい着想だと感服して一度實見を希望して居たのに前回招がれた時事故あつて出席し得なかつたから今度は欣然佳招に應じて定刻上根岸の白石邸に推參すれば玄關より通りて奥の客間十疊が今日の寄附で床に掛けられた慈鎮和尚の消息に今年残日方に幾ばくならず見參便宜不容易候かの一節あり其日附が恰も今日即ち十二月二十三日となつて居るのに一同大に驚かされた而して此一軸の下には天平以前より天正時代に至るまでの經文、古文書など數々納めた高臺寺詩繪手箱を安置し床脇棚には時代矢立を飾り席上に唐物縫取敷物を敷いて桐洞詩繪火鉢鈍阿燒曳船手焙乾山赤繪寫火入を備へた蓑盆を置並べ背面に相阿彌筆山水六曲屏風半双を立廻して其片隅の桐木花瓶掛に鐵瓶を掛け茶盆に染附茶碗と天目釉香煎入とを取合せてあつた

中

好古學者の寄附は一風變つて古文書を床の間に飾り置くなど凡慮の及ぶ所でないが益田鈍翁は一々之を披見して庵主の丹精を感嘆し居る處に庵主が庭先より出迎はれたから鈍翁を先達として庭前に降立ち此寄附と玄關との間に差出でたる古壁庵へと繰込めば低き竹垣を以て庵室前を圍ひ其内側の蹲踞石の傍に湯桶を備へ置かれたから順次嗽いで入席の際簷間に古壁庵の三大字額の懸かりたるを見受けたが筆者は法隆寺現住職佐伯定胤僧正なりと云ふ扱て庵室は四疊敷の片隅を斜面に切りたる處を壁床とし建仁寺清拙和尚の大横物を掛けられた是れは和尚が末期の一句で其臨終間に執筆された者と覺しく幾分筆勢の滯滞した所もあるが大磐石の禪定力行間に活躍して一見肅敬の念を起さしむ而して其文句は

昆嵐卷空海水立

三十三天星斗濕

地神怒把鐵牛鞭

石火電光追莫及

珍重首坐大衆

正澄書判

曆應二年正月十七日

古壁庵茶會

曆應は北朝の年號で其二年は南朝の延元四年に當るから今を距る事五百八十七年前で清拙和尚が此一偈を書き筆を投じて溘焉として遷化せられたと云ふ事は高僧傳中に載せられて居る誠に稀代の墨蹟で表具も至つて結構である斯くて庵主は此一軸の説明を終りて直に炭手前に取掛られたが其器物は

釜 蘆屋松模様平釜

香合 祥瑞開扇

炭斗 竹組四方

羽箒 鶴

灰器 南蠻内溢

火箸 時代桑柄

右炭手前相濟むや引續き興津庵庖丁の懷石を運び出されたが根來塗膳椀皆具に二月堂粥食器の飯櫃など一々好古家の持料と首肯かるゝ器物で數々心入の献立があつたが餘り煩雜に亘るから今姑く之を省き懷石後元の寄附に復座すれば程なく風鈴五點の合圖があつたが此風鈴は法隆寺夢殿の簷端に釣られた者で鍍金に綠青の古色愛すべく之を打てばりん／＼として長く餘韻を留め好古家の合圖としては何様此れ以上の適品はなからうと思はれた

下

夢殿風鈴の合圖に促されて再び古壁庵に復座すれば爐邊に尹部耳附水指を置いて庵主の濃茶手前があつたが其器物は左の如し

茶入 金華山窯、船越伊豫守歌銘横雲

袋 義隆裂

茶杓 法眼空中作六十歳銘入

茶碗 長次郎黒樂

建水 木地曲

蓋置 青竹引切

茶 好の白

金華山窯茶入は船越伊豫守が新古今定家卿の

春の夜の夢のうき橋とたえして

峰にわかるゝ横雲の空

と云へる歌に因て横雲と名づけた者であるが多分瀬戸釉の景色より思ひ着いた者であらう空中作茶杓は例の極細字で六十歳光甫造の彫銘があつたが庵主は今年還曆に達したので今度之を用ひたらしく思はるゝ斯くて濃茶一巡するや同席で薄茶を點て水指は信樂焼で胴廻りに三日月形のヒツツキある者と換へられたが是れは庵主が雲州松江で掘出したもので今度之れに政宗と命名し正客鈍翁に其箱書附を

乞はれたが伊達政宗は三ヶ月を其兜の前立に用ひたと云ふ故實に因つたと云ふ事である又茶杓は此程正客鈍翁より庵主に贈られた者で其筒に

うつろはて久しかるべきにほひかな

さかりに見ゆる白菊の花

と云へる古歌を書附けられたのは庵主の還曆を祝しての作意でがなあらう尙ほ青井戸と常信下繪鶴の圖茶碗で薄茶の饗應があつたが好古家の茶事として百事其向きの趣味を以て充たされ殊に庵室の古壁は鼠色の細土で見掛は格別變つて居らぬが是れが千三百年前聖徳太子建立五重の塔の壁土かと思へば懐古の感興油然而起り半日斑鳩の古都に遊んだやうな心地がしたのは偏に好古博士の賜であるから茲に恭しく之を鳴謝し併せて其不老長久を祈る

青山歲暮

(大正十三年十二月廿三日)

上

根津青山が毎年臘尾青山自邸撫松庵で歲暮茶會を開かるゝ事は今年で最早六回に及んだが趣向萬端能く整うたのは今年が最上で從來當邸で催された各茶會中此點に於ては或は第一番であるかも知らぬ而して余等の參會したのは十二月二十三日に相客は團狸山大橋新太郎福井菊三郎梅澤鶴叟の五人であつた寄附は例の六疊敷で背面に堂上方寄合短冊張六枚折屏風を立て桐足附大火鉢同秋草詩繪手爐染附朱買臣火入を備へた道志眞塗手附煙草盆を置並べ新萩茶碗で香煎湯を汲出された扱て團翁の先達として廊下傳ひに撫松庵に繰込めば夜會の事とて花を先とし松浦鎮信作輪無二重切銘乙御前と云へる竹花入に庭花の寒菊と奈良紅葉を活けられた風情が又なく好かつた斯くて庵主は例の如く無造作に一同に挨拶して直に炭手前に取掛られたが其器物は

釜 與次郎作宗且銘瓢

爐縁 利休堂丸太

炭斗 宗品雲華燒炮烙

香合 吳洲赤玉大

火箸 桑角柄

灰匙 庸軒好桑柄

釜敷 時代籐組

利休堂丸太爐縁に宗旦銘罍釜の取合は歳暮茶會に寸分動かぬ所であるが釜の形は阿彌陀に似て胴廻りに罍殻の如く自然のヒツツキがあるので此銘を得たのである。千家傳來で言水と原叟との狂歌入文掛物が附屬して居る其原叟の方には今しばし喉のかわきをやめたまへ

それはかきがらははしほから

とあり宗品大砲烙に炭と灰とを盛合せ吳洲赤玉大香合を用ひたるなど故益田無爲庵の手癖を其まゝ見るやうなのは大出来茶と褒めずばなるまい扱て炭手前の後懐石は佐久間將監所持三角膳と根來椀で運び出されたが其献立及び器物は左の通りであつた

- | | | | | | |
|----|----------------|----|------------------------|----|-------------|
| 汁 | 田舎味噌、燕 | 向附 | 織部六角筒、鱈、防風、卯の花、胡瓜、山葵甘酢 | 椀 | 甘鯛、椎茸、細根大根 |
| 焼物 | うるみ椀、海老芋、うづら味噌 | 八寸 | 乾山梅の繪平針、百合、からすみ | 酒器 | 津銘、燒長口、銚子、唐 |
| 菓子 | 粟饅頭蒸して | | | | |

中

撫松庵の歳暮茶懐石は器物と共に大寂で吸物の一品を略したのも亦能く其氣分を現はして居た懐石後元の寄附に中立して程なく再び復席すれば床には遠州歳暮歌入文を掛けられたが其文句は左の通りである

彌兵衛下候仕合せよく珍重に候又花入を取り出し是もよそへ遣はしよき正月を可仕候秘藏のちや一ふく進じ候大ぶくに御たて可被下候せいぼのうた
おもひおくことはあまたのとし暮て
老そのもりのなけきをぞこる
をしといはゞ年の笑はむ老の身は
かはらでなげく暮をちぎらん

としの暮るをなげくほどめでたく候松花堂はなげくうたもあるまじく候明春可申承候かしく

權大輔殿

宗甫

此文は小堀遠州が奈良の老茶友長闍堂久保權大輔に送つた者で文面より察すれば

青山歳暮

松花堂昭乗が没した年か若くは其翌年邊りの歳暮なるべく此世に生き長らへて歳暮を嘆くのはまだしも仕合であるとの言分誠に感慨無量と謂ふべし斯くて庵主の濃茶手前を見れば其器物は左の如し

- 茶入 宗意耳附不味公箱 袋 青木廣東萌黄地小 茶碗 金海江月和尚箱書
- 茶杓 仙叟共筒銘物忘れ 水指 古備前銘鐵骨蓋ハ 建水 モール合子
- 蓋置 茶屋宗古竹引切銘

如上器物中宗意の耳附茶入は出来面白さばかりでなく世間極めて稀有な珍器である金海茶碗は寸松庵傳來と覺しく外箱に佐久間將監の書附があつて形稍締り此手に有り勝ちなる桃形洲濱形でないのが一風變つて居る古備前水指の奇古なる形に鐵骨と云ふ銘柄も面白く仙叟共筒茶杓の銘を物忘れといひ茶屋宗古作竹蓋置の名を立らすと云ふのも無論時節相應で大體器物及び銘柄の組合せ水も洩さぬ緊密さを示して故意か偶然か庵主の老熟俄に茲に至るべしとは失禮ながら豫想外と云はざるを得ぬ

下

撫松庵で濃茶手前終るや同席で薄茶の饗應あり川部太郎が代點を勤めたが水指は其儘置附け茶入は模様面白き繪獨樂と替り茶碗は濃茶の金海に一入作黒茶碗を配し茶杓は時代象牙建水蓋置總て同前で唯急所々々を取換へ成るべく器物を儉約した其辛棒強きに依りて歳暮の寂が一段に現はれたのは初心の茶人に眞似難き老熟と謂はねばならぬ斯くて干菓子の子代結及び落雁を金馬八角盆に盛つて薄茶を侷めつゝ打寛いで忘年の夜話に耽られたが主客入魂の間柄とて談笑中に馱洒落なども交つた其中で當夜の秀逸とも謂ふべきは席中で馬越化生翁の新宅の門は鎌倉の明月院より移し來つた者で日ヶ窪通より之を望めば何とやら山寺の如き感じがすると云ふ者があつた時大橋新太郎君が聞きも敢ず夫れは馬越山恭平寺と云ふ寺であらうと言はれたので一座アツと感心するや福井菊三郎君が更に註釋を加へて夫れは恭平寺ではなくて恭平爺であらうと言はれたので一同成程と合點したのも可笑しかつた又寄附の染附朱買臣火入は柴を擔いだ人物の模様があるので古來斯

く呼做されて居るのだが梅澤鶴叟が大橋君の間に答へて是れは朱買臣と申しますと言つた時夫れでは定めて非賣品であらうナと聞返したのも亦上出来の部に加へずばなるまい兎角上出来の茶會では來客の洒落までが上出来かと一同大笑ひとなつたが本來出来茶と云ふのは器物が悉く秀逸と云ふばかりでなく能く其茶題に相應して急所々に適品を配置し歳暮は歳暮の氣分を一座に漲らせて客を其境涯に融合せしむる妙諦に存するのである今度の撫松庵歳暮茶會は始中終毛髮の遺憾なく餘りに強腹なので何か一本と思ひ梅澤鶴叟等も鶴の目鷹の目種々其穴搜しに腐心したが遂に無條件降伏に終つたのは大正甲子掉尾の大成功茶會と謂ふべきである併し當庵主が來年も亦例に依つて歳暮茶會を催すものとすれば此出来茶に對して容易ならざる策戰計畫を要すべく或は鬼に笑はるゝかも知らぬが之を來年の景物として今より刮目して相待つ事としやう

脱仙と圓齋

上

當年冬季は茶事の復興とでも云ふのであらうか大茶會が各處に勃發し一一之を細報せんとすれば容易に新年茶道記に移れぬから已むなく二三省略する者もあつたが荒筋だけでも茲に披露して置きたいのは脱仙居士山下龜三郎君が新橋花月樓に催された安樂會當番の一會と八田圓齋が市外平塚村田向新宅開きの茶會である山下君は久しく紺足袋生の名を用ゐて居たが今度脱仙居士と改號して十一月二十五日安樂會當番の通知に拙者が安樂會員となつたのは故淨信院大徹正義居士俗名加藤正義君の誘引であるから今回は其恩誼に酬ゆる爲め故人の追善を營む一會たる事を御承知あれと書いてあつた誠とや鬼の眼にも涙とやらで如何にも殊勝の至りであるから當日參會して其飾附を見れば本席の床に八重葎しげれる宿のさびしさにと云へる定家卿の色紙を掛け古蘆屋霞眞形銘松永釜交趾狸香合名物灰被銘秋葉天目青井戸銘竹屋茶碗藤村庸軒竹中次茶器など從來加藤家で有名な名器が五彩燦爛として光を放ち廣間に於ては雪舟十六羅漢青磁千鳥香爐などの陳列あり別して

書院に飾られた金欄手瓢形花入の如き故人の潔癖を遺憾なく證明する綺麗品で客は右顧左眄殆んど應接に違ない程であつたが扱て一同正氣に復して熟々脱仙居士の出品如何と見れば寄附に掛けられた蘆雪の幽靈一幅と床脇棚に載せられた色備前の仕丁置物と廣間の棚に飾られた時代詩繪野鷄模様硯箱との三點のみであるので是は甚だ怪しからぬ故人の追善を名として加藤家の名品を持出させ己れは其蔭に隠れて來客に三拜九拜せしむる張良孔明跣足で逃げ出すと云ふ妙計に掛つて一同之を黙過したらば脱仙居士が後で如何なる大きな舌を出すやも知れずと其處は千軍萬馬往來の猛者のみが集まつて居る安樂會とて席の一隅より忽ち聲ありて今夜の會は故加藤正義居士の追善會なれば安樂會員たる山下脱仙居士當番の一會は更に來月を以て開會ありたしと云ふ新提案が出て來るや總員大賛成であつたから其後脱仙居士が今晚是れて首尾よく私の當番も終りましたと挨拶をしたが一人も之に耳を傾くる者がなかつた斯くて此一埒は如何に覺が附くであらうか或は茶事大審院の法廷に於て今後一大訴訟が起らぬとも限らぬから此處刮目して其成行を

監視するの必要があらうと思ふ

下

當冬催された茶會の中師走の十六日正午に八田圓齋が大震災後新築した庵室開きの一會があつた圓齋は加州産で茶事を嗜むこと生命の如く佗茶人として年中最も多く茶會を催す事は人の能く知る所であるが從來平塚村田向にある八田窯の附近に震災後一庵室を造り師走十六日正午を始めに數日茶友を招がれた其本席六疊の床には大徳寺清巖和尚筆萬里一條鐵五字一行を掛け床脇棚には井戸脇香爐を朱四方盆の上に載せて飾り爐には天猫甌口釜を掛け之れと似寄の道具を以て炭手前の後山崎盆に小丸椀で心入の懷石を運び出されたが中にも美事なる吳洲赤繪大平鉢に鯛の卵の花蒸を盛つて出された趣向が能く此廣間に相應して遺憾なく器物の妙用を示された後座は空中瓢形耳附花入に白玉椿と寒菊を活け古瀬戸肩衝茶入無地志野茶碗呼銘鶴山科宗甫共筒銘巖茶杓など例に依つて抜目なく器物を組合せたが志野茶碗は圓齋の年配に相當し又茶杓の作者山科宗甫なる者が何とやら圓齋の如

き佗茶人ではなかつたかと一層感興を深めたのである斯くて六疊茶室で濃茶一巡の後別席で薄茶を差上ぐべしと云ふので廊下傳ひに案内された一室は庭に面した長四疊で壁床に大津繪鬼の念佛を掛け向切の大爐に時代自在で越前蘆屋松竹梅眞形釜を釣り朝鮮唐津細水指黒平棗茶器大樋筒及び繪世戸雁の繪茶碗で此處に薄茶を點てられたが此長四疊の前には細長き竹縁があつて檐下に井筒形の蹲踞石を置き清泉がムラ／＼と其中より湧出で、末は流れて庭前の遣水となるの趣向見たりが如何にも清々しく佗茶人の常釜席としては大寂びで然かも氣が利いて心地よく幾回となく庵室建造を手がけた老練の結果を遺憾なく此處に發揮した者と覺しく圓齋が晩年安樂の餘生を此處に託して日々茶三昧に入る境涯は其天分なき富豪が千萬金を積むとも到底得られぬ幸福であるから余は之を數寄者の餘徳として此老茶人圓齋を祝福しやうと思ふ

甲子大正茶道記終

大正十四年七月二十五日 印刷
大正十四年七月三十日 發行

甲子大正茶道記

定價金四圓五十錢

著作
所有

著者 東京市赤坂區一木町八十二番地 高橋 義雄
發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 風間 成五
印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁

發行所

東京市神田區錦町一ノ一九番
振替口座東京一〇六三三番
電話神田四九貳番

慶文堂書



